

「そこへ行くのは誰だ？」彼は騎馬の聲を聞くと叫んだ。

「さう言ふのは我が勇敢な銃士だね？」とカルチナールは答へた。

「はい、閣下、私でございます。」

「いや、張番御苦勞。ではみなさん、やつと着いた。みなさんは左手の門からお入んなさい。」

さう云つて、カルチナールは軽く頭を下げ、従者を連れて右手へ向つた——この晩は陣營で寝るつもりなのである。

「さうさう！」ポルトースとアラミスとはカルチナールの耳に届かなくなると直ぐ聲を揃へて言つた——「カルチナールは夫人の要求した書類にサインをしたよ。」

「うん、知つてゐる。」アトースは靜かに答へた。「といふのは、それをこゝに持つてゐるのでね。」

彼等は屯所に着くと、早速ムースクトンを遣つて、ダルタニアンに斬濠を出次弟銃士の室へ来るやうにと傳へさせた。

一方、ミラデイーは最初カルチナールにもう一度會見して、委細をはなさうかとおもつたが、しかしさうするといきほひ自分の古疵が暴露することになるので、一と先づカルチナールの御用を首尾よくつとめたるへで、自分の仇を取つてもらふことに決心した。で、彼女は終夜馬をすゝめて、翌朝の七時にラ・ボワントに着き、八時には乗船した、そして、九時船は錨を捲上げて、英國へと出帆した。

第四十三章 サン・ジェルヴエイ稜堡

ダルタニアンは友人の屯所へ出懸けて行つて見ると、三人共同じ部屋へ集つてゐた。アトースは何か考へ込んでゐた。ポルトースは鬚を拵り、アラミスは青い天鵞絨の表紙の祈禱書を讀んでゐた。

「やあ、諸君、」ダルタニアンは聲を掛けた、「何か餘程大事な話があるんだらうね、さう思つて、一晩堡で働いた後を——休みもせずによつて來たのだ。ねえ、君達は何故あそこへ來なかつたのだい？中々激戦だつたぜ！」

「おれ達は別の處へ行つてゐたのだ、そこも決して生やさしくはなかつたよ。」とポルトースは口鬚を彼獨得の拵り方をしながら答へた。

「黙つてゐ給へ！」アトースはポルトースを制した、それからアラミスに向ひ——「ねえアラミス、君は一昨日バルバイヨー酒場で朝飯を食つたつけねえ？ あそこは何うだい？」

「いや非道い目に會つたよ、まるで精進日で、食ふものが何もなかつた。」

「何だつて、港でありながら魚がなかつたつて？」

「なんでも、カルチナールが築いてゐる堤のせいで魚がみんな沖へ逃げてしまつたんだといふ話だよ。」アラミスは斯う答へながら、また祈禱書を取上げた。

「だがそれは私の知りたことではないのだ、アラミス。」とアトースは續けた。「その時君は獨りつ

きりだつたかい、誰も邪魔つけな者はあつたかえ？」

「さうだね、餘り邪魔者はあつたやうに思ふね。」

「ぢや、バルバイヨーへ行かうぢやないか。こゝの壁はまるで薄い紙同然だから。」

アトリスの遣口に慣れてゐるダルタニアンは、彼の言葉付や身振りや眼付などから直ぐに何か重大な事情があるのだと悟つて、彼と腕を組んで、一言も云はずに出懸けた。ポルトリスはアラミスと話をしながらその後から歩いて來た。

途中で彼等はグリモーに出會つた。アトリスは手招きして隨つて來るやうに吩咐けた。

酒場へ着いたのは朝の七時で、朝日の光がやうやく現れて來たところであつた。彼等は朝食を命じて、亭主が静かな部屋ですと保證した一室へ通つた。けれども不幸にして、この時間は悪い時間であつた。朝の太鼓がつい今しがた鳴つたばかりで、誰もが寢足りない重い氣持を拂ひ退けるために、この酒場へ一杯飲りに來る頃合であつた。龍騎兵だの、スキス兵だの衛兵だの銃士だの、輕騎兵だのがこの家の亭主の商賣には大變都合な、併し我が四人の友の計畫には大變不都合な早さで陸續とやつて來た。

「ダルタニアン——」アトリスは言つた、「さあ、君の昨夕の働きを先づ聞かうぢやないか、その後で私達の話をさう。」併し、ダルタニアンがそれに答へようとすると、騎を揺りながらブランデーの盃を嘗めてゐる。

た輕騎兵の一人が突然口を挟んだ——

「さうさう、衛兵の諸君も昨晩塹壕にゐたと聞きました。でも餘り成績がよくなかつたと云ふぢやありませんか。」

「いや、どこかの堡を占領したのでしたつけね？」麥酒のコップでラム酒を飲んでゐた一人のスキス兵も傍から訊ねた。

「ええ、」ダルタニアンは軽く頭を下げながら言つた。「私達はその名譽を得ましたよ。」

「してそれは何の堡ですね？」一人の龍騎兵が料理をさせに持つて來た鷺鳥に軍刀を突刺しながら訊ねた。

「サン・ジェルヴェイの堡です。」

「激戦だつたでせうな？」

「ええ。味方は五人位、敵は九人か十人位死にましたよ。」

「併し恐らく、輕騎兵が言つた——敵の方でもその堡を取戻すために今朝はきつと兵隊を繰出すでせうな。」

「諸君、」アトリスが言つた——「賭をしよう！」

「賭！」スキス兵と輕騎兵とが聲を揃へて叫んだ。

「ちよつと待つてくれ給へ。」龍騎兵は燧燼の飾りの大きな鐵の犬の上へ軍刀を唾を吐くやうに投出

して、言つた——「待つてくれ給へ、私もその中に入るよ。おーい亭主！早く受皿を持つて来い、脂の滴を入れるんだ。」

「よろしい、賭だ！」輕騎兵は叫んだ。

「ぢや、ド・ビュシニイさん、かういふ事にしよう。」アトースは言つた。「私の友人、ポルトース、アラミス、ダルタニアン、三君と私とはサン・ジェルヴェイへ行つて朝飯を喰はう、して敵が私達を追拂ふために何んなことをしやうと、時計で一時間そこに踏み留まつてゐよう。」

ポルトースとアラミスとは互ひに眼を見交した。アトースの意が那邊にあるかを了解し始めたのである。

「待ち給へ。」ダルタニアンはアトースの耳許へ身を屈めて囁いた、「君は無慈悲にも我々四人を死なせようとしてゐるね。」

「もし行かなきゃ、尙ほ確かに殺されるだらうよ。」とアトースは答へたきりであつた。

「何と諸君、」ポルトースは椅子の中に踏反りかへつて、口髭を拈りながら言つた——「立派な賭ぢやないか。」

「承知した。」ド・ビュシニイは答へた。「ではこつちの賭金も極めよう。」

「君達は四人だ。」アトースは言つた。「してこつちも四人だ。そこで八人の晝飯——それが丁度いぢやないか。」

「丁度い——」三人は叫んだ、そしてこの會話中終りまで黙してゐたもう一人の聞手も、承諾の印に頭を下げた。

「お食事の支度ができましたが。」亭主が横合から言つた。

「さうか、ではこゝへ持つて来て呉れ給へ。」とアトースは吩咐けた。

彼はグリモーを呼び、片隅にあつた大きな籠を指さして、亭主の運んで来た食物をナフキンに包ませた。そしてそれからこの四人の青年は、驚き呆れてゐるその場の人々に軽く頭を下げ、サン・ジェルヴェイの堡へと出懸けた。その後からはグリモーが、何處へ行くかも知らず、また何時もの懼はしでそれを訊ねようともせず、例の籠を抱へて黙々と隨いて行つた。

野濠の線以外に出て、邊りに人氣のない野原になると、これから何をするのか全然知らないダルタニアンは、今こそ説明を求めるときだと思つて——

「ねえアトース、これから何處へ行くのか教へてくれないか。」と訊ねた。

「何處へつて、堡へ行くのだよ。」アトースは答へた。「あそこへ朝飯を喰へに行くのだ。」

「だが朝飯なら何故バルバイヨーで喰べないのだ？」

「それは君に話したい非常に重大な事があるのだが、あの酒場ではあの煩い奴等が出たり入つたりして、絶えずおれ達に話掛けるので、五分と話合つてゐることができないからさ。あそこなら、アトースは堡の方を指さして、言ひ續けた。「誰も邪魔しに來ない。」

「併しあんな危険な場所でも丘か海岸かにどこか人目に立たぬ處がありさうなものだがねえ。」
「我々四人が揃つて相談し合つてゐるところを誰かに見られるやうな處かえ——忽ち密偵に見付かつて十五分と経たぬ内にカルヂナールの耳へ入るよ。」

「それもさうだが、」ダルタニアンは言つた。「我々が討たれないとも限らない。」
「併し最も怖るべき弾丸は必ずしも敵の弾丸でないといふことを君はよく知つてゐる筈だ。」
「それにしてもこんなことになるのなら、」ポルトースは言つた。「少くも鐵砲を持つて來るのだつた。」

けれどもアトースはこれに答へて言ふのだつた。「さういふ無用な重荷を擔ぎ込むには及ばない。ダルタニアンは先刻言はなかつたか、昨晚の戦ひで兩軍とも七八人宛の死者があつたと。して見ると、彼等の小銃や彈丸が未だそつくりその儘残つてゐる筈だ。即ち、四挺の鐵砲と十二發の彈丸の代りに、十五六挺の小銃と百回ばかりの彈藥とが得られるわけだ。」

「おふ、アトース！」アラミスは叫んだ。「君は實際偉い人間だ！」
ポルトースも納得の印に頭を下げた。ダルタニアンだけは全く得心したとは見えなかつた。堡に着くと、四人は後を振り返つて見た。各軍隊からの三百人以上の兵士が陣營の入口に集つてゐた、そして別に一塊となつて、龍騎兵やスミス兵等がこつちを眺めてゐるのが見えた。

に、この挨拶に答へた。これがすむと、四人の姿は堡の中に隠れてしまつた。

第四十四章 銃士等の相談會

アトースの豫想通り、堡の中には十二三の敵味方の屍體が轉がつてゐた。

「諸君、」今度の遠征の指揮格であるアトースは言つた——「グリモーが食卓の用意をしてゐる間に、我々は先づ小銃や彈丸を集めようぢやないか。それに、集めてゐる間にお話もできる。この方々は、と彼は屍體を指さして言ひたした。「我々の話を聞きやしまい。」

「だが、それにしても、そいつらは濠の中へ投込んでしまはうよ。」とポルトースは言つた。「衣囊に何も持たないのを確かしてから——。」

「それはグリモーの仕事だ。それから體も役に立ちさうだ。」

「この屍體も役に立つて！」ポルトースは思はず叫んだ。「馬鹿な！ 氣でも狂つたのか？」

「さうかるはずみに判断するものでない。そんな事を言つてゐるよりか、鐵砲に彈丸を詰めるとしよう。」

四人は十二挺の鐵砲へ丸を籠め始めた、そして丁度最後の鐵砲を終つた時、グリモーが朝飯の支度の出來たことを知らせた。

「ところで、」ダルタニアンは言つた。「もう誰にも立聞きされる恐れがないから、その秘密話といふ

のを聞かせて貰ひたいものだ。」

「實はねえ、」アトースは答へた。「昨晚ミラデイーに會つたのだ。」

「マルタニアンはその時丁度酒盃を肩へ持つて行つたところであつたが、ミラデイーの名を聞く
と、手がふるふる震へ出したので、中味を零さぬやうにと酒盃を地の上へ置くのだつた。」

「君は君の細——」

「しつ！」アトースは遮つた、「君は外の人達が私の身の上のことを君のやうに立入つては知らない
ことを忘れたのか？ 私はミラデイーに會つたのだ。」

「して何處でそんな事が起きたのだい？」

「こゝから二里ばかり離れた、赤鳩舎といふ旗亭でだ。」

「そんなら、おれの命はもうないものだ。」

「いや、まださう悪い事態ぢやない。」アトースは答へた。「といふのは、今頃は、あの女は佛蘭西の
海岸を離れたに違ひないのだ。」

マルタニアンはほろと息を吐いた。

「だが、あの夫人は一體何なのだい？」とポルトースが訊ねた。

「美しい女だよ。」アトースはさう言つて、閃々する酒の盃を一口啜つた。「あの亭主のやくざ
が——」

「美しい女だよ、その美しい女にマルタニアンがある筈すべからざることをしたので、あの
女が復讐をしようとして一生懸命になつてゐるのだ——」

「一月前には、鐵砲で射ち殺させようとした、一週
間前には、毒酒を送つてよこした、そして昨日は、カルデナールにマルタニアンの首を要求した。」

「なに！ カルデナールに私の首を要求したつて？」マルタニアンは落膽して武器をばつたり落し
た。「もう腕いても駄目だ、この場で頭を射ち碎いた方がいゝかも知れん、さうすれば萬事がことず
みになるのだ。」

「そんな馬鹿なことは何うにも手のつけやうがなくなつてから最後にすることだよ。」とアトースは
慰めた。

「だが斯う敵があつては、おれは所詮逃れられない。第一に、ムアンの知らない敵がある、それから
私が四ヶ所の傷を加へてやつたド・ワルド、次に身の祕密を私に見付けられたミラデイー、して、最
後にカルデナールだ、彼の復讐を私は邪魔をした。」

「だが、それで唯つた四人ぢやないか、おれ達も四人ある——一人一人宛の勝負だよ。や！ グリモ
ーの合圖が本統なら、おれ達は今遙かに多勢の敵と勝負をすることになるぞ。グリモー、何うしたの
だ？ 何が見えるのだ？」

「二十人位の一隊が見えます。」

「何の位離れてゐるね？」

「何の位離れてゐるね？」

「五百歩ばかりでございませう。」

「よし！ 未だこの鶏肉を食ひ終り、一杯の酒を飲む暇がある。ダルタニアン、君の健康のため
に！」

「君の健康の爲に！」アラミスとポルトースも同じく乾盃した。

「有難う、折角の御厚意も餘り私のためにならないやうな氣がする。」

「馬鹿な！」アトースは言った、「モハメット教徒の言ふやうに神は大なる哉だ。未來は神様の手
中にあるのだよ。」さう云ふと、酒をぐいと飲み干して盃を下へ置き、無造作に立上つて、手近の小
銃を取上げ、砲眼の方へつかつかと歩いて行つた。他の三人も彼に倣つた。グリモーは彼等の後に控
へて、小銃に弾丸を籠める役目を仰付かつた。

間もなく、一隊の敵兵が現れた。彼等はこの堡と市街との間の通路になつてゐる、狭い藪漕様の
道に沿うて進んで來た。

「ふん！」アトースは言った。「あんな雑嘴や撞木鍬や鋤など、固めた奴等二十人ばかりに構つて
ゐては間尺に合はんぞ！ グリモーに吩咐けて、歸つて自分等の仕事をしてゐると合圖させやう、屹
度穩かに退散するぞ。」

「私はそんなことはあるまいと思ふよ。」ダルタニアンは言った。「見給へ、彼等は決然として進んで
來るはなほなほ。」

「あれは我々の姿が目に入らんからだよ。」

「私はあるな哀れた市民共を射つ氣になれん。」とアラミスが言った。

「アラミスの言ふ通りだ。」アトースは直ぐに賛成した。「私は彼奴等に注意を與へてやる。」

「おい何をしようとするのだ？」ダルタニアンは驚いて叫んだ。「射たれるぞ、君。」

併しアトースはこの警告に耳も籍さなかつた、そして壘の破目に登り、片手に銃を握り、片手に帽
子を擲んで――

「諸君！」と彼は、この突然現れた彼の姿に吃驚して堡から五十歩ばかりのところまで立止つた敵兵
共に、恭々しく一禮して言葉を掛けた――「諸君、我々はこの堡で唯今食事中なのです。諸君も、
朝食の邪魔をされる程世に不愉快なことがないといふことは、よく御存知でせう。そこで諸君に切に
お願ひするのです、もし諸君が眞に此處に用事がありなさるのなら、我々の御馳走の濟むまで待つ
か、もう暫らくして今一度來るかしていただきたい、――いや、それよりも遙かにいゝのは、諸君も
逆賊の側を去つて我々と一緒に佛蘭西王のために乾盃を擧げることですな。」

「用心し給へ。アトース！」ダルタニアンは呼んだ。「彼奴等が君を狙つてゐるのが見えないか？」

「大丈夫だ、彼奴等は高が市民だ――射つたつて中たるものか。」

事實、その瞬間四發の弾丸が發射され、その丸はアトースの廻りにヒュー／＼と唸りを立て、飛ん
だが、一發として彼の體に觸つたものはなかつた。

四發の彈丸がその返禮に早速發射された、併し今度は攻撃側よりも遙かに上手な狙ひで、三人の兵士は仆れ、工兵の一人は負傷したのであつた。

「グリモー！」アトースは破目の上から呼んだ。「別の鐵砲だ。」

グリモーは直ぐに代りを持つて行つた。三人の友も彈を籠め直した。第一回目の射撃に續いて直ぐ第二回目は行はれ、伍長と二人の工兵が仆れた。残りの者共は一散に逃げだした。

「さあ、諸君、突撃だ！」アトースは叫んだ。そして四人は堡から飛出したが、敵は市街へ入るまで後をも見ずに逃げて行つたので、戦利品として四挺の小銃と伍長の槍とを分捕つて元へ戻つた。

「グリモー、鐵砲に彈を詰めて置け。」アトースは言つた。「では諸君、又朝飯と話を續けようぢやないか。何處まで話したつね？」

「カルヂナールに私の首を要求してから、佛蘭西の海岸を去つたところまでだ。」とダルタニアンは答へた。「して何處へミラディーは行くのだい？」

「英國へ行くのだ。」アトースは言つた。「バッキンガム公を暗殺するかさせるかしに——」

「ダルタニアンは思はず呀つと驚愕と恐怖との叫び聲を擧げた。「だがそれは破廉恥なことだ——」と彼は叫んだ。

「いや、そのことに就ては、私は少しも構はないのだよ、君。おいグリモー、彼は突然言葉を切つて従者を呼んだ——」伍長の槍を持つて來て、ナフキンをそれへ結びつけて、堡の端に縛りつけろ、

そしてあの逆賊共に王の勇戦で忠義な家來が相手だといふことを知らせてやるがいよ。」

直ぐに白い旗が四人の友の頭の上に翻へつた。喜びの叫び、賞讃の雷聲が陣營の方から起つた。

「何だつて！」ダルタニアンはアトースの顔を見た。「君はミラディーがバッキンガム公を暗殺したつてさせたつてちつとも構はないつて？ 公爵は我々の知己だぜ。」

「公爵は英國人だ、公爵は我々と戦つてゐるのだ、だから公爵にはミラディーの好きなことをさせて置かうぢやないか。おれは公爵のことは酒の空瓶同様になつとも構はないのだ。」

アトースは斯う言ひさま、手に掴んでゐた瓶を——唯つた今自分の盃へ最後の一滴を注いで空にした瓶を、十五六歩先へ放り投げた。

「一寸待ち給へ。」ダルタニアンは言つた。「私はそんな風にバッキンガム公を見捨てはしないよ、公爵は我々に素敵な駿馬を下さつた。」

「その上非常に美しい鞍までだ。」とポルトースも付加へた。

「それに、アラミスも言つた。「神様は罪人の改心を望み給ふが、死は望み給はぬ。」

「そんなに諸君が言ふなら、その問題は又あとで話合ふことにして、こゝに一寸面白いことがあるのだ、といふのはあの女がカルヂナールからねだり取つた許可書のことだ、あれさへあればあの女は、

ダルタニアン、君ばかりか、恐らくは我々全部をも勝手に追拂ふことができるのだぜ。」

「してその書類はまだ女の手にあるのか？」

「いや、それは私の手に移つた。こゝにある。」アトースはかう答へて、上衣のポケットからその貴重な書付を取出した。ダルタニアンはそれをぶる／＼震へる手で開いた。

「こんな書付は破いてしまはなければいかん！」彼は自分の死の宣告文を読むやうな気がしたのだ。

「破るところか、極く／＼大切に藏まつて置かなければならんよ。」とアトースは遮つた。「たとへこれを藏ふだけの金貨を呉れても、この書付は手放したくないのだ。」

「してミラデイーは今頃どうしてゐるだらうね？」ダルタニアンは訊ねた。

「さうだね、アトースは平然として言つた。「あの女は多分カルヂナールに、アトースといふ忌はし銃士が暴力で大事の許可證を奪取つて行つたと手紙を書いてるだらうよ、してその中で、そのアトースや、それから又その二人の友人ポルトース及びアラミスを追拂ふやうにと勧めるだらうよ。してカルヂナールはその三人が昨夕行を共にしたあの者達だと直ぐに思出して、その内何日か上天氣の朝にでもダルタニアンを逮捕させると、獨りで寂しがらないやうにと、おれ達をもバステイルの牢若へ仲間入りさせるだらうよ。」

これを聞いてポルトースは言つた——「おれはかう思ふね——あの忌はしいミラデイーの頸玉を振切つてやる方が、この哀れなユグノー派の悪魔共の頸玉を振切るより罪が浅いとね！」

「僧院長は何う思ふ？」静かにアトースは訊ねた。

「私はポルトースの意見と全く同じだ。」とアラミスは答へた。

「私もだ。」ダルタニアンも言つた。

「だが、アトース、君はあの女を掌中に握つた時、何故溺死さすか、縊り殺すかしなかつたのだい？」ポルトースは詰つた。「二度と歸らぬものは死人ばかりだ。」

「君はさう思ふかね？」アトースはかう答へて、暗い微笑を浮べた——それはダルタニアンのみが了解できる微笑だつたのだ。

「私にいゝ考へがある。」ダルタニアンが言出した。そして、それを聞かうと三人の銃士が膝を進めた時、突然グリモーが叫んだ——「御用意なさいませ！」

青年達は急いで立上つて、小銃の方へ走つた。今度は二十四五人の、併しもう工兵ではなくて守備隊の兵士共が進んで來た。

「陣營へ引返さうか？」ポルトースは言つた。「多勢に無勢だ。」

「いけない、といふのは三つの理由があるからだ。」アトースは答へた。「第一に、我々はまだ朝飯を食べ終つてゐない。第二に、我々にはまだ相談すべき重大な問題が残つてゐる。して第三に、賭をした時間の経つまでに未だ十分の間がある。」

そして彼はこれからの戦鬪方針をざつと説明してから、かう附加へた——「では諸君、彈藥を浪費しないで下さい、それには夫々の人間を極めるがいゝ。」

三人はアトースの言ふ通りにした。

四挺の鐵砲は轟然と唯一爆音を發したのみであつた、そして四人の敵が仆れた。

太鼓がそれに應じて鳴り響き、敵の小隊は突撃に移つた。アトリスの側では後三回の發射毎に少くも二人づゝの敵を仆した、併しそれでも生残つた者達の進撃は少しも撓まなかつた。そして堡の麓に着いた時、彼等の數はまだ十二人以上もゐた。最後の砲火を浴びせかけたが、それも彼等を阻むには至らなかつた。彼等は濠へ飛込んで、壘の破目を攀ち登り始めた。

「さあ、諸君。」アトリスは呼ばゝつた。「彼奴等を一撃でやつつけるんだ。壘壁へ！ 壘壁へ！」そして四人はグリモーにも手傳はせて、廣い壘壁を銃身で叩き落とし始めた。それは大風に揺られたやうに傾いて、やがて根元からぐらぐらと緩むと、恐ろしい轟音を立て、濠の中へ打倒れた。物凄いい叫喚がその時聞え、埃の雲が天に昇つた、そして——それで終ひであつた。

「一人残らず壓潰せたらうか？」アトリスが言つた。

「いや、」ポルトリスは答へた——「あそこへ二三人跛を引いて逃げて行くよ。」

アトリスは時計を眺めた——「諸君、我々はこれで一時間居たことになる。で、賭には勝つたが、我々はまだダルタニアン考へを聞いてゐない。」

そしてこの銃士は、何時もの通り自若として、朝食の残りの前に坐つた。

「では私の計畫を聞いてくれるのだね？」ダルタニアンは言つた。「私はもう一度英國に渡つて、バクシンガム公に會ひ、陰謀の注意をして上げようと思ふ。」

「そんなことは出来ない、」アトリスは冷たく言つた。「前に君の行つた時は戦争中でなかつた。バクシンガム公は味方で、敵でなかつた。君が今言出したことは殆ど反逆に類する。」

ダルタニアンは理の當然に黙してしまつた。

「だが、私も亦私で考へがある。」とポルトリスが言出した。「私はトレヴィールさんに賜暇を願はうと思ふ、その口實は何とでも諸君がよろしく考へ出してくれ給へ、私はさういふ事は餘り得手でないのだ。で、ミラデーは私を知らないから、私は向うに何の警戒心も起さずに近付けるわけだ。して、うまくその美人を捕まへて、縊り殺してやるつもりだ。」

「飛んでもない！」アラミスが叫んだ。「女を殺すつて——いかん！ 聞き給へ、こゝに一番正しい方法がある——先づこの事を王妃様に御報告するのだ。」

「うん、さうだ！」ダルタニアンとポルトリスとが一緒に叫んだ。「やつと本筋に入つて来たぞ。」

「王妃様に御報告する？」アトリスは言つた。「して何うすればそれが出来るのだ？ 宮中に何か傳手があるのかい？ 陣營中に知れないやうに、巴里へ使ひを出せるだらうか？ こゝと巴里との間は百四十里も離れてゐる、我々の手紙がアンジェールに着かない内に、我々自身が土牢へ入つてゐるだらうよ。」

「王妃様に手紙を無事にお渡し申上げるといふことなら、」アラミスは鳥渡顔を覗らめながら——「それは私自身が引受けよう。私はツールに中々腕のある人を知つてゐるから——」

アラミスはアトリスがニヤリと笑ふのを見て口を噤んだ。

「ぢや、アトリス、君はこの計畫を探らないのだね？」

「いや、全然排斥するといふのではないが、たゞアラミス自身が陣營を去るわけにいかないといふ事を言ひたいのだ、して我々以外の者では、出發後二時間も経たぬ内に、カルヂナールの密偵共が君の手紙を諜記してしまひ、君と君のツールの人とが直ぐに捕まつて牢屋へ放込まれないとは、誰が保證できやう。やつ！」

彼は突然叫んだ。「街で何が始まつたのだらう？」

四人は耳を澄ました、と太鼓の音が瞭然聞えて來た。

「彼奴等は屹度一聯隊全部を寄越す氣なんだらう。」とアトリスは續けた。「だが、街と此處の間は二十三分の行進の距離だ。我々が計畫を立て終つても尙ほ時間は有り餘る位だ。もし此處を去つたら、こんな都合のいゝ場所は二度と探せまい。おゝ待ち給へ、いゝ考へが胸に浮んだ。だが、それを話す前に、グリモーに吩咐けることがある。」

アトリスは從者を傍へ呼んで、堡の中に横はつてゐる屍體を指さしながら――

「グリモー、こいつを擔いで行つて、壘壁へ眞直ぐにおつ立てろ。して帽子を被せ、銃を持たせるのだぞ。」

グリモーは直ぐにこの仕事に取掛つた。

「かうして置いて、アトリスは言つた。「では、私の考への方に戻らう。あの女には義理の兄があつた筈だね。その人の名は何といふのだい？」

「ウインター卿だ。」

「今何處に居るだらう？」

「戦争の噂が傳はると直ぐロンドンへ戻つたよ。」

「よし、我々の入用な男が丁度居るわけだ。我々が報知しなければならぬのはこの男にだよ、我々は彼に彼の義妹か或人を暗殺しようとしてゐることを告げて、あの女から眼を離さぬやうにと頼まなければならぬ。ロンドンにもマドロネットの建物のやうなものが屹度あらう。彼は義妹をそこへ入れてくれるに違ひない、さうすれば我々も安心だ。」

「うん、そこからまた出て來る迄はね。」とダルタニアンは言つた。

「いや君は餘り多くを求め過ぎるよ。私は君に持つてるだけのものは皆あげちやつて、私の袋の中は空っぽなんだよ。」

「それは我々の計畫でできる内で一番いゝ方法だと思ふ。」アラミスは言つた。「では、王妃様とウインター卿とへ同時に知らせよう。」

「だが、誰に一通をロンドンへもう一通をツールへ持たせてやらう？」

「私はバザンなら大丈夫だと思ふ。」アラミスが答へた。

「私もプランシエの責任を負ふ。」とダルタニアンは附加へた。

「ぢや、今日早速手紙を書かう、して二人に幾らか金をやつて、旅立たせよう。」

「金をやる？」アトリスは言つた、「アラミス、君は金を持つてゐるのかい？」
四人は互ひに眼を見交した、そして一沫の曇りが眉の上を過ぎた。

「やあ、見給へ！」ダルトニアンが突然叫んだ。「遙か向うに黒や赤の點々が見える。アトリスが言つたやうに、紛れもない一軍隊だ。」

「成程、居るね。」アトリスは言つた。「グリモー、仕事は終つたか？」

グリモーは黙つて頷いて、いかにも繪畫的な姿勢に据ゑた十二の屍體の方を指さした——
銃を擔ぎ、或者は狙ひを付けてゐるやうに見え、或者は手に劍を握つてゐた。

「では陣を引拂ふとしようよ。」アトリスは言つた。「我々は一時間を賭けたのに、一時間半も踏留まつてゐた。それにもう相談し合ふこともないし、ぢや諸君、引上げよう。」

グリモーは籠や細々したものを持つて既に退却を始めてゐた。四人の友は彼の後に續いた、そして十二三歩ばかり行つたその時——

「おゝ！我々は何といふことをしたものだ！」とアトリスが叫んだ。

「何か忘れものをしたのかい？」アラミスが訊ねた。

「旗だよ！たとへナフキンであらうと、苟くも旗を敵の手に置いて来てはいけない。」

そしてアトリスは堡へと駆戻り、壇上に登つて、旗を引下ろした。併し、その時はもうラ・ロシエ軍は番砲距離の内に来てゐたので、このまるで面白半分に敵の砲火に身を曝したのであるかのやう

に見える男に向つて、猛烈な射撃を開始したのであつた。けれども、彼アトリスは冥護を受けてゐると言つてもいゝのかも知れなかつた、弾丸は彼の廻りにヒューヒューと唸つて、而も彼は何の傷も受けなかつた。アトリスは市街の方に背を向けると、旗を振つて陣營へ挨拶した。高い叫聲が兩側に木霊した——一方からは怒りの叫び、他方からは熱狂の叫びが。

續いて第二回目の射撃が行はれ、三個の弾丸がナフキンの旗を貫いた。全陣營を擧げてかう呼ばはるのが聞えた——

「下りろ！下りろ！」

アトリスは悠々と下りた。彼を案じて待兼ねてゐた仲間達は、歡聲を擧げて彼の歸りを迎へた。

「さあ、アトリス、急いで行かう。」ダルトニアンは云つた。「我々はもう金の外は萬事うまく行つたんだ、今更殺されてはつまらない。」

併しアトリスは何時もの尊大な歩振りをいつかな變へようとしなかつた、して三人の友人も、どんな抗議も無駄と分つたので、彼の歩調に合せて歩き出した。一二分程経つて、四人は猛烈な射撃の音を聞いた。

「あれは何だらう？」ポルトリスは訊ねた。「何を射つてゐるのだらう！こつちへは弾も飛んで來ないし、人影も見えない。」

「彼等は屍體に向つて發射してゐるのだ！」アトリスは答へた。「おや！ダルトニアン、君の手は何う

したのだ。血が滲んでゐるぢやないか？」

「ほんの擦傷だよ。」ダルタニアンは答へた。「壘壁の石と指輪の石との間に指を嵌めて、皮膚が切れたのだ。」

「おゝー」ポルトースは叫んだ。「本統にイヤだ。ダイヤがあるんなら、我々は金がないなど、愚癡るに及ばんぢやないか？ このダイヤを賣りやいよ。」

「だが。」ダルタニアンは言つた。「これは王妃様のダイヤだ。」

「だから尙更理由が立つのだ。」とアトースも言つた。「王妃様が御自分のお愛しなざるパツキンガム公をお助けなさる、これ程正しいことはある筈がない——王妃様が御自分の味方の我々をお助け下さる、これ程善いことはある筈がない。そのダイヤを賣らうよ。」

四人は間もなく營門に着いた。そこには二千人以上の人々が、芝居でも見るやうに、四人の幸運な暴擧を眺めてゐた。そこには「衛兵萬歳！」「銃士萬歳！」の叫び聲しか聞えなかつた。ド・ビュシユニイは眞先に飛んで来てアトースの手を握り、賭に負けたことを承認した。その後から例の龍騎兵とスミス兵とが、してその後から彼等のすべての僚友がやつて来て取巻いた。そこには果てしなく、祝詞や握手や抱擁や、ラ・ロシエル軍に對する嘲笑などが續いた。

その夜、カルチナルはトレヴィイルに、今は全陣營ぢうの話題になつてゐるこの手柄のことを話した。この冒險の悉細をそれの主人公であつた者達の口から直接に聞いてゐたトレヴィイルは、ナフ

キンの挿話も忘れず、仔細に涉つてそれを窺下に物語つた。

「トレヴィイルさん、」カルチナルは言つた。「このナフキンをわしに借して下さらんか。わしはこれへ金で三つの百合花（註 佛王の徽章）を縫取させて、あんたの隊の軍旗としてあんたにお戻ししよう。」

「閣下、併しそれは衛兵に悪いかと思はれます。ダルタニアンは私の部下でなくて、デサール氏の部下でございます。」

「では、あの男を連れて來なさい、互ひにあゝも愛しあつてゐるあの四人の勇士が、同じ隊に勤務してゐないといふことはよろしくない。」

その同じ夜、ド・トレヴィイルはこの吉報を三人の銃士とダルタニアンとに傳へて、彼等を翌朝の朝食に招待した。ダルタニアンは嬉しさが抑へ切れなかつた。實に、彼の全生涯の夢は銃士になることであつたのだ。彼はその夜早速デサール隊長のところへ行つて、昇級のことを報告した。彼を寵愛してゐたデサールは、軍隊が變ると新しい軍裝費用が掛るので、何んな援助でもして上げようと言つて呉れた。ダルタニアンはこの援助を斷つたが、併しこの機會を幸ひだと思つたので、例のダイヤの値踏を頼み、實は金に代へたいのだと言添へた。

翌朝八時、デサールの從者がダルタニアンの處へ來て、金貨で七千リール入つてゐる囊を彼に手渡しした。それは王妃のダイヤの値であつた。

第四十五章 一家族の私事

トレヴィイル氏の朝餐會は中々に楽しいものであつた。ダルタニアンは早くも制服を着用して出て來てゐた。幸ひアラミスと同じ位の脊恰好であり、アラミスは同じ着替を一通り備へてゐたので、早速上から下まで役に立つたわけなのである。

ダルタニアンはその日一日を陣地中の通りといふ通りで銃士の軍服を見せびらかして過した。

其晩約東の時間に、四人の友は集つた。残つてゐる問題は三つきりであつた、——ミラデーの義弟へやる手紙は何う書くべきだらうか、ツールの賢者へやる手紙は何う書くべきだらうか。してどの從者を使者に立てるべきだらうか。使者の問題では、四人が銘々自分の從者を推薦して譲らなかつた。アトリスは主人が口を開く事を許さぬ内は決して物を言はぬグリモアの慎重な點を誇つた。ポルトリスは男四人を手玉にとる巨漢ムースケトンの腕力を自慢し、アラミスはバザンの利口さを持つて、この候補者に華々しい頌詞を呈した、して最後に、ダルタニアンはフランスの勇氣に厚く信頼して、あの六ヶ敷いブローニユの事件でどんなによく働いたかを皆なの記憶から呼出させるに努めた。

「いやいや！ それでも同じやうに欺かれるだらうよ。」アトリスは事を論ずるに當つては樂天家で、人間を論ずる時は歴世家になるのだつた——「彼等は金のためにどんな事をでも約束しよう、が、いざといふ場合になると、恐怖のため何にもできなくなるのだ。一度捕へられたなら、牢に放り込まれやう、一度牢に放り込まれたなら、一から十までべらべらと白狀してしまはう。それに英國へ行くには——（彼は聲を潜めて）、「カルヂナルの密偵や手下がうようよしてゐる佛蘭西全土を通らねばならぬのだ。それから、船に乗るには渡海券が要るし、ロンドンへ行く道を訊ねるためには英語が話せねばならぬ。あゝ、つくづく大變な仕事だと思ふね。」

「少しもさうぢやないよ。」この事の成就を心から喝聲してゐたダルタニアンは直ぐに言つた。「私は可也樂な仕事だと見るね。そりや若し我々がウィンター卿に手紙をやつて、カルヂナルに關する無道の數々を呼上げたり——」

「おい、聲が高いよ。」アトリスはたしなめた。

「國家の祕密や陰謀を知らせたりしたのなら。」とダルタニアンは聲を潜めて、「人に言はれるまでもなく、我々は刑車に掛けられて身を八裂きにされること位知つてゐるよ。けれどもねアトリス、君は自分で言つたことを覚えてゐるだらう——たゞ一家族の私事に就いて書いてやるきりだ——ミラデーがロンドンに着いたら直ぐ何處かに押込めるなりして、我々に害を興へさせぬやうにして貰はうといふ唯つた一つの動機で手紙を出すのだ、とかう云つたことを。だから私はそんなやうな文句で手紙を書いてやらうと思ふのだ。」

「では何と書くか聞かうではないか。」とアラミスはもう批評的な眼付きをして言つた。

で、ダルタニアンは早速文案を述べ始めたが、その書出しからしてアトリスの氣に入らなかつた。「劍や鉢を持たしたなら、君も中々目覺ましい働きを見せるが、併しベンの方はアラミスに任し給へよ——こつちは彼が本職だ。」

ポルトリスもこの説に賛成した。

「結構！ さうしよう。」ダルタニアンは答へた。「ぢやアラミス、我々のために一つ骨折つて呉れ給へ、だが、よく言つて置くがね注意して書き給へよ、今度は私がこきおろす番だからね。」

「あゝいゝとも。」アラミスはいかにも詩人らしい自信を以て言ふのだつた。

「ではアラミス、斯ういふ風に書いてくれ給へ。」ダルタニアンは口を開いた——「ド・ウインター卿様、あなたの御義妹様は善からぬ方にて、あなたの財産を手に入れたいためにあなたが殺されることを望みました。あの方は元來あなたの御令弟様と結婚できなかつた筈なのです、と申しますのは、佛蘭西で既に結婚して——」かう言ひかけてダルタニアンはアトリスの顔を見た。

「その後夫に遂出されました。」とアトリスは續けた。

「それはあの方の肩に烙印があつたからです。」とダルタニアンはアトリスの言葉を補つた。

「えつ！」聞手の二人は叫んだ。「それは本統か？」

「本統だ。」アトリスは陰鬱な口調で答へた。

「して誰がその『百合の花』を見たのだ？」アラミスは訊ねた。

「ダルタニアンと私自身だ、いや時の順に言ふなら、私とダルタニアンだ。」

「してその恐ろしい女の御亭主は未だ生きてゐるのか？」

「うん。」

暫くの間深い沈黙が続いた。

やがてアラミスはペンを取り、鳥渡の間考込んで、それから綺麗な女のやうな手で十行ばかり書いた、そしてそれから、優しい緩くりした聲でかう讀上げた——

ド・ウインター卿様——この御手紙を差上げます者は、嘗てダンフェ街の山羊の飼場であなたと劍を交へるの光榮を持ちました。そしてそれ以來あなたは御自分をその者の友と仰せ下すつてゐますので、その者はある重大な御報告でもつてその御交情にお報い申し上げねばならぬと思つたのでございます。二度あなたは危く極く近い御姻戚の方の犠牲になるところでした、聞けばあなたはその方を御相續人だと思召しの御様子ですが、それはその方が英國で婚約なさる前、既に佛蘭西で結婚なすつたといふことを御存知ないからです。そして三度、即ち唯今、あなたはあの方の犠牲にならうとしてゐます。その御姻戚の方は英國へ向けてラ・ロシエルを立ちました。到着の時に御注意されますな、あの方は大きな怖ろしい計畫を懐いてゐますから。もしあの方がどういふ事をするこの出来る人間であるかを本統に知りた

いと思召すなら、あの方の左肩の上にあの方の過去の歴史をお読みなさいませ。

「うん、中々巧いものだ。」アトースは言った。「アラミス、君は國務大臣の筆を持つてゐるぞ。ド・ウインターはこの手紙を受取りさへすれば一生懸命見張つてゐるだらうし、して例へ不幸にしてこれが狎下の手に落ちやうとも、我々には累を及ぼす筈がない。」

で、アラミスはまたペンを取つて、ツールへの第二の手紙を書き始めた——

「いとしい従兄よ。」

「おや！」アトースは言った。「その利口な人といふのは君の親戚だつたのか？」

「一番近い従兄だよ。」

さう答へてアラミスは書き續けた——

カルヂナール狎下と、敵の混乱とは今將にラ・ロシエルの異端者の叛逆を終らしめようとしてゐます。恐らく英國艦隊の援助は到底間に合ひますまい。と申すのは、バッキンガム公は何か大事件に妨げられて英國を出る事ができなからうと、推參ながら臆測するからです。狎下は過去、現在、及び——多分間違ひなく——將來の最も秀でた政治家です。狎下は若し太陽が邪魔をすれば、太陽をも消してしまふでせう。私のいとしい従兄よ、この幸福な音信

をあなたの御令妹にお傳へ下さい。私はこの不幸な英國人が死んだ夢を見ました。それが毒によつてか、それとも劍によつてかはよく覚えて居ませんが、たゞ彼が死んだことは確かなのです、して私の夢が何時でも正夢であることはあなたも御存知でせう。ですから、間もなく私も凱旋することにならうと思ひます。

「素敵だ！」アトースは言つた、「アラミス、君は詩人の王だ、君はアボカリプスのやうに雄辯で、而も福音書のやうに眞實だ。さあ、ではその手紙に宛名を書きさへすりやいゝのだ。」

アラミスは手紙をしゃれた風に巻いて、かう書いた——

「ツールの機織女、マドモワゼル・ミション様へ。」

三人の友は顔を見合せて、笑つた。彼等は一杯喰つたのだつた。

「所で、諸君。」アラミスは言つた。「この手紙をツールへ届ける事のできるのはバザンだけです。私の従兄はバザンしか知りませんので、外の人を誰も信用しないのです。それに、バザンは覇氣もあり學問もあります。彼は歴史を讀んで、シスト五世が豚飼から法王になつた事を知り、——私と一緒に教會へ入る積りなので、——彼自身法王になるか、少くもカルヂナール位にはなるかすることに絶望してゐません。それ位の見識を持つ人間が滅多に捕まへられるやうなまをせず、又例へ捕まへられた所で、話す位ならいつそ殉難の苦を嘗めるだらうといふ事は、諸君にも解つて貰へると思ふ。」

「解るとも、」ダルトニアンは言つた。「私は心からバザンのことは賛成する、その代りたゞブランシエの方も許してくれ給へ。ミラデーは何時かブランシエを答で散々に打つて追出したことがある。彼は覺えのいい男だ。だから出来さうな復讐の手段があると知つたなら、それを果さない位ならいつそ殿たおて死んだ方がましだと思ふに違ひない。もしツールの仕事に君の取極めるべきものであるなら、私のロンドンの仕事だつてさうだ。だから、頼むからブランシエに選定してくれ給へ。」

「ではさういふことにして、」アトースは言つた。「ブランシエには往きと歸りに七百リールづゝ、バザンには三百リールづゝやるがいゝ、さうすると残りが五千リールになる。我々はその内千リールづゝを取つて、我々の好きなまゝに使はう、して残りの千リールは非常支出のために資金としてしまつて置いて、その保管は我が僧院長に頼まう。何うだい？」

アラムスは喜んでそれを引受けた。

「ではこれで極まつた。」とアトースは言ひ續けた。「早速ブランシエとバザンとを出立させよう。」

で、四人は先づブランシエを呼寄せて色々の指圖をした。「では外套の裏にその手紙を隠して行きませう。」とブランシエは言つた。「してもし捕まつた時にはそれを吞んでしまひませう。して、その時の用心に、今晚寫しを載きまして、語記して置ませう。」

「ぢや、さうするとして。」ダルトニアンは言つた。「お前はド・ウインタール卿の處へ着くまで八日、お前へ歸るまで八日掛る。即ち金部で十六日だ。もし、出立してから十六日目の晩八時までにこゝへ着かなかつたなら、たとへ五分遅れでも、一錢も金をやらないぞ。」

「では御主人様、私に時計をお買ひ下さいませ。」

「これを遣らう。」アトースは何時もの無賴着な大まか振りで、自分の時計を彼に與へながら、「ぢやしつかりやつて呉れ。わしの言ふことを忘れるなよ——若しお前が一言でもしやべつたなら、お前の忠節に心からの信頼を置いてお前のために全責任を負つたお前の御主人様の首を犠牲にするのだぞ。して又よつく覺えて置けよ——若し、お前の咎で、何かさういふ災がダルトニアンの上に降つた時には、私はお前がどこに逃げ隠れしようと必ず探出して、お前の胸をすたすたに切り着んでやるぞ。」

「おゝ旦那様！ 私に首尾よく仕遂げるか、八裂きにされるかどちらかでございますませう。ですが、どうぞ私を御信頼下さいませ、たとへ八裂きにされませうとも、決して一言も喋りは致しませぬ。」

で、愈々ブランシエは翌朝八時に出發することに極まつた。

そして、その朝彼が馬に乗らうとしてゐた時、バッキンガム公に密かに心を寄せてゐたダルトニアンは、ブランシエを側へ連れて行つて——

「よくお聴き、手紙を下・ウインタール卿にお渡しして、卿がそれを讀み終つたなら、一バッキンガム公の身を守つて上げて下さい、あの方を暗殺しようとしてゐる者がゐます。」と申上げるのだぞ。併しこれは、わしがこの秘密をお前に打明けた事を友達に知らすことさへはゞかる程の重大なことなのだぞ、いゝか。」

「御安心遊しませ。」フランシエは答へた。「旦那様は間もなく私が信用できないかどうかを御覽なさいませう。」

そして、ラ・ロシエルから二十里の處で繼馬を得て乗捨てる筈の駿馬に跨がり、拍車を蹴つて駆出した。

バザンもその翌日ツールへ向けて發足した、して彼には八日間の日限が定められたのであつた。四人の友は彼等の留守の間といふもの、いかにも想像される事であるが、暇さへあれば眼を時計に、鼻を風にして、耳をこそとの音にも敬たせてゐた。彼等の日々は噂といふ噂を聞出さうと努めたり、カルデナルの行動を見張つたり、そして飛脚が着く毎に彼等から何かを嗅出さうとしたりする事に費された。そして何か思ひがけない勤務で呼ばれるたびに、抑へる事のできない不安に襲はれて胸をどきつかせたことも一再でなかつた。それに又彼等自身の身も用心しなければならなかつた——ミラデーは、一度誰かの前に現はれたなら、決してもう彼を心靜かに眠らせては置かぬ幻なのだ。八日目の朝、バザンは常の如く颯爽とし、常の如く微笑しつゝ、丁度四人が朝食に行つてゐたバルバイヨー酒場へ入つて來た——

「アラミス様、こゝにおいとこ様からの御返事がございます。」

四人は悦びの眼を見交した。彼等の仕事の半分はともかくも仕送げられたのだ。

アラミスは我にもなく顔を赧らめて、その手紙を取つた。そして一通り讀むと、アトリスへ渡した。

アトリスは文面にざつと目を通すと、邊りの人々に怪まれぬやうにと、わざと聲高にそれを讀上げた——

親愛な従弟よ——私の妹と私とは夢の判断が非常に上手です、して夢には非常な恐怖さへ懷いてゐます。ですが、お申越の夢に就ては、いづれも空夢だと言つてもいゝかと存ぜられます。では左様なら！ 御身を御大切になさいますし、して時折は御音信下さいませう。

マリー・ミシヨン

けれども、今も述べた通り、バザンの幸運な歸還は四人の友を苦しめた不安の一部を除いたに過ぎなかつたのだ。懸念の日々は矢張續き、殊にダルタニアンにはさうした日の一日一日が八十四時間の長さであるやうに思はれるのであつた。

その内に時の歩みは移つて、やがて十六日目の夕が來た。どこの酒場も客で一ぱいになつた。四人はバルバイヨーで何時もの通り勝負を争つてゐた、と其時七時の時計が鳴つて、彼等は守衛交替を報じて歩く巡察兵の聲を聞いた。七時半過ぎ太鼓の音が歸營時間を告げた。ダルタニアンは落膽して柙々とアトリスの背後からバルバイヨーを出た。アラミスとポルトリスとは腕を組んでその後を續いた。アラミスは詩を口ずさみ、ポルトリスは時折、絶望の印に口髭を掻きむしつゝゐた。が見よ、突

然、暗闇の中に一つの人影が——ダルタニアンの見馴れた形の人影が現れて、馴染深い聲でかう言つた——

「御主人様、今晩は餘り寒うございますので、お外套を持って参りました。」

「ブランシエだつ！」ダルタニアンは悦びに我を忘れて叫んだ。

「ブランシエだつ！」アラミスとポルトースも聲を揃へて叫んだ。

「なるほどブランシエだ。」アトースは言つた。「だが別に驚くことはないではないか？ 彼は八時に歸つて來ると約束した、して今丁度八時が打つたばかりだ。よう、ブランシエ！ お前は自分の言葉をよく守る男だ、もし今の御主人の家を出るやうなことがあつたら、私のところで優遇して上げよう。」

「まあ、どう致しまして！」ブランシエは答へた。「わたくしは決してダルタニアン様のお家を出ません。」

さういひながら、彼はダルタニアンの手に小さな紙をそつと渡した。ダルタニアンはブランシエを胸に擁抱したいばかりに思つたが、人目を恐れて我を抑へ、アトース達にかう言つた——「返事が來たよ。」

「それはよかつた。」アトースは答へた。「營舎に歸つて、讀まうぢやないか。」

その手紙はダルタニアンの手を焼くほどに思はれた。彼は道を急がうとしたが、アトースは堅く彼の腕を掴んで、同じ悠々たる歩調を強ひるのであつた。

遂に四人は營舎に歸り着き、洋燈を點けた、そしてブランシエが扉口に立つて張番をしてゐる間に、ダルタニアンは震へる手で封印を破り長い間待ちに待つたこの手紙を開いた。それにはいかにもブリトらしい手蹟でかう半行認めてあるばかりであつた——

「有難う、御安神下さい。」

アトースはその手紙をダルタニアンの手から受取り洋燈の灯に附けて灰にした。それから、ブラシエを呼び——

「さあ、お前は残りの七百リーヴルを取る権利がある。だがかういふ手紙なら大して危険な目にも會はなかつたな。」

「けれども、その手紙を手に入れますために實に色々な手立てをつくしました。」

「では、」ダルタニアンが言つた。「その話をすつかり聞かせてくれ。」

「ですが餘り長い話でございますので。」

「お前の言ふとほりだ。」アトースは言つた。「それに、最後の太鼓も疾うに鳴つた、あまり長く燈を點けて置くと人に見咎められやう。」

「ぢや、寝るとしようぢやないか。」ダルタニアンも賛成した。「ブランシエ、ゆつくりお寝み。」

「有難うございます。十六日目に初めてゆつくり寝せていただきます。」

「私もさうだ。」ダルタニアンは言つた。

「私もだ！」ポルトースが叫んだ。
「私もだ！」アラミスもあらむ返しに叫んだ。
「本統の事を白状すると、私もだ！」アトースが最後に言った。

第四十六章 宿命

一方、ミラデイーは——憤怒に我を忘れ、激した牝獅子のやうに船の甲板を暴れ廻つて、一度は海の中へ身を投げようとしたのであつた。といふのは、ダルタニアンには辱しめられ、アトースには嚇されて、而も何の復讐もせずに佛蘭西を去つて行くのだといふ思ひを忍ぶことができなかったのだ。そして遂にこの考へにどうしても堪へることができなくなつて、船長に佛蘭西の海岸へ上陸させてくれと歎願したのであつた。生憎風は逆風で海は荒れ、シャラント出帆後九日目にやつと、悲しみに怒りとに蒼ざめたミラデイーはフィニステールの青い濱を見得られたのであつた。數へて見ると、此處で上陸してカルチナルの許へ歸るには少くも三日は掛り、それに上陸のため一日を加へると、四日に成るのだ。この四日を既に経過した九日に加へると、こゝに十三日は失はれることになるのだ——十三日、その間にロンドンに重大な事件が幾ら起きるか知れない。で彼女は今歸つた時のカルチナルの激怒も想像されたので、矢張航海を續けることにした、そしてブラシエが佛蘭西へ歸らうとポーツマウスを出帆したその日に、猯下の使者はその港へ意氣揚々と入つたのであつた。

全市は異常な昂奮状態にあつた。最近新造した四艘の大船が丁度海へ進水したばかりであつたのだ。棧橋の上には、金ピカ服を着、何時もの通りダイヤや高價な寶石を閃めかし、帽子には肩の上まで垂れる白い羽根飾をつけたバッキンガム公の姿が、殆ど彼と同じやうに華々しい装をした幕僚に取巻かれてゐた。

それは英國には珍らしい上天氣の夏の日であつた。光の薄れた太陽は丁度今水平線上に沈まうとして、空や海を紫色にし、街の塔や古城に最後の金色の光線を投げてゐた。ミラデイーは、陸に近い清新な香ぐはしい海の微風を胸一杯に吸ひ込んで、滅ぼすべき使命を帯びて唯一人來たこれらの盛んな軍備を眺めた時、心中密かにあの恐ろしい猶太の女ユディットに自分を比べて見た——アッシリア人の陣營に浸入して、やがて彼女の手の一動きに一團の煙の如く消え失せる運命となつた戦車や馬や人や武器の大集團を眺めた時のユディットに。

彼女を乗せた船は靜かに沖の碇泊所へ入つた、しかし、丁度錨を下ろす用意をしてゐた時、一艘の小さい嚴重に武装した小艇がこの商船に近づいて來て、ボートを下ろすと一人の士官と八人の水兵とが乗込んで此方へ向つて來た。やがて士官だけが甲板に上り、船長と暫く話をして、船長の携へてゐた書類を檢閲した。そしてそれから、船長の命令でこの船の乗組員と乗客とが全部甲板上に集められた。と士官はその者達を一人々を調べ始めた、そしてミラデイーの前で立留まると、非常に熱心に、

併し唯の一言も云はずに、彼女の顔をちつと眺めた。

それから士官は船長の處へ戻つて何か二言三言命じた。すると船は小艇に護衛されたまゝ再び動き始めた。その士官といふのは二十五六歳に見える、色白の青年で、美しい口許をきつと結び、意志の強さうなよく發達した頤を持つてゐた。

船が港に入つた時はもう暗かつた。霧は宵闇を深めて、船々の廻りに、雨の兆であるあの月の暈に似た輪を作つてゐた。一體に憂鬱で、濕つぽく、冷々した雰圍氣であつた。

士官はミラデイーの荷物を自分のボートへ移させるやうに命じて、それから彼女の方へ手を差延べ、一緒に下船することを求めた。ミラデイーは青年の顔を見詰めて、躊躇した。

「あなたはどなたです？——」彼女は言つた。「特別に私のことを御心配して下さるあなたは？」

「私の軍服を御覽なさいますと、英國海軍の士官だといふ事がお分りでございませう。」

「ですけれど、同國の婦人と見ると斯う御心配して下さるのが英國海軍の士官の常なのでございませうか？」

「えゝ、輿様、戦時中は、政府の檢閲を受けさせ申すために旅客の方を何處か指定の旅館へ御案内申すのが慣はしなのです。」

「けれど私は外國人でありませんよ。」彼女は純粹な英國の抑揚で言つた。「私の名前はド・ウインダ夫人でございませう、今御存つた手續きは——」

「この手續きはどなたにもするのです。あなたもこれを免れようとして免れることができないのです。」

「では御一緒に参りませう。」

そして士官の手を受けて梯子を下り始めた。士官はボートの艙に大きな外套を掛け、その上にミラデイーを坐らせて、水兵共に命じてそのボートを出させた。五分程経つて、ボートは埠頭に着いた。そこには一臺の馬車が彼等を待つてゐた。

「この馬車に乗りますの？」ミラデイーは訊ねた。士官は頷いた。

「では旅館は遠いんですね？」

「街外れです。」

「ぢや参りませう。」ミラデイーは覺悟を決めたらしい足取で馬車の中へ入つた。

士官はミラデイーの傍に座を取つて、扉を閉めた。すると何の指南も受けぬに、馭者は馬に一鞭當つてて走出し、直ぐに街の通り通りを縫うて進んだ。併し、十五分ばかり経つた頃、餘りの長さに驚いて、何處を進んで居るのかと窓から覗いて見た。すると家はもう一軒も見えず、たゞ木立ちばかりが大きな黒い幻のやうに闇の中を追ひつ追はれつして消えて行くのであつた。

ミラデイーは思はずつと身震ひした——

「まあ、私達は市街を出てしまひましたの。」

けれども、若い士官は依然として黙り込んでゐた。遂に、一時間のドライブの後、馬車はとある織

の門の前で留まつた。その門の中には、細道の奥に、見るからに陰鬱さうな、廣大な、人氣ない古城が眺められた。そして、車輪が柔かい砂利の上を靜かに廻つて行く時、ミラデイーは浪が岩に當つて碎ける音と察せられた大きな咆哮の聲を聞いた。馬車は二つのアーチの下を通つて、方形の陰氣な中庭で留まつた。士官はひらりと飛下りて、ミラデイーを助け下ろした。

「では私は囚人ですのね。」彼女は邊りを見廻し、それからこよなく柔しい微笑を浮べて青年士官をじつと見詰めたが、言つた。「けれど私が長く居ないことは確かですわ。私自身の良心とあなたの御親切とがさう確信させます。」

併し青年は何の答へもせず、ポケットから小さい銀の呼子を取り出して、三度、三つの異なる音で吹いた。數人の者が直ぐに現れ、馬を外して、馬車を置場へ入れた。

士官は、尙ほ同じ物靜かた鄭重さで、ミラデイーを城中へと案内した。ミラデイーは同じ微笑を顔に浮べて、彼と腕を組み、低いアーチ型の戸口を通り、向端に唯一つの燈の點いた圓天井の廊下を抜けて石の階段へ出た。二人はそれから大きな扉の前で足を留め、青年士官の持つて来た鍵でそれを開けて、ミラデイーのために設へられた部屋へと入つた。一目で囚人はこの部屋の様子をすつかり見て取つた。それは牢獄にも自由な住居にも同時に適するやうに造られた一室であつた。彼女は椅子の中に倒れ、腕を組み、頭を垂れて、裁判官が訊問に来るのを豫期して待つてゐた。併し二三の兵隊が彼女の旅行鞆を運びこんで、それを片隅に置くといふ言も云はずに出て行つた外

には、誰一人來なかつた。

鍵で、拍車の音が階段に當つて聞え、何人かの聲がふつとして遠くへ消えて行くと、唯だ獨りの聲音が扉の方へ近寄つて來た。ミラデイーはこの暗闇の中の人影に何となく見覚えがあるやうな氣がした。

人影はしづしづと傍へ寄つて來た、そして段々洋燈の光の届く範圍内に入つて來た時、ミラデイーは我知らずたちたと尻込みした。そしてそれから、もう疑ふ餘地がないと見た時――

「まあ！ 兄さん！」餘りの驚きに膽を消して叫んだ。「あなたですの？」

「さうですよ。」ド・ウインター卿は半ば鄭重に半ば皮肉に一禮をしながら答へた。「私ですよ。」

「けれど、ぢや、この城は――」

「私のです。」

「この部屋は――」

「あなたのです。」

「では私はあなたの囚人ですの？」

「まあそんなやうなものですね。」

「けれどそれは餘りな權力の妄用ですわ。」

「ひどいことを仰有る。まあ兄と妹との間柄に相應しいやうに、坐つて穩かに話合はらうぢやありませんか。」

せんか。」

それから、扉の方へ向いて、例の若い士官が彼の最後の命令を待つてゐるのを認めると——「これでよろしい。有難う。ぢや彼方へ行つて、お呉れ、フェルトンさん。」

第四十七章 兄妹の打解話

ド・ウインター卿が扉を開けて門を鎖し、従妹の安樂椅子の傍へ自分の腰掛を持つてくるその間、ミラデイーは今義兄の手に不幸にも落ちるまで夢にも思はなかつたこん度の出来事のことをまじまじと考へ込んでゐた。

アトースが洩らした數語は、彼女とカルヂナルとの會話が他人の耳に入つたといふことを證明してゐたが、併し彼女は彼がかう迅速に又かう大膽に自分の謀計の裏をかくことができやうとは思像できなかった。彼女は寧ろ英國に於ける此前の所爲が発見されたのではないかと心配した。バックingham公は自分のダイヤの飾玉を切取つたのは彼女だといふことを察して、あの些細な叛逆のために復讐を求めたかも知れない。併しバックingham公は婦人に對して極端に走ることを何も出来る人ではなかつた、もしその婦人が嫉妬の情に動かされたのだと想はれたなら殊にさうであつた。

「え、兄様、少し打解けて話合ひませうよ。」と彼女はこの會話から今後の行動に必要な知識を引出すべきだと心を決めたので、わざと快活に言つた。「第一に、お聞かせ下さいな、何うしてあなたは

かううまく見張つてゐるやうなことができたのですの、私か来ることを前以て御存知ないばかりか、私が到着する日も、時間も、港も御存知ない筈ですのに。」

「だが、それにしても、何の目的であなたは英國へ來たのです？」

「あなたに會ひに來たのですわ。」

「ではわざ／＼海峡を渡つて來て下すつたのは唯だ私のためばかりなのですか？ 本當に、あなたの御親切は過分です！」

「でも私はあなたの一番ちかしい身内ではございませんの？」とミラデイーはいかにもあつさりと答へた。

「してあなたはまた私の唯一人の後継ぎでいらつしやる。」とド・ウインター卿はミラデイーの眼にちつと見入りながら——「といふのは、あなたの御子息によつて、ですよ。」

さすが自制力の強いミラデイーも、思はず吃驚して飛上つた——「まあ私、何のことやら分りませんわ。今のお言葉には何か隠した意味がございますの？」

「いや決して！」ド・ウインター卿は明かに上機嫌で——「實は私はあなたが私に會ひたくて英國に來らつしやることを聞いてゐました。で、夜中に港に着く不便や上陸の疲れを省いてお上げするた

めに、私の士官の一人を出迎へに差遣はして、この城へ御案内させました。私はこの城の太守で毎日こゝへ來るのです。で、お互ひに顔を合せてゐたいといふお互ひの希望を満足させようと思つて、私

はあなたをお迎へするのために一室を設へさせました。かういふ事はあなたが私に仰有つたお言葉よりも吃驚するやうなことでせうか？」

「いゝえ、ですが私の吃驚しましたことは、あなたが私の到着するといふ報知を前以てお受けになつたといふことですわ。」

「でもそれは此世で一番簡単なことなのです、沖の碇泊所に入ると、あなたの船の船長が航海日誌や乗客及び乗組員の名簿を寄越して、港へ入る許可を得に來たことに氣が付きませんでしたか？ 私はこの港の司令なので、この日誌が私の手許へ差出されたのです。そして私はあなたの名に氣がついたのです。」

ミラデューはこの虚言を聞いて満足した、——「兄様、私が上陸した時棧橋で見たのはバッキンガム公ではございませんでした？」

「あの人だよ。あの人を見てあなたがはつとした様子は目に見えるやうだ。あなたはあの人を噤で持切つてゐるに違ひない國から來らした、して私はあの人を佛蘭西に對する軍備があなたの御友人のカルデナルの注意を非常に惹くことを知つてゐます。」

「私の友人のカルデナル！」ミラデューは思はず叫んだ。

「では、あの方はあなたの御友人でないのですか？」と男爵はさりげなく訊ねた。「許して下さい、私はさうだと思つてゐたのです。それはさうと、あなたは私に會ひに來たと仰有いましたね？」

「ええ。」

「では、先刻も言つた通り、あなたの御希望は満たされませう、して私達はこれから毎日お互ひにお目に掛れませう。」

「それぢや、私は永久にこゝに留まつてゐなければならぬのですか？」ミラデューは恐怖の色を浮べて訊ねた。

「こゝでは住心地が悪いのですか？ 何かお望みのことがあつたら遠慮なく言つて下さい、直ぐに用意をさせます。例へば、あなたのためにどういふ風な部屋をあなたの最初の御良人は設へなすつたか話して下さい、すれば、私はあなたの義兄妹ではあるけれど、あなたの唯今のお家庭をそれと同じやうな土臺に据ゑて上げませう。」

「私の最初の夫ですつて？」ミラデューは荒々しい眼付でド・ウインター卿の顔を見成りながら叫んだ。

「さうです、あなたの佛蘭西人の御良人です。ですが、もしあなたがそれを忘れてしまつてゐられるなら、その人は未だ生きてゐるのですから、私からその人へ手紙を出して問合せてもよろしい。」

冷たい汗の玉がミラデューの額を傳つて落ちた。

「あなたは冗談を言つていらつしやる、」と彼女は噺れた聲で言つた。

「私はそんなに見えますか？」城主は立上つて、一步退きながら、訊ねた。

「でなけりや、あなたは私を辱しめるお積りなんです。」と彼女は椅子の臂掛をぶるぶるする手で搦んで、體を起した。

「私があるを辱しめる！」ド・ウインター卿は賤むやうに——「してあなたは本統にそんなことが出来ると思つていらつしやるのですか？」

「あなたは酔つてゐるか氣が狂つてゐるかしてゐるのです。こゝを出て行つて下さい、して私の侍女を寄越して下さい。」

「女は非常に不謹慎なものです。私が侍女となつてあなたに仕へるわけに行きませんか。さうすれば私達の秘密は内輪で済みます。」

「失禮なつ！」ミラデーは叫んで、發條に弾かれたやうに、ド・ウインター卿の方へ飛掛つた。

「私はあなたが人を暗殺する癖のあることを知つてゐます。彼は劍の櫛に手を掛けながら——「で私もあなたに對して身を護りませうよ。」

「おゝ！ あなたの仰有る通りです。」ミラデーは言つた。「してあなたは女に對しても手を擧げる位の卑怯者のやうに見えますわ。」

「私はたとへさうしたとて、言譯が立つつもりです。それに、私があるあなたの肩に手を觸れた最初の男ではないだらうと思ふ。」

さう言つて城主は、怒りした咎めるやうな身振りで、ミラデーの左肩を指と指で觸れる程にゆびさした。ミラデーは、噁れた叫び聲をあげて、部屋に向うの隅へ飛び退つた。

「おゝ、好きなやうに吼えなさい！」ド・ウインター卿は叫んだ。「たゞ咬付かうとしないで下さい、そんなことをすると却つてあなたの不利になりますからね。こゝには相續のことを極めてくれる

法律家は居ない、私が監禁した美しい夫人のために私と喧嘩をしようといふ武者修業者もゐない、が併し、既に結婚してゐながら、我一家へ闖入して来る程恥知らずの女を處置する裁判官は手近に居ます、してこの裁判官はあなたを執行者に渡して、あなたの兩肩を同じやうにさせるでせう。」

ド・ウインター卿は續けた——

「それから私の留守中この城の采配を振る士官のことですが、彼には先刻お會ひなすつたから、既にどんな男か知つてをられる筈だ。あの青年を何うお思ひです？ もつと無感覺な無口の大理石像がこの世にありますか？ あなたはこれ迄多くの男達にあなたの誘惑の力を試しました、そして不幸にも、何時も成功しました。併し今度はこの男に試つてごらん下さい、してもそれが成功したなら、

私はあなたを悪魔そのものだと信じませう！」

彼は扉の方へ歩み寄つて、突然それを開けた——「フェルトンさんを呼んで来い。」

青年士官は部屋に入つた。

「さあ、」男爵は言つた。「この御婦人を御覽。若くて美しい。あらゆる世俗的の引力を持つて居られる。だがこの方は二十五歳で、あなたが一年間の裁判記録中に讀むことができる程の澤山の罪惡を犯

した人非人なのだ。フェルトン、私はお前を海軍少佐にして上げた、私は嘗てお前の生命を助けて上げたことがある——私はお前の保護者であるばかりでなく、お前の友人だ、お前の恩人であるばかりでなく、お前の父だ。この御婦人は私の生命を狙つてこの英國へ渡つてこられたのだ。私はその蛇を手中に握つたのだ。そこで、私はお前をこゝへ呼んで、かう云ふ——私の親愛なフェルトン、私の息子ジョン、この婦人から私を護つてお呉れ、して殊にお前自身用心してお呉れ、この方に相當する罰のためにこの方を監禁して置くことを誓つておくれ！ ジョン・フェルトン、私はお前の言葉を信用する——ジョン・フェルトン、私はあんたの名譽に信頼する。」

「閣下。」若い士官は、心中に懐いたミラデーに對する一切の憎惡を顔の外にまざりと現して、「誓つて萬事御希望通りに致します。」

第四十八章 青年士官

一方、カルデナルは英國からの音信を待つてゐたが、それにも拘らず時は過ぎ去つたが、而もまだラ・ロシエルは降伏しなかつた。最後に捕虜にされた密偵はバッキンガム公に市が愈々窮地に陥つたといふことを知らせる手紙を持つてゐて、それにはかう附加へてあつた——「もし閣下の御援軍が二週間以内に到着しませんでしたら、我々は全部飢死してしまはせう。」

だから市民達はバッキンガム公にしか望みを繋かなかつたのだ——バッキンガム公は彼等の救世主だつたのだ！ 従つてもし彼等がバッキンガム公にこれ以上の信頼は置けないといふ確かな報告を受けたならば、彼等の勇氣が彼等の希望と共にたちどころに挫けて了ふことは明かであつた。

カルデナルはこのため、バッキンガムは出馬しないと知らせて來る英國からの音信を一日千秋の思ひで待つてゐた。彼は自分の密使ミラデーに對して懐いた恐怖の念を胸から消すことができなかった、といふのは彼も亦半ば牝獅子で半ば蛇であるあの女の奇妙な性格がよく解つてゐたのだ。彼女は自分を裏切つたのか？ それとも、死んだのか？ いづれにしても、彼は彼女をよく知つてゐたので、彼女が自分のために働いても自分に敵對しても、非常に力強い妨礙がない以上不活動である筈がないといふ事を信じてゐた。だがさういふ妨礙がどこから起つてくる筈があらうか？ これは彼も見抜くことができないことであつた。

けれども、結局、彼はある理由からミラデーを可也信頼してゐた。といふのは、彼女の過去に彼自身の法衣で蔽ひ隠してやらねば濟まぬ怖ろしい事情のあることを秘かに察知してゐたのだ。

ある日、ラ・ロシエル軍と協商する望みもなく、英國からの情報もなく、癒すことのできない心の倦意に蝕まれたながら、カルデナルは僅か二人の供を連れて砂濱をさすらつて、とある小高い丘へと静かな歩みを運んだ時、その頂から、七人の男が一叢の木立で日射を遮つた生垣の蔭で、草の上に寝轉びながら空の酒瓶に取巻かれてゐるのを認めた。その内の四人は我が銃士達で、その一人がたつた今受取つた一通の手紙に耳を傾けてゐるところである。他の三人はこの銃士達の従者で、この時丁

度コリウール酒の大壺を開けかけてゐた。

この發見が彼等の會話を窺み聞かうとする彼の望みを増したことはよく想像し得られるところだ。彼は眼を奇妙に光らせ、猫のやうな窃足をして、生垣へとしのび寄つた。併し、やつと意味の分らぬ漠然とした言葉が少しばかり聞取れかけたその時、突然――

「上官です！」とグリモーが彼の方を指さして叫んだのであつた。

四人の銃士は一度に跳起きて、恭々しく頭を下げた。カルチナールは激怒の様子で言つた――

「銃士諸君は張番をつけてゐると見える！ それは英軍が陸から來ると思はれる故かね、それとも銃士は上官だと心得てゐるからかね？」

「狽下、」アトースは答へた――といふのは、一同の狼狽の眞中で、彼たゞ一人が何時もの通り貴族の冷靜と沈着を持續してゐたのであつた――「狽下、銃士共は勤務が終りますと、酒を飲んだり菓子遊びをしたり致します、して當人等の從者にとつては確かに上官でございます。」

「從者だ」と！カルチナールは唸るやうに言つた。「誰かゞ近寄つた時主人に注意するやう吩咐せられた從者――それは從者でない、番兵だ。」

「けれども狽下も、もし我々がこの用意を怠りましたなら、狽下がお通り遊ばすのも知らないで失禮を申上げたに違ひないといふことはお認め下さいませう。ダルタニアン、」彼は言ひ續けた。「君は銃士になつたお禮を申上げる機會を待つてゐた。丁度幸ひだからここで申上げ給へ。」

ダルタニアンは進んで、吃りながら禮の言葉を述べた。

「あれは何でもないことだ。それはさうと、」カルチナールは一寸眉を擡めて――「君達の腦の中に色々な祕密が見付けられるだらうね、もし私が來ると見た途端隠したあの手紙を君達が讀んでゐたやうに、君達の腦の中も讀むことができたならばな。」

アトースの顔に血が昇つた、彼はカルチナールの前へ一歩進み出て、もし本統に自分達を疑くつてゐるのなら、何なりと訊問するがいと云つた。

「では、アラミスさん、あんたが讀んでゐた、して私を見て隠したあれは何の手紙だね？」

「ある婦人からの手紙でございます。」

「なるほど、さういふ種類の文には用心が必要だわい。だがそれでも懺悔僧には見せてもいい、答だ、して御存知の通りわしは宗門の者だがね。」

「狽下、」アトースは恐ろしい程に落着いて、「この手紙は婦人からでございますが、併しマリオン・ド・ロルムの名もマダム・ディニヨンの名も署名してございませぬ。」

カルチナールは死人のやうに蒼ざめた、荒々しい閃きが兩眼から迸つた。彼は供の二人に命令を下さうとするかのやうに後を振り返つた。アトースはそれを見ると、つと小銃の方へ一歩進んだ。

で、カルチナールは、もしアトース等が本統に組んで何かを謀らうとするなら、この場合とても衆寡敵しないと思つたので、心中の怒りをわざと笑ひにまぎらはしてかう言つた――

「いや、あんた方は勇敢な青年達だ。わしは赤鳩舎へ行く途中あんた方が護衛してくれた晩のことを忘れてゐない。もし今日もこれからの途に何か危険のある恐れがあつたなら、一緒に行つていたださたいのだが、幸ひ何もないらしいので、あんた方はこの儘こゝにゐて、酒や菓子や手紙を濟ませがよい。ではこれで別れよう。」

そして供の牽いて來た馬に再び跨つて、手を舉げて彼等に挨拶して、出懸けて行つた。

四人の青年は眞直ぐに突立つたまゝ身動きもせず、一言も言はず、彼の姿の見えなくなるまで、眼で彼の後を追つた。それから互ひに眼と眼を見合はせた。みんなの顔には困惑の色が漂つてゐた——愛想のいゝ言葉を残して立去つたものゝ、カルヂナールが心中に憤怒を疊んで行つたことは火を賭るより明かなのだ。併しアトースだけは笑つてゐた、恐れげもない輕蔑するやうな笑ひだつた。

「グリモーめの番の仕方が悪かつたのだ。」自分の不機嫌を誰かに洩らさうとうづづしてゐたポルトースは、カルヂナールの馬の蹄の音が聞えなくなると直ぐかう言つた。

グリモーはその言譯に何か答へようとする、アトースは指を舉げてそれを遮つた。

「アラミス、君はあの手紙を渡してしまふつもりだつたのか。」ダルタニアンが言つた。

「私はかう決心したのだ——」アラミスは、いかにも優しい聲音で、「もし彼がどうしてもこの手紙を出せと言張つたなら、片手でこれを渡して、片手で彼奴の體に劍を突通してやるつもりだつたのだ。」

そして彼は一同に促されて、ポケットからその手紙を取り出し、初めからまた読み直した——

いとしき従兄様——私は今度ストネイへ出立の決心をきめようと存じます、そこは妹が私達の小さい召使をカルメリトの尼寺に入れた所なのでございます。この可哀さうな子は、外のどこへ住みましても濟度の受けがたいことを知りまして、今はすつかり諦めて居ります。けれども、私達の家庭上の事柄が私達の望むまゝに治まりましたなら、あの子は墮獄の危険を冒して、懐しい人々の處へ戻るだらうと存じます、まして、彼女はその人々が常々自分のことを思つてゐて下さることを存じてゐますのですから——。今のところ、あの子は大きくして不幸でもございませぬ、彼女が一番望んでゐるものは彼女の許婚からの手紙でございませぬ。さういふ類のものは尼寺の門を容易に通過できないことは存じてゐますが、けれども度々證據をお示し申上げた通り、私はさういふ事柄に拙くはございませぬ、きつとその使命をお引受け致しますせう。妹はあなたの永遠に變らぬお心を感謝致して居ります。彼女も鳥渡の間は非常に心配致して居りましたが、使ひの者をかの地へやつて不意に事の起らぬやう用心致しましたので、今はやゝ安心致して居ります。

では左様なら、できるだけ度々お音信下さいまし。

「お、アラミス、みんな君のお蔭だ！」ダルタニアンは叫んだ。「いとしいコンスタンス！ やつと彼女の消息が知れた。彼女は生きてゐる——尼寺に無事で居る——ストネイに居る！ アトース、ストネイといふところはどこ？」

「アルサスとローレンとの國境にある。こんどの戦争が終つたら、皆んなであの方面を遊歴して見よう。」

「してそれも餘り遠いことであるまい。」ポルトースが口を挟んだ。「といふのは今朝殺した軍事探偵の白状するところによると、ラ・ロシエル軍は今自分等の靴の皮で露命を繋ぐ程になつてゐるさうだ。その内に靴底まで喰ひ盡したなら、もう互ひの肉を食ふあふより仕方があるまい。」

「哀れな馬鹿共だ！」アトースは上等のポルドー酒の盃を飲みほして呟いた。「だが、アラミス何故君はその手紙をポケットへ押込むのだい？」

「さうだ。」ダルタニアンも言つた。「アトースの言ふ通りだ、それは焼きすてなくてはいけない。いかにカルデナルでも灰を審問する秘法は持つまい。」

「いや、持つてるに違ひない。それよりもこゝに方法がある。」さう言つて、アトースはグリモーを傍へ呼寄せた。「さつき許しを得ないで物を言つた罰として、グリモー、お前はこの紙片を食べてしまひなさい、そのかはりその後でこの盃の酒を飲ませてやらう。先づこゝに手紙がある。さあ食べてしまひなさい。」

グリモーはにつこと笑つた、そしてアトースが縁からこぼれるばかりに注いだ酒盃にちつと目をつけながら、その手紙を齒でよく嚙んでたうとう呑みこんでしまつた。

「偉いぞ、グリモー！」アトースは叫んだ。「さあこれを受けなさい。」

グリモーは黙々としてポルドーの杯を飲みほした。

「さあこれで、アトースは言つた。「カルデナルがグリモーの胃の腑を切り開かうとさへしなれば、我々は安心だ。」

第四十九章 監禁の第一日

さて話は再びミラデーに歸つて、我々はこの前と同じ絶望の體の彼女をまたも見るのである。

彼女は身動きもせず、燃ゆるやうな眼を見据ゑて、寂しい部屋の中に坐りながら、いかにマダム・ボナシユーに對し、バックینگラム公に對し、就中ダルタニアンに對して恐ろしい復讐の計畫を立てたことであらう！ だが、復讐をするには、自由の身でなければならぬ、してこの囚人が自由になるには、壁を突き破り、鐵格子を外さなければならぬ、してこれらは男の忍耐と力とでやつとなしとげ得られる企てである。それに、かういふ勞働には、時が必要である——幾月も、恐らくは幾年もの時が——なのに彼女はド・ウインタール卿の宣言によると、僅か十日位の時しか持たぬのだ。

「さうだ、亂暴なことをするのは馬鹿だ。」彼女は鏡に映る自分の燃えるやうな眼を眺めながら、呟い

た——「暴力はいけない！ 相手は男だもの、女らしく戦はう。」

それから、自分の動き易い表情的な容貌を試して、も見るやうに、顔の筋肉を引つる怒りの表情から最もやさしい、愛情的な、誘惑的な微笑に至るまで、ありとあらゆる表情を次ぎから次ぎへと現して見た。それから、器用な手附で美しい髪を、自分の顔の美を助けると思はれるあらゆる結び方に束ねて見た。そしてやつと、満足して呟いた——「何にも失くなつたものはない！ 私は未だ美しい。」それは晩の八時近くであつた。今迄立上つてゐたミラデーは、急いで椅子に身を投げ、頭を仰向けにし、美しい髪を解き亂し、胸を皺だらけのレースから半ば露出しにし、片手を心臓の上に置き、片手をだらりと下げてゐた。

門は引かれ、扉の蝶番はギーと軋つて、人の蹺音が部屋の中に聞え、彼女に近寄つた。

「テーブルをそこへ置きなさい。」フェルトンのそれと覺しき聲が言つた。命令は直ぐに行はれた。

「お前達は灯を持つて来て、番人とかはりなさい。」

フェルトンの命令は黙々の内に敏速に行はれて、彼の訓練の厳しさを思はせた。

やがて、ミラデーの方を未だ見なかつたフェルトンは、彼女の方へ顔を向けた——

「おゝ！ 眠つてゐる、目が覺めたら、ひとりで食べなさるだらう。」

さう言つて彼は扉の方へ二足三足歩きだした。

「いえ、中尉殿」ミラデーの傍に近寄つた一人の兵士が言つた。「この御婦人は眠つていらつしや

いません。」

「なに！ 眠つて居らん！ では何をしてゐられるのだ？」

「氣を失はれたのです。お顔が大變蒼うございます、して呼吸がほとんど聞えません。」

「なるほどお前の言ふ通りだ。」フェルトンは一足もミラデーの方へ寄らず、今立つてゐる處から

彼女を眺めた後で、言つた。「ド・ウインター卿のところへ行つて囚人が氣を失つたと言つて來なさい。

い。思ひがけないことなので私には何うしていいか分らぬ。」

兵士は上官の命令を果しに部屋を去つた。フェルトンは扉の近くにありあはせた椅子に腰を下し

て、一言も云はねば身動きもしないで、待つてゐた。ミラデーは自分の方へ背中を向けたフェルト

ンの姿を鏡の中に認め、十分間程ちつとそれを見詰めてゐた。その十分の間彼は遂に一度もこつちを

見かへらなかつた。その時、ド・ウインター卿が間もなく見えたなら、この若い獄吏は愈々力を得る

だらうといふことが彼女の胸に浮んだ。彼女は頭を擡げ、眼を開いて、弱々しく吐息した。

この吐息で、フェルトンはやつと振返つた——「おゝ、やつとお目覺めですね。では私はもうこゝ

に用がない。何か御用事がありましたら、お呼び下さい。」

「まあ！ 私どんなに苦しかつたでせう！」ミラデーは昔の女魔法使の聲のやうに自分が滅さう

と思ふすべての者を魅惑する、あの美しい聲音で囁いた。そして椅子の上に身を起して、凭れ掛つて

ゐた間よりも優しく誘惑的な姿をした。

フェルトンは立上つた——

そして丁度敷居を跨がうとしたその時、ド・ウインター卿が呼びに行つた兵士を従へて、廊下に現れた。彼は手に鹽の瓶を持つてゐた。

「一體どうしたのだ？」彼はミラディーが立つてゐる、フェルトンが部屋を出ようとしてゐるのを見ると、嘲るやうな調子で言つた。「死んだ人間がまた生き返つたのかね？ フェルトン、君はこの女が君を初心者扱ひにして、喜劇の第一幕を見せたのが分らないのかい？」

「私もさう思ひました。けれど、囚人は婦人ですから、紳士として婦人に拂はねばならぬ思ひ遣りの程をお見せしたかつたのです。」

ミラディーはぞつと身震ひした。このフェルトンの言葉は彼女の血管の中を氷のやうに走つた。

「では、ド・ウインター卿は尙ほ笑ひながら、「あゝ巧みに亂したあの美しい髪も、あの眞白い肌色も、あの思ひ惱むやうな眼付も、お前の石のやうな心を唆かすことができなかつたのか？」

「はい、閣下。して私をお信じ下さいませ、私を墮落させるには女の詭計や嬌態以上のものが要るのです。」

「そんなら、ミラディーには何か新手を考へ出させることにして置いて、我々は夕食をたべに行かうぢやないか。この女は非常に豊富な想像力を持つてゐるから、間もなくこの喜劇の第二幕が見られるだらう。」

かう云ふと、ド・ウインター卿はフェルトンの腕を取つて、笑ひながら彼を連れて行つた。

第五十章 監禁の第二日

その翌朝、彼等が部屋に入つて行つた時、彼女は未だ寢臺に入つてゐた。フェルトンは廊下にて待つてゐた。彼は召使の女を連れて來たのだつた。その女は部屋に入つて、ミラディーの寢臺の傍へ寄り、何か御用はないかと訊ねた。ミラディーは生れ付き色が蒼かつた、で彼女の顔色には初めて彼女を見た者は誰でも直ぐに欺されるのだつた。

「私は熱が出てゐます。」彼女は言つた。「夜長を一晚中一睡もできませんでした。私は大變苦しいのです。この儘寢臺の中に居させていたゞきたいですわ。」

「お医者をお呼び致しませうか？」

フェルトンは一言も云はずに、この會話に耳を澄ましてゐた。

「お医者？ 何のためにですか？ あの方々は昨日、私の病氣をみんな喜劇だと言ひました。今日も必ず同じでせう。」

「では。」フェルトンは耐へ切れなくなつて言つた。「奥さん、あなたは何うなさりたいのか御自分で言つて下さい。」

「まあ！ どうして私に言へませう？ 私は苦しい——これだけですわ。あなたの好きなやうにして

下さい、ちつとも構ひませんわ。」

「ド・ウインタール卿を呼んで来て下さい。」フェルトンは幾度も繰返されるこれらの怨言に倦んで、かう吩咐けた。

「お、いけません、いけません！」ミラデイーは叫んだ。「どうかあの人を呼ばないで下さい！」

私は達者です——何もほしくありません——あの人を呼ばないで下さい——
彼女があまり烈しくかう喚き立てたので、フェルトンはそれに引かれて二三歩部屋の中へ入つて来た。

「そら入つて来た！」ミラデイーは心の中で呟いた。

「でも奥さん。」フェルトンは言つた。「もし本統にお苦しいのなら、私達はお醫者を呼びにやらねばなりません。もし私達を欺して居られるのなら、それは却つてあなたのためになりませんよ。」

ミラデイーは返事をしなかつた、たゞ美しい顔を枕に當て、しくしくと啜り泣きし始めた。

フェルトンは暫しの間いつものとほり平然としてこの様子を眺めてゐたが、容易に切りがつきさうもないのを見て出て行つた。女も彼について行つた。そしてド・ウインタール卿は遂に姿を見せなかつた。

「私の取るべき道がやつと分り始めたやうな氣がするわ。」ミラデイーはこの心の中の満足を見咎められぬやうにと布團の中へもぐり込みながら、荒々しい悦びに震へつゝ呟いた。

二時間は過ぎた。

「もう病氣はおしまひにする時分だ。」彼女は思つた。「起きて、今日こそ少しは成功したいものだ。私は十日しか持たない、して今晚でその内の二日はもう過ぎてしまふのだ。」

もう間もなく朝の膳部を下げに来る時分であつた——その時又フェルトンに會へるに違ひないとミラデイーは思つた。この見込は誤たなかつた。フェルトンは再び姿を現した。そしてミラデイーが手をつけたかどうかを見極めようともせず、食卓を片付けるやうに合圖した。

フェルトンは手に一冊の本を持つて、外の者達がみんな部屋を出て行くのを待つてゐた。

爐の傍の安樂椅子に椅掛つた、美しく、蒼白い、諦め顔のミラデイーは、さながら殉教を豫期してゐる聖い處女のやうに見えた。フェルトンは彼女の傍に寄つて言つた——

「奥さんと同じくカトリック教でいらつしやるド・ウインタール卿は、お勤めや儀式に出られなくてあなたは嘸かし苦痛でいらつしやるだらうと御想像遊ばし、毎日の彌撒の祈禱をおあげなさることをお許しになりました。こゝにその祈禱書があります。」

ミラデイーは頭を擡げて、ちつと士官を見詰めた、そしてその髪の固苦しい刈り方、その殊更に質素にした衣服、その大理石のやうにつやつやした、併しまた固い額を見て、ジェームス王や佛蘭西王の宮廷でよく會つたあの陰氣な清教徒達を思出した。

「私が？」彼女はこの青年士官の聲に認めたと同じ賤みの語調で——「私が彌撒を？ 墮落したカ

トリック教徒のド・ウインタール卿は、私が同じ宗教を信じてゐないことを、よく知つてゐる筈ですわ。」

「ではあなたは何宗なのです？」フェルトンは隠しきれぬ驚きの色を見せて、訊ねた。

「私が自分の信仰のために十分に苦しみました時、それをお話いたしましたせう。」ミラデーは熱誠を装つて叫んだ。青年士官はそれでも黙然として身動きもしなかつた。唯だ彼の目付だけはミラデーのこの言葉の力強さを語つてゐた。

「私は今敵の手中に陥つてゐます。」彼女は清教徒らしい熱烈な口調で言ひつゞけた——「さうだわ！ 神様、私を助けて下さるか、私が神様のために死ぬかさせて下さい！ これがあなたにド・ウインタール卿へ傳へていたゞきたい返事ですわ。してこの本は。」と觸ると身の穢れで、あるやうに指尖で祈禱書をさしながら——「どうかお持取り下さい、してあなた御自身でお使ひ下さい、あなたはド・ウインタール卿と同じ異端者に違ひありませんから。」

フェルトンは返事をしなかつた。そして先刻表したと同じ嫌惡の色を浮べてその本を取つて、物思はしげに部屋を出て行つた。

夕食の運ばれた時、ミラデーは祈りをあげてゐた——彼女の二度目の良人の嚴格な清教徒であつた老僕から教はつた祈りを。彼女はまるで夢中になつてゐるらしく、自分の廻りにどんなことが起つてゐるかも氣附かぬげに見えた。フェルトンは彼女の邪魔をせぬやうにと合圖した、して支度がすつかり濟むと、兵士共を連れてさうつと部屋を出て行つた。

ミラデーは終ひまで祈りをはると、立上つて食卓に着き、少しの食物と水とだけを攝つた。一時間後、食卓は片付けられた、が今度はフェルトンは兵士を連れて來てゐなかつた。ミラデーは横を向いて北叟笑んだ。

彼女はそれから三十分許り過ぎるのを待つて、古城の中がしんと静まり返つた頃——音としては大海のあの大きな呼吸である、波濤の永遠の囁きしか聞えぬ頃、すきとほつた、胸に沁み入るやうな、美しい聲を張擧げて、當時清教徒が非常に愛誦してゐた讚美歌の第一節を歌ひ始めた——

我らが強さを試さんとて、
君は我らを捨て給へり、
されど我らが努力の酬にとて、
早くも御手を延べ給ひぬ。

ミラデーは歌ひながらも、耳を澄ませた。張番中の兵士は、扉口で石になつたやうに立止つてゐた。

彼女は言ふべからざる熱と思ひとを籠めて尙ほも歌ひ續けた。彼女にはこの音聲が圓天井の下を遙か遠くまで傳はつて行つて、魔術の呪文の如く獄吏共の心を和げるやうに思はれたのであつた。けれども廊下の番兵は——確かに熱心なカトリック教徒だつたに違ひない——この呪文を拂ひのけたと見えて、鐵格子を開けてかう呼ばふつた——「お靜かになさい！ あなたの歌はデイ・プロファン

デイスのやうに憂鬱です、してもし、この城に閉込められてゐる上に、かういふ歌も又聞かされなければならぬのなら、これはとても堪へ切れないことです。」

「黙れ！」その時もう一つの嚴しい聲が叫んだ——ミラデューは直ぐにそれをフェルトンの聲と氣が付いたのである。「お前達の任務は何だ？ あの婦人が歌ふのを邪魔するやうに誰が吩咐けたか？ お前はあの婦人の番を命ぜられてゐる筈だ——逃亡しようとしたら射つやうに言はれてゐる筈だ。命令以外のことにしやばるのでないぞ。」

言葉に云へぬ悦びの光がミラデューの顔を輝かした。彼女は彼等の對話が耳に入らなかつたやうに装ひながら、悪魔が彼女の聲に與へたあらゆる魅力、あらゆる誘惑を聲に籠めて、再び歌をうたひだした——

我が涙、我が恐れ、

我が流浪、我が足枷も何かは、

我れは我が青春、我が祈り、

我が苦惱を記します、神を持てり。

フェルトンはこの竝ならぬ力と此上なき熱情とを籠めた聲を聞いてゐる内に、心が次第に亂れて來て、遂に突然扉を開けた。ミラデューは彼が燃ゆる殆ど目眩んだやうな眼をしてゐるのを見た。

「なぜそんなにそんな聲で歌ふのです？」

「御免なさい。」ミラデューは柔しく答へた。「私、私の歌がこの家に相應はしくないといふことを忘れましたの。私きつとあなたの宗教的感情を傷けましたのね、でもそれは誓つて故意にしたのではございせんわ。」

ミラデューはこの瞬間非常に美しく見え、又彼女の見た宗教的熱誠が彼女の容貌に一種崇高な表情を與へたので、フェルトンは全く眩惑されて、今迄たゞ話にしか聞いてゐなかつた天使を今日のあたり見てゐるやうな氣がした。

第五十一章 監禁の第三日

朝になつて、フェルトンはいつもの通り入つて來たが、ミラデューは彼が朝食の支度の指圖をしてゐるのを唯だ眺めてゐて、一言も言葉を掛けなかつた。彼が部屋を出ようとするその時、彼女は彼が何か話さうとしたやうに思へて、一道の光明を認めたのであつたが、併し彼の肩は動いたばかりで、彼は殆ど口先に出た言葉を胸に抑へつけて引退がつてしまつた。

午頃、ド・ウインタール卿が入つて來た。

それは晴れた夏の日で、照りはするがさまで暑くないあの弱い英國の陽が牢獄の横木の間から射しこんでゐた。ミラデューは窓から外をのぞいて、扉の開くのが聞えなかつたやうな振をしてゐた。

「さあ！」ド・ウインタール卿は聲を掛けた。「喜劇と悲劇とをやつた後で、今度は歌劇ですかね。」

ミラディーは両手を合せて目を天に向けた。

「エホバ様！ エホバ様！」天使のやうな美しい身振りと聲音とで、叫んだ。「この方を許して上げて下さい！」

「さうだ、祈んなさい、呪はれた女め！」男爵は罵つた。「あなたの祈りは中々寛容だ、あなたを決して許さぬ男の手中にあるくせに。」そして彼は部屋を去つた。

彼が出て行つた途端、ばたんと閉まらうとした扉のあいまからきらりと鋭い一瞥がこつちを射た、ミラディーは直ぐにフェルトンがそこに居ることに感付いた。

彼女は跪づいて祈り始めた——

「神様！ あなたは私がどんな聖い原因で苦しんでゐるか御存知でいらつしやいます。ですから私にこの試験に堪へる力をお授け下さいまし。」

扉が静かに開いた、この美しい哀願者はその音が聞えなかつたやうな振りをして、殆ど涙で噎ぶ聲で續けた——

その時彼女はやつとフェルトンの聲音に氣が付いたやうな風をした、そして素早く立上つて、跪いてゐる所を見られたのが恥かしいかのやうに顔を赧らめた。

「あなたは私が造物主の前に平身してゐる人を邪魔する権利があると思つてゐるとでもお考へなのですか？ 飛んでもないことです！ それに、悔悟は罪人に相當してゐます——どんな罪をその人が犯

してゐませうとも。して神の前に平身してゐる罪人は私の眼には神聖に見えます。」

「私が罪人？」ミラディーは審判の日の天使をも心和げさせたであらう微笑を浮めて、答へた。

「罪人？ お、神様！ あなたは私がどんな女か御存知でいらつしやいます！ 假りに私が罪の宣告を受けてゐると思召せ、フェルトンさま——でもあなたは殉教者をお愛しなさる神様が時として無辜の者に罪の宣告を受けさせることもあることを御存知ですわね。」

「もしあなたが無辜であつて、罪の宣告を受けてゐられたなら、殉教者でありましたなら、あなたは尚ほ一層祈る理由がございませう、して私も私の祈禱でああなたのお手助けをしたいものです。」

「お、あなたは正しい方です！」ミラディーは彼の脚下に身を投げて叫んだ。「私はもうぢつとしてゐることができないのです——試験に耐へ、自分の信仰を告白せねばならぬ場合になつて力が挫けてしまひやせぬかと心配なんですもの。ね、絶望してゐる女の歎願をお聞き下さいまし。あの人はあなたを瞞してゐるのですわ。けれどそれは今の問題ではありません、私はたいあなたに一つの御願ひが聞いていたゞきたいのですの、して、それをお話し下さるなら、私はこの世でも次の世でもあなたを祝福いたしますわ。」

「それは主人に言つて下さい。生憎私は許す力も罰する力も與へられてゐないので、神様がその責任をお委せなすつたのは私よりも位高い方にでした。」

フェルトンは二三歩扉口の方へ歩きでしたが、彼から目を離さなかつた美しい囚人は、直ぐに追掛

けて引留めた——

「どうぞ私のお願いをお聞き下さいまし！ 男爵が私から取上げたあのナイフ——まあ、終ひまでお聞き下さいまし！——あのナイフをほんの鳥渡でようございますから返して下さい、お願いですから！ 私あなたの膝に抱付いてお願いしますわ！ さあ、扉をお閉め下さいましな——あなたに御迷惑をお掛け申したくないのですもの。お、神様、どうして私があなたに對して企みを持つ筈がありませう——生れて初めて會つた唯ひとりの正しい、親切な、同情深い方であるあなたに！——きつと私の保護者であるあなたに！ 鳥渡あのナイフを——ほんの鳥渡！——私、扉の潜からお戻しいたしますわ！ ほんの鳥渡で、フェルトンさま、あなたは私の名譽を助けて下さるのですわ。」

「自殺なさるためだ！」フェルトンは愕然として、彼女に取られた手を引くことも忘れて、叫んだ——「自殺なさるためだ！」

「私はつい口に出してしまつた。」ミラデイーは聲を落とし、床の上に倒れるやうにガックリと坐つて、囁いた、「私は祕密を洩らしちやつた！ この方はみんな知つてゐる！ お、神様、私はもう駄目です！」

フェルトンは心を決め兼ねて、身動きもせず立つたまゝでゐた。

その時誰かの蹺音が廊下に聞えた。ミラデイーはド・ウインター卿の緩かな足取を覚えてゐた。フェルトンも亦それを聞きわけて、戸口へ近付いた。

ミラデイーは駆け寄つて、思ひを籠めた聲で——

「私の申したことを一言もあの人に話して下さいませな、もし話したら私の身の破滅ですわ、してそれにはあなたの——」

その時、蹺音はいよいよ近くなつて來たので、彼女は口を噤んで、限らない恐怖の身振りと共に美しい手をフェルトンの肩に當てた。

フェルトンは柔しく彼女を排除けた。そして彼女は寢椅子の上で倒れた。

ウインター卿は足を留めずに扉の前を通り過ぎた、そしてその蹺音は段々遠ざかつて行つた。

フェルトンは死人のやうに蒼ざめ、暫らくの間ぢつと耳を澄まして立つてゐた。それから、蹺音が全く聞えなくなつた時、夢から醒めた者のやうに深く呼吸を吐いて、部屋から走りだした。

「あゝ！」ミラデイーは、ウインター卿と反對の方向へ消えて行くフェルトンの蹺音に耳を澄ませながら、呟いた——「たうとう、お前は私のものになつた！」

併し忽ち彼女の顔は暗くなつた。

「もしフェルトンが男爵に話したなら、私は身のつまりだ。私が自殺などはしないと知つてゐる男爵は、わざとフェルトンの前で私の手にナイフを持たせらう、してフェルトンは直ぐに私の絶望がみんな茶番に過ぎないことに氣がつくだらう。」彼女は立上つて鏡の前へ行き、ぢつと自分の顔を眺めた。彼女はこんなに美しいことは未だ嘗てなかつた。

「おゝ、さうだ。」彼女は微笑みながら呟いた。「あの方は男爵に話しはしないわ！」
夕方、晩食が運ばれた時、ド・ウインター卿が入つて来た。

ミラディーは椅子に腰を下ろしてゐた。ド・ウインター卿は彼女の傍へ腰掛を引寄せて、それへ坐り、ポケットから一通の書付を取出して、靜かにそれを開いた。

「私が自分で書いた旅行免状をお見せに來ました。」

さう言つてミラディーからその書付へと目を移すと、彼はかう讀みあげた——

「佛蘭西の裁判官に依つて烙印され、懲罰の後許されたる、シャルロット・バックソンと稱する者を×××へ護送を命ず。」土地の名は空白にしてあります。「ド・ウインター卿は言葉を挾んだ。「あなたに何處か好きなところがありましたら、知らせて下さい。もしそれがロンドンから一千里以上以内でなければ、なるべくあなたの御希望に添ふやうにいたしませう。では續きを讀みます——『その者は右の土地に在住し、それより三リーグ以上離るべからず。逃亡の企てある場合は死刑に處すべし。宿泊料として一日五シリングを給す。』」

「その命令書は私の知つたことではありませんわ。」ミラディーは冷やかに言つた。「それに書込んである姓は私のでありませんもの。」

「姓ですつて？ あなたに姓があるんですか？」

「あなたの御兄弟の姓があります。」

「それはとんだ間違ひです。私の兄弟はあなたの二番目の良人に過ぎません、あなたの最初の御良人は未だ生きてゐられます。その方の姓を教へて下さい、すればシャルロット・バックソンの代りにそれを書入れて上げませう。いやなんですか？——何も仰有らないんですか？ それでは、あなたはシャルロット・バックソンとして記名しなくてはなりません。」

ミラディーは口を結んだまゝであつた、たゞ今度は最早芝居でなくて、恐怖からであつたのだ。

「では、」ド・ウインター卿は言葉を繼いで、「この命令書を明日バックソンの許へ届けます、して一日置いてそれは公の手で署名され、公の判で調印されて戻つて來ませう。それから二十四時間以内に、これに書いてあることが執行されるのです。では左様なら。これが私があなたに申し上げなければならなかつたすべてです。」

ド・ウインター卿は立上つて、ミラディーにいやみらしく一禮し、部屋を出て行つた。

ミラディーはほつと息をついた。まだ彼女の前には四日といふ日數があるのだ。四日あればフェルトンを誘惑し終ほせられるだらう。

彼女はド・ウインター卿の威嚇で氣落ちしてゐるらしく見せなくなつた。で彼女は食卓に向つて悠々と食事をした。それから前夜と同じやうに、跪づいて聲高に祈を繰返した。見張の兵士は、これも前夜と同じやうに巡回を止めて、立止まつて聽き入つた。

間もなく彼女はその兵士よりも軽い足音が、廊下の端から近付いて來て、やがて彼女の扉の前では

つたり留まつたのを聞いた。

「あの人だ！」彼女は呟いた。そして昨夕フェルトンをあゝも烈しく昂奮させたあの同じ讚美歌をうたひ始めた。

併し、彼女の優しい、聲量たつぷりな、すきとほつた聲は常にも増して人の胸に迫るものがあつたにも拘らず、扉は依然として閉ざられたまゝであつた。でも、この讚美歌が終ると間もなく、ミラデューは扉の外に深い溜息を聞いた、そしてそれからさつき近寄ってくるのを聞いたと同じ聲音がゆるゆると、いはゞ厭々ながらとしか思はれぬ歩調で遠のいて行くのを聞いたのであつた。

第五十二章 監禁の第四日

翌朝フェルトンは部屋へ入つて行つて見ると、ミラデューは椅子の上に突立つて、ハンカチを細く引裂いて繕つて繋いでこしらへた紐を手につつてゐた。フェルトンが扉を開ける時たてた物音で、彼女は椅子からひらりと飛下りて、手の紐を背後に隠さうとした。

青年は常よりも蒼ざめ、眠りの不足から充血した眼は、彼が不安な一夜を過したことを證してゐた。彼は椅子に腰を下ろしたミラデューの方へ靜かに歩み寄つた、そして彼女が迂闊にも、いや恐らくは故意に、隠すことを忘れてゐたあの危険な綱の端を掴んで、「これは何ですか、奥さん？」と冷に訊いた。

「これ？ 何でもありませんわ！」ミラデューは憂鬱な表情を浮めた笑顔で答へた。「退屈が囚人の怖ろしい敵なことはあなたも御存知でせう。私退屈しましたの、でこの紐をこさへて慰めてみましたのですわ。」

フェルトンはミラデューが椅子の上に立上つてゐるのを見た個處の壁のあたりへ眼を投げた、そしてその壁に、衣服か武器かを吊すために取付けられたらしい金鍍金の鉤が打つてあるのを見た。

彼はギクリとして、訊ねた——「では、何故この椅子の上に立つてゐたのです？」

「それを聞いて下さいますな。我々眞の基督教徒には偽りを言ふことが禁ぜられてゐることをあなたも御存知でせう。」

「ぢや、私があなたは何をしようとしてゐたかお話しませう。あなたは心中に懐いてゐられたあの不祥な計畫をなしとげようとなすつたのです。よく憶えてお置きなさい、奥さん、もし神が偽りを言ふことを禁じてゐますなら、神は自殺することを遙かに固く禁じてゐる筈です。」

「神様は御自分のおつくりになつた者の一人が不正に迫害されてゐるのを御覽遊ばしたら、——自殺と屈辱との間に置かれたのを御覽遊ばしたなら。」ミラデューは強い確信の口調で——「きつと自殺をお許しになりますわ、何故つて、自殺もその時は殉教になりますもの。」

「でも奥さん、あなたのお命を警戒するのが私の務めです、して私はさうするつもりです。」
「まあ何といふ残酷な務めでせう！ してあなたは最後の審判の日に、神様が目隠しをされた刑吏と

不正な裁判官との間に區別をつけなさるだらうと思つてゐるのですか？ あなたは私が自分の體を殺すことを許さうとなさらないで、而も私の魂を殺さうとする者の道具に御自分をしていらつしやる！」

「併し、繰返して申しますが。」フェルトンは非常に感動した様子で——「何の危険もあなたを嚇かしません、してド・ウインター卿のことは私自身のこと同様に保證します。」

「狂人の沙汰ですわ！」ミラデーは叫んだ——「世の賢い人は自分自身のことを保證するさへ躊躇しますのに、他人のことを保證するのを憚らないなんて！」

フェルトンはこの論法の力を心の奥底まで感じながら、呟いた——「でも、生きてゐる間は、私はあなたの生命を失くさせはいたしません。」

「けれど私は生命よりずつと私にとつて大事なものを失くするでせうよ——私の名譽を失くするでせうよ。して私が神様や人間の前で、私の恥辱や不名譽に對して責任を負つていたゞくのはあなたですわ！」

フェルトンは、情ない人間ではあつたが、（但しはさう見せ掛けてゐたのかも知れぬが）、既に彼を縛つてしまつてゐたあの人知れぬ力に今はもう抵抗することができなくなつた。かくも美しい、いとも輝かしい幻のやうに麗かなこの女を見、彼女が或ひは歎願し或ひは威嚇するのを聞き、悲歎と美との結びついた力の下に忍ぶことは、忘我的信仰の強烈な夢に弱められた頭脳には餘りに刺戟が強すぎた、燃え上る天國への愛と啖ひ荒らす人類への憎悪とに蝕まれた心には餘りに刺戟が強すぎた。

ミラデーは彼の心の動搖を見て取つた。この若い狂信者の血潮と共に燃えあがる熱情の焰を直感で悟つた。そして敵が退却に取掛ると見ると、勝鬨をあげてとつかんする老巧な將軍のやうに、彼女は立上つて、腕を擴げ、頸を露出しにし、髪を亂し、手で胸の邊をつましく掻き合せながら、して既にこの若い清教徒の血潮をかきみだしたあの炎で眼を輝かしながら、彼の方へ進みよつて、あの美しい聲音に力を籠めて歌ひだした——

かの生質をパールに透れかし、

かの殉教者を獅子に投げよかし、

神は汝に悔い改めよと教へたまはん！

深淵より我が歎きに耳藉し給へば。

フェルトンは石に化つたやうに突立つてゐた。

「あなたは誰です？ あなたは何者です？」彼は兩手を握りしめながら叫んだ。「あなたは天使ですか、それとも悪魔ですか？ エロアですか、アスタルトですか？」

「あなたは私に分らないのですの、フェルトンさま？ 私は天使でも悪魔でもありません、大地の娘、信仰の妹、ただそれだけですわ！」

「さうです！ 私も最初はそれを疑ひましたが、今は信じてゐます。」

「あなたは信じて下さる、而もド・ウインター卿と呼ばれるあのベリアルの子の一味なのです！ あなたは信じて下さる、而も私を私の敵の手に——英國の敵、神の敵の手にほつて置くのです！ あなたは信じて下さる、而もこの世をその異教と放埒とで満たし穢す者に、——盲目共はバッキンガム公と呼び、信者は基督の敵と呼ぶあの憎むべきサルダナラパスに、私を渡すのです！」

「私がバッキンガム公にあなたを渡す？ 私か？ それは何ういふわけなのです？」

「彼等は眼ありて見ず、耳ありて聞かず、ですわ。」

「さうだ。」フェルトンは最後に残つてゐる疑ひを拂ひのけでもするやうに、汗ばんだ額を手で拭ひながら——「さうだ、私は夢に私に話すあの聲に聞き覚えがある、さうだ、私は夜々私を訪れて、私の眠れぬ魂にかう呼ばる天使の姿に見覚えがある——打て！ 英國を救へ！ 汝自身を救へ！ 汝はエホバを慰めないで死ぬぞ！ と。さあ、仰有つて下さい。」フェルトンは叫んだ。「仰有つて下さい！ 今こそあなたの仰有ることが分ります。」

怖ろしい悦びの閃きがきらりとミラデーの眼に光つた。この殺人的な閃きは瞬忽の間に消え去つたけれども、フェルトンは素早くそれを目付けて、さながらそれがこの女の心の暗い深淵を照らしたかのやうにびくつとした。彼は忽ちド・ウインター卿の注意やミラデーの誘惑の數々を思ひだした。彼は一步後退さつて、頭を垂れた、而も彼は尙ほもこの怪婦人に魅せられて、彼女から目を逸らすことができなかった。

ミラデーはこの躊躇の意味を誤解するやうな女でなかつた。かういふ如何にも熱情的に見える最中でも、彼女の氷のやうな冷靜は失はれてゐなかつた。

「けれど。」彼女は打萎れて言つた。「ベテユリーをこのオロフェルヌから救ふジュデイトの役割は私にできませんわ。上帝の劍は私の腕には餘りに重すぎますわ。ですから、私を死で汚辱から逃れさせて下さい——殉教に隱家を見付けさせて下さい。私はあなたに、罪人のやうに、自由を求めません、して又異端者のやうに、復讐を求めません。死なせて貰ふこと、これが私の要求する全部ですわ。私ほんたうに懇願いたしますわ、膝を折つて哀願いたしますわ——死なせて下さい——すれば私の最後の呼吸は私の保護者への祝福を息しませう。」

このやさしい哀訴の聲を聞き、このおどおどした俯向がちの様子を眺めると、フェルトンは思はずミラデーの前へ進み寄つた——

「あゝ！ もしあなたが犠牲者だといふ證據を見せて下さつたなら、私はたゞあなたに同情するばかりなんだが。併しド・ウインター卿はあなたのことを非常に悪く言つていらつしやる。あなたは基督教徒です——信仰上私とあなたとは同じきやうだ。私はあなたの方へ引付けられたやうな氣がする、——私の恩人の外何人をも愛したことはない私が——私の一生を通じて、裏切者と不信者との外何者にも會はなかつた私が。併しあなたは、實際美しい。あなた、——打見たところ清淨なあなたも、ド・ウインター卿がかうもあなたを追跡するところを見ると、多くの罪を犯しなすつたに違ひ

ない。」

「彼等は目あつて見ず。」ミラデイーは例へやうもないやさしさで繰返した——「耳あつて聞かず、ですわ。」

「ぢや、話して下さい、話して下さい！」

「何ですつて、私の恥をあなたに打明けるのですつて！」ミラデイーは顔に羞恥の紅を潮して——
「時として、我罪は他の恥ですのに。して男のあなたに、女の私が自分の罪を打明ける！ おゝ！」
ミラデイーは両手でわが眼を蔽うて——「断じて、断じて出来ませんわ！」
「きやうだいと思つて私に！」フェルトンは囁いた。

ミラデイーは長い間疑ふやうな表情でちつとフェルトンの顔を見詰めた。

「えい、では！」ミラデイーは叫んだ、「私のきやうだいを信じますわ、して——」

かう言ひかけた時ド・ウインター卿の登音が聞えた。そして今度はミラデイーのこの怖ろしい義兄弟は、昨夕のやうに扉の前を通りすぎるだけで満足せず、立留まつて、番兵と二言三言言葉をかはしてから、扉を開けて入つて来た。その間にフェルトンは素早くミラデイーの傍から飛退いて、ド・ウインター卿の姿が現れた時は、この囚人から數歩離れたところにもゐた。

男爵は悠々と入つて来て、探るやうな瞥見を囚人から青年士官へと送つた。

「ジョー、君はこゝに隨分長い間ゐたね。」彼は口を開いた。「この女は自分の罪惡を君に話したかい？ そんなら二人の會話の長かつたことも了解できる。」

フェルトンはぎくつとした。してミラデイーは今この狼狽した清教徒の救助に出なかつたなら自分の身の破滅だと感じた。

「まあ！ あなたはあなたの囚人が逃亡することを怖れていらつしやるのね！ そんなら、この獄吏さんに私がほんの今しがたどんなお願ひをしたかお訊ねなざるがいゝわ。」

「お願ひをしたつて？」ド・ウインター卿は疑はしさうに言つた。

「はい、さやうです。」青年士官は益々狼狽して答へた。

「してどんなお願ひだね？ さあ、聞かうぢやないか。」

「ナイフでございます——使つたら直ぐ、潛から戻して下さるからと言ふので。」

「では此處には、この美しい夫人が咽喉を切りたがつてゐる者が誰か隠れてゐるのだね？」ド・ウインター卿は皮肉を帯びた嘲りの口調で言つた。

「えい、私がこの中に隠れてゐます！」ミラデイーは叫んだ。

「私は既にアメリカとタイバーン（譯註、倫敦の死刑執行所）とどちらでもあなたの選ぶに任せておいた。」ド・ウインター卿は答へた。「ではタイバーンをお選びなさい——綱の方がナイフよりも確かだと思ひます。」

「その通りですわ、私も前からさう思つてゐました。」それから彼女は聲を低めて言ひたした。「私ま

たそのことを考へて見ますわ。」

フェルトンは骨の髄までぞつと身震ひした。ド・ウィンター卿は多分それに気が付いたのであらう、かう言つた——

「ジョン、變なことを信ずるのでないよ。私は君に信頼をおいて来た、用心なさい！ 君に注意をしておいた筈だ。して、もつと元氣をおだし、三日の内に私達はこの女から釋放されるのだ。」

フェルトンは頭を垂れて物思ひに沈んだ。

男爵は彼の腕を取つて、ミラデイーの方を見返りながら、出て行つた。

「あゝ、あゝ。」美しい囚人は扉が閉まると呟いた。「私の思つたほど事は進まなかつたのだ。フェルトンはまだ躊躇してゐる。彼はあの忌はしいダルタニアンのやうな男でない。」

けれども、彼女はフェルトンの顔を再び見ずにこの日が過ぎはしまふと思つた。果してそれから一時間ばかり経つて、彼女は誰かが戸口で囁く聲を聞いた、そしてそれから直ぐ扉は開かれ、フェルトンの姿が現れた。

青年は扉を開け放したまふ、急いで部屋の中へ入つて来た。彼の顔は恐ろしく昂奮してゐた。

「何か御用ですの？」彼女は訊ねた。

「お聴きなさい！」フェルトンは低い聲で言つた。「私はこゝへ来たことを誰にも知れないやうにと思ひ、又私の話すことを誰にも立聴されぬやうにと思つて、今番兵を向うへやつて来ました。男爵

はたつた今怖ろしい話を私になさいましたよ。」

ミラデイーは諦めた生贄の微笑を浮めて、頷た。

「あなたが悪魔であるか、男爵が——私の恩人、私の父以上の人が人非人であるかどうかです。私はあなたを四日知りました——あの方はこれで十年愛してゐます、ですから私があなたの方二人の間に迷ふのも無理でありますまい。私の言ふことを聞いて驚いちゃいけませんよ、私は得心させて貰ひたいのです。今晚、十二時過ぎに、あなたのところへ参りますから、どうか私に得心させて下さい。」

「いゝえ、フェルトンさま、いけません、その犠牲は餘り大き過ぎますわ。私は破滅した者です——あなたも私と一緒に破滅してはなりません。私の死は私の生よりも遙かに雄辯でございます。して屍の沈黙は生きてゐる囚人の言葉よりもずっとよくあなたを得心させますでせう。」

フェルトンは語を強めて彼女を慰撫した。そしてそれから斯う付加へた——「もし今晚私達が會つた後でも、あなたがまださう言張られるなら、その時はあなたの御自由にさせて上げませう、して私もあなたのお頼みになつたあの武器を持つて来て上げませう。」

「さうして下さいな！ ではあなたのために、私も持ちませう。」

「それを誓つて下さい。」

「神様にかけて誓ひますわ！ これで満足なすつて？」

「えゝ、ぢやまた今晚會ひませう。」さう言つて、フェルトンは部屋から飛出し、扉を閉め、自分が

代つて張番をしてゐたかのやうに、兵士の槍を手に持つて廊下に待つてゐた。間もなく兵士は歸つて來たので、フェルトンはその槍を彼に戻して、急足に立去つた。小窓からその様子を眺めてゐたミラデーは、肩に残忍な嘲りの微笑を浮めて元の座に歸り、かう呟いた——

「まあ、何といふ馬鹿な狂信者だらう！ 神——それは私自身だ、してあの愚者は私が自分の復讐をするのを助けてくれるのだわ！」

第五十三章 監禁の第五日

ミラデーは半ば勝利を得た、そしてその成功は彼女の力を新たにした。その内に時はたつて行つた。美しい囚人の心は時計の鳴る毎に打震へた。九時に、ド・ウインタ卿はいつもの通り廻つて來た、そして窓々や格子を調べ、床や壁を叩いて見、煙突や扉を検査した、而もこの長い仔細な検査の間、彼もミラデーも一言も口を利かなかつた。

「さあ、これで。」城主は立去際に言つた。「あなたも今晚は逃出さんだらう。」

やがて十時になり、十一時が過ぎて、遂に十二時の時計が鳴りだした。そしてミラデーは焦々して待ち始めた。新しく交替した番兵はコツコツと廊下を歩きだした。十分程してフェルトンの蹙音がした。ミラデーははつと耳を澄した。

「おい。」青年士官は番兵を呼留めて言つた。「どんな事があつてもこの扉の傍を離れるんぢやないぞ。昨夕ある兵士がほんの鳥渡持場を去つて、その間この私が代りに立つて、やつただけれども、たうとう罰をくつたことはお前も知つてゐるだらう。」

「はい、知つて居ります。」

「だから嚴重に警備してゐるがいゝぞ。わしはあの婦人に自殺のおそれがあるので、これからその様子を見に行くのだ。わしはあの婦人を監視する命令を受けたのだ。」

「まあ！」ミラデーは呟いた。「あの嚴格な清教徒は誠を吐いてるわ。」

彼はかう言ひ捨て、部屋へ入つた。ミラデーは立上つて言つた——

「おゝ、來らした！」

「私は來ると約束しました。で來たのです。」

「けどあなたは何か外のことも約束して下さいましたわ。」

「え、何でせう？」青年士官は幾ら制しようとしても、膝がぶるぶる震へ、額に汗が滲みで、くるのを感じながら、訊ねた。

「あなたは私にナイフを持つて來て下さるつて、して私達の會見後置いて行つて下さるつて約束しましたわ。」

「そのことはもう仰有つてはなりません。此世には神の子が自殺するのを幫助することができる立場

といふものはないのです。私は色々考へて見ました、そして斷じてさういふ罪惡を犯してはならぬと決心しました。」

「まあ！考へて見ましたつて！」ミラデイーは自分の椅子にまた腰を下ろしながら、輕蔑するやうな微笑を浮めて——「して私も亦、色々考へて見ましたわ！」

「何のことをです？」

「自分の言つた言葉を守らぬ男には何も言ふことはないといふことですわ。さあ、あなたはこの部屋を出て行らつしやるがいゝわ。私は口を利きませんよ。」

「こゝにそのナイフがあります。」フェルトンはポケットからその武器を取出しながら言つた——彼は約束によつて持つては來たが、囚人に渡すのを躊躇したのだ。

「ちよつと見せて頂戴。」

「何になさるのです？」

「きつと直ぐにお返ししますわ。さうしたらそれを卓子の上に置いて、それと私との間に立つてゐなさるがいゝわ。」

フェルトンはナイフをミラデイーに渡した。彼女はそれを注意深く檢べ、その刃を自分の指の端で試してみた。

「中々いゝ切れ味ですのね。」彼女はそのナイフを青年士官に戻しながら——「あなたは忠實なお友達ですわ。」

フェルトンはナイフを取つて、卓子の上に置いた。ミラデイーは満足さうな眼付で、彼のすることを眺めてゐた。

「では私の言ふことを聽いて下さいね、フェルトンさま。」ミラデイーは憂鬱を帯びた嚴肅な口調で——「あなたの妹、あなたのお父様の娘だと思つて、あなたに申し上げますわ。まだ年若く、不幸にも美しかつた時分、私は恐ろしい畏におびきよせられました。私は抵抗しました。誘惑や亂暴が私の廻りに日に日に増して行きましたが、私は抵抗しました。私が信仰してゐる宗教、私が崇拜してゐる神様は、私とその神様その宗教に救ひを求めたからと言つて、冒瀆され罵られました、それでも私は抵抗いたしました。それから、幾多の迫害が重ねられ、そして私の魂を屈伏させることができなないものですから、私の體を永遠に穢さうとして——たうとう——」

ミラデイーは鳥渡言葉を切つた。苦つばい微笑が唇の邊りに漂つた。

「たうとう——」フェルトンは言つた。「たうとう何うしたのです？」

「たうとう、彼等はある夜外の手段では打勝つことのできないその抵抗力を痺れさすことに決めたのです。或夜彼等は私の飲物に強い麻酔薬を混ぜました。私は食事をすますかすまさぬ内に、段々常ならぬ無感覺へ落ちこんで行くやうな心地がするのです。私は何の疑念も挟みませんでしたけれども、でも言ひ知れぬ恐怖に驅られて、この睡氣を迫拂はうと腕きました。私は立上りました、そして助け

を呼ぶために、窓邊まで行かうと思ひましたが、然し脚が言ふことを聴かないのです。私は両手を延ばして、物を言はうとしました。けれど唯だ意味の分らぬ聲が出るだけでした。その内に私は倒れさうになつて、椅子に摺まりました。けれどこの支へさへ直に私の弱り果てた腕には駄目になつて、私は先づ片膝をつき、それから兩膝共ついて了ひました。祈らうとしましたけれど、舌は凝つて了ひました。して私は死にも似た眼りの餌食となつて、床の上に倒れてしまつたのです。「この眼りの間に過ぎたことは一切、私の記憶に少しも残つてゐまん。私の憶出せる唯一つのことは、目が覺めて見ると、世にも豪奢に飾り立てゝある、天井の窓からしか光の來ない、圓形の部屋に移されてゐたといふことだけです。」

「私は自分の居る場所に氣がつき、唯今お話ししてゐるやうな事情を思出せるまでには随分かゝりました。暫らくの間、私は夢を見てゐるのだと思ひました。けれども、段々と怖ろしい現實が私の上に押し寄せて來たのです。私は陽の蔭りでこの日も三分の二はもう過ぎたことを知りました。して見ると、私が眠つて倒れたのはその前日の夕方でしたから、私の睡りは殆ど二十四時間續いたわけなのです。この長い睡眠の間に一體どんなことが起つたのでせう？」

「その内に、晩の七八時頃でもありましたらうか、突然扉の蝶番のギーと軋る音が私をびつくりさせました、そして天井の窓の上に火の玉が現れて、部屋の中をばつと明るくすると、私は怖ろしくも、私から五六歩の處に一人の男が立つてゐるのを認めためです、私はその男の口から出た最初の言葉

で、自分かもう生涯取返しつかない身になつたのだといふことを知りました。「彼は傍へ來て私の愛を引換へに彼の財産を私に提供すると言ふのです。そしてつかつかと傍へ寄つて來て私の手を取らうとしました——私は卓子の方へ駆けよつて、ナイフを握んで、自分の胸に當てました。」

「きつと私の眼付、私の聲、私のすべての様子には、此世の最も悪い人間共をも納得させるあの眞實さがひらめいてゐたのでせう、彼は立留まつて叫びました——「おゝ、そんなことをしてはいけません！ あなたをそんな風にして失ふには、あなたは私にとつて餘りに可愛らしい囚人です。では左様なら！ 私はあなたの御機嫌の直るまで待ちませう。」かう言ふと、彼は口笛を鳴らしました、そして部屋を照らしてゐた炎の玉は上へ昇つて行つて、見えなくなりました。私はもう一度眞の暗闇の中に取残されたのです。それから先刻と同じ扉のあけたてする音が聞え、それがすむと、また灯の玉が下りて來て、私はもう一度唯だの獨りぼつちになりました。」

「ですがその男は誰だつたのです？」フェトルンは訊ねた。「併しミラデーイはこの問ひには答へないで、更に話を續けた——「私は少しの音にも脅えながら、椅子の上でその夜を過しました、眞夜中頃、ランプが消えて、あたりがまた眞暗になつたからです。けれどあの悪者が二度と姿を見せない内に夜は過ぎました。日の光が射しそめ、食卓は取片付けられてゐました、併し私は尙ほあのナイフを手握つてゐたのです。このナイフが私のたゞ一つの希望でした。私は疲勞におしひしがれ、私の眼は寢不足で燃えるやうで

した。私は瞬時の間も眼を閉ぢようとしなかつたのです。けれども日の光は私を安心させました。私
はあのナイフを枕の下に隠して、寢床へ身を投げました。

「目が覺めた時、別の食膳が用意されてありました。今度は、恐ろしさですが、何しろ四十八時間何
も食べませんでしたので、堪へ切れない空腹が感ぜられたのです。私はパンを幾らかと果物を少
しと食べました。それから、私の飲んだ水の麻醉薬が混ぜられたことを思出して、食卓の上のものに
は手も觸れないで、化粧臺の上の壁に取付けられた大理石の水溜からコップへ水をとりました。

「やがて夜が來ました。このくらがりの眞中で、私は食卓が床の中へ沈んで行くのを見ました、それ
から十五分許りして、それはまた夕食をのせて出て來ました、してその直ぐ後で、昨夕と同じ燈のお
蔭で、私の部屋は再び明るくなりました。

「私は眠り薬のやうなものを何も混ぜることができないものだけ食べることにしました、二つの卵
と少しばかりの果實が私の攝つた食物です、してそれから私はあの水溜から一杯の水を汲んでそれ
を飲みました。ところが一口飲んで、それは朝と同じ味をもう持つてゐないやうに思はれました。忽
ちある疑惑が頭に閃きました。私ははつとして止めましたが、併し既にコップの半分は飲み干して
ゐたのです。私は残りを投捨て、氷のやうな恐怖の汗を額に流しながら、ぢつとしてゐました。

「三十分も経たぬ内に、この前と同じ徴候がまた現れ始めました。たゞ、今度は半分しかコップの水
を飲みませんでしたので、ぐつすり寢込むまでにならず、抵抗する力も身を護る力も全然奪はれはし

たものゝ、身の廻りに過ぎた一切は意識に残る程度の假睡に陥つたゞけでございました。私は私に殘
された唯だ一つの防禦物——私の守り刀を取り、寢臺の方へと足を曳摺つて行きました。けれども
枕まで行き着けぬ内に、私はばつたりと膝をつき、両手で寢臺の脚に縋みつきました。」

フェルトンは怖ろしい程眞青になつた、そして痙攣的な身震ひが彼の體ぢうに這ひひろがつた。

「して一番怖ろしかつたことは。」ミラデーは今も尙ほその時の苦悶を思出すかのやうに聲をふる
はせて、話し續けた。「今度は私が自分の身に降りかゝる危険を意識するといふことでございました。
——私の心が私の眠つてゐる體の中で目覺めてゐるといふことでございました——何でも見え、何で
も聞えるといふことでございました。」

「私は燈がまた上へ昇つて行つて、私を暗闇の中へ殘して行くのが見えました、それから、あの、扉
の軋む音が聞えました。」

「私は本能的に誰かゞ傍へ寄つてくるのを感じました。私は聲を立てようと努めました、して信ずべ
からざる意志の努力で體を起しさへしましたが、併し直ぐに又ぐらぐらとして、敵の腕へ倒れてしま
つたのです。」

「その男は誰ですか教へて下さい！」青年士官は堪らなくなつて叫んだ。

併しミラデーはこの問ひが聞えなかつたかのやうに、更に話を續けた——

「私は一生懸命になつて跳きました、して恐らく随分長い間反抗したのでせう、私は彼がかう叫ぶの

を聞ききました。「仕様のない清教徒共め！俺は彼奴等が刑吏をてこずらせたことはよく知つてゐる、だが口説き手にかう強く當らうとは思はなかつた！」

「あゝ！この死者狂ひの抵抗も長くは續きませんでした。力がもう出なくなつてしまつたのです、して今度はこの卑怯者に勝たせたのは私の眠りでなくて、私の失神でございました。」

フェルトンはたゞ苦悶の呻きを洩らしたばかりで、何の言葉も聲も立てずに聴き入つてゐた。蠟石のやうな額からは冷たい汗が流れて落ち、手は上衣の下で胸をかきむしつた。

「私が我れに歸つて眞先に起つた衝動は、枕の下のナイフを見ることでした。よしや身を護るに役立つたなかつたにしても、少くも贖罪のために有用かも知れません。」

「けれど、フェルトンさま、このナイフを手にとると、ある怖ろしい考へが胸に浮んだのです。「やがて夜がやつて參りました。ランプは靜かに上つて行き、天井の深みへ消えてしまつて、部屋の中は眞の闇になりました。私は眼に力を籠めてくらがりの中を見透さうと努めました。それから十分程たちました、私は床をぎしぎし言はせる蹻音に氣が附きました、して闇の中ながらも、私の寢床へ近寄つてくる影を見ました。」

「急いで下さい、急いで！」フェルトンは口を挾んだ。「あなたの言葉の一つ一つが鎔けた鉛のやうに私を焼くのがお分りになりませんか！」

「その時。」ミラデーは言ひ續けた。「私は全身の力を奮ひおこしました。そしてあのナイフを手にとりしめて、彼が私の傍へ来たとき、悲しみと絶望との最後の叫びと共に、彼の胸の眞中へぐざと刺込みました！けれど、何たる卑怯者でせう！彼はすべてを豫想してゐたのです。彼は胸に胸甲をつけてゐたのです、ナイフは刃がまくれてしまひました。」

「おゝ！あなたは私の命を取りたいんですね？」彼は私の腕を掴んで、ナイフを私の手からもぎとりながら、叫びました。「それでは私は嫌ふ以上だ、恩知らずだ！さあ、さあ、お氣を鎮めなさい、可愛い娘さん！私は御機嫌が直つたとばかり思つてゐたのですよ。私は御婦人を無理に留めて置くやうな暴君でありません。あなたは私を愛していらつしやらないんですね？今やつと得心がゆきました。明日はこゝを出して上げませう。」

「私はたつた一つの望みしか持つてゐませんでした——それは彼に殺されるといふことです。「注意なさい！」私は申しました。「私の自由はあなたの不名譽ですよ！」

「それは何ういふわけですか？」

「といふのは、私は自由の身となると直ぐ、一切をみんなにぶちまけるからです。あなたの働いた亂暴を世間に公表するからです。この穢ららしい家のことを觸れちらすからです。あなたは高い身分の方です、けれどあなたの上には王様がゐます、王様の上には神様がいらつしやいます！」

「そんならあなたを此處から出さないだけだ。」と彼は言ひました。

「ようございませうとも！」私は叫びました。「ちやこの囚獄をまた私の墓所にするだけです。私こゝ」

で死にます、死んで、亡霊の責苦が生者の威嚇よりも怖しくないかどうか思ひ知らせて上げます！」

「だがあんたに兇器を持たせはしないよ。」

「けれど、使ふ勇氣さへあれば絶望が誰の手にも届くところへ置く兇器が世にあります——それは絶食して死ぬことです。」

「ねえ、平和の方がそんな戦争よりもずっとよくないかね？ 私はあるあなたをたつた今自由の身にして上げよう。私はあなたを操の固い處女だと世間に言つて上げよう。」

「けれども私は頑として諾きませんでした、すると彼は嘲弄するやうな口調で、「では勝手にするがよい。絶食して死んでも俺の咎ぢやないぞ。」と言ひ捨て、部屋を出て行きました。私は悲しみといふよりも寧ろ、復讐に失敗した無念さに打ちひしがれたまゝちつとしてみました。」

「彼は自分の言葉を守りました。その次の日は晝も夜も姿を見せませんでした、が私も亦自分の言葉を守つて、食べも飲みもませんでした。二日目の晩に扉が開きました。私はその時、力がなくなつて床の上に臥してゐましたが、その音を聞くと、片手について體を起こしました。」

「どうだね。」聞違ふには餘りに怖ろしく私の鼓膜を打つあの聲が言ひました——「ちつとは納得したかね、してほんの沈黙の約束だけで自由を購はないかね？ ね、私は立派な貴族だ。私は清教徒は好かんけれども、その彼等にも公平なつもりだ。さあ、私のために十字架にかけてちよつと誓つて下さい——私は外に何にも求めない。」

「十字架にかけて！」私は思はず起上りました、その忌まはしい言葉で全身の力が甦へつたのです——「ちや十字架にかけて、どんな約束も、どんな威嚇も、どんな責苦も、私の肩を閉ぢさすことはできないといふことを誓ひます！ 十字架にかけて至るところで、あなたを人殺した、操を破つた者だ、卑劣漢だと罵詈することを誓ひます！ 十字架にかけて、もし首尾よく逃亡できたなら、全人類からのあなたに對する復讐を叫ぶことを誓ひます！」

「お聞き。」彼は言ひました。「私はあなたに今晚の残りと明日一日との猶豫を興へる。その間によく考へてごらん下さい！ 黙つてゐると約束すれば、富や尊敬や、名譽までがあなたを取巻くのだ。しやべるなどと威すなら、私はあなたに汚行の罪を宣告するのみだ。」

「あなたが？」私は思はず叫びました。

「あなたが？」

「一生拭ふことのできぬ汚行の罪を！」

「あなたが！」私は繰返へしました。おゝ！ フェルトンさま、私は彼は氣が狂つたのだと信じましたわ。

「さうだ、私のだ！」彼は答へるのでした。

「おゝ、あつちへ行つて下さい！」私は言ひました。「あなたの眼の前で私とその壁に頭を打突けて死ぬのを見たくなかつたら、出て行つて下さい！」

「それはあなたの勝手だ。では明日の晩までぐすよ！」
「え、明日の晩までぐすわ！」私はさう答へて、床の上に倒れ伏して、激怒のあまり絨緞を咬みま
した。」

フェルトンはよろよろとして椅子に靠れ掛つた。ミラデーはこの青年士官の固い心が恐らくはこ
の物語の終りを待たぬ内に崩れてしまふだらうと、悪魔の悦びに打震へながら見て取つた。

第五十四章 古典劇の手

ミラデーは鳥渡の間口を噤んで自分の言葉に聴き入つてゐる青年士官の様子を窺つてから、再び
かの怪奇な物語を續けた。

「いよいよ最後の晩が來ました。私は弱り果て、氣が遠くなつてゐる最中に、扉の開く音を聞きまし
た。恐怖は我れに返らせました。彼は面覆をつけた男を連れて入つて來ました。彼も亦面覆をつけて
ゐましたが、私は彼の足取り、聲、それから悪魔が授けたあの凛々しい風采を知つてゐます。

「どうだね。」彼は言ひました。「私が要求したあの誓ひを立てる決心がついたかね？」

私はきつぱりと斷りました。すると彼は雷のやうな聲で、かう言ふのです——

「お前は娼婦だ。ではお前に娼婦の刑罰を與へてやる！」そして連れて來た男の方を向いて命じまし
た——「さあ、お前の職務を果せ！」

「お、その男の名は！ その男の名は！」フェルトンは新たな憤怒に燃えて、叫んだ。「私にその
男の名を教へて下さい！」

「それから、私の叫ぶのも關はず、抵抗するのも關はず、その刑吏は私をつかまへて、床の上へ投付
け、傷のつくほど固く縛り上げました、そしてそれから、涙に噎んで、息も絶々に、私の叫びを聴い
て下さらうとしない神様の名を呼んでゐます内に、私は突然苦悶と恥との恐ろしい叫び聲を擧げまし
た。眞赤に焼けた刑吏の烙印が私の肩に押されたのです！」

フェルトンはたゞ唸いた。

「ごらんなさい！」ミラデーは女王のやうな威嚴をもつて立上りながら、——「フェルトンさま、
純潔な處女に對して工夫された新たな殉難を御覽なさい！」

そしてミラデーは手早く外衣を開き、肩を蔽ふ白布を引裂いて、見せかけの怒りと恥とで顔を赧
らめながら、その美しい肩を汚してゐる一生消すことの出来ない印を青年士官に出して見せた。

フェルトンは思はず大聲を立てた。「これは「百合花」だ！」

「それたればこそ益々不名譽なのですわ。」ミラデーは答へた。「英國の烙印なら、あの男はどの法
廷からそれを私に押す宣告が下されたかを證明する必要がございませう、して私もこの國のありとあ
らゆる法廷に公然訴へて、抗ふことができませう。ですが佛蘭西の烙印では！——お、私に
その佛蘭西の烙印を押されたのですわ！」

「許して下さい、許して下さい！」フェルトンは叫んだ。「お、許して下さい！」
ミラデイーは彼の眼に閃くものを讀んだ——戀！戀！

「許す——なにをですの？」彼女は訊ねた。

「あなたの迫害者と組んだことを許して下さい。」

ミラデイーは手を差延べた。

「なんて美しい！なんて若々しい！」フェルトンは接吻でその手を蔽ひながら、叫んだ。

やがてフェルトンの愛は崇拜に變つた。彼はミラデイーの手を捨て、足に接吻した。

「お、あなたにお訊ねしたいことがもう一つあります、それはあなたのあの迫害者の名です。」

「まあ！私まだその名を言はなければなりませんの？もうお氣が付かれたのぢやございませんの？

その人といふのは、英國の掠奪者、眞の信者の迫害者、多くの婦人の貞操を破つた卑劣

漢——自分の汚れた心の氣まぐれを満足させるために、英國をしてあゝ多くの血を流させようとして

ゐる彼——今日新教徒を護つて、明日は彼等を滅ぼす彼——」

「お、バッキンガム公だ！ぢや、それはバッキンガム公だ！」

ミラデイーはその名が思出させる恥に堪へ得ないかのやうに、両手で顔を隠した。

「この天使のやうな方を虐げたバッキンガム！」フェルトンは亢奮して叫び續けた。「して神様！

あなたはあの男を罰しなさらなかつた！さうだ、あなたはきつと人間の復讐が天の懲罰に先立つ

ことを望んでゐられるのだ！」

「でも人々はその人を恐れて、赦して置ませう。」

「私は——私はあの人を恐れない、して又赦しても置かない。」

ミラデイーの心は悪むべき悦びに漬つた。

「それにしても、私の恩人、私の父のド・ウィンター卿は何うしてこんな事に關ふやうになつた

のですか？」

「フェルトンさま、まあお聴き下さい。私は互ひに愛し愛されたある男と——フェルトンさま、あな

たのやうな心を持つた、あなたのやうな人と婚約を結びました。私はその人の處へ行つて、今迄のこ

とを悉皆話しました。その人は私を信じて、少しも疑ひませんでした。その人は貴族でした——あら

ゆる點でバッキンガム公に等しい人でした。その人は何にも言はず、たゞ劍を吊り、外套で身を包ん

で、バッキンガムの宮殿へ眞直ぐに行きました。ところが生憎公は、當時プリンス・オブ・ウェールス

だつたシャルル一世のために西班牙王女へ結婚を申込むため、西班牙へ使者として派遣されて、その

前日英國を立つたばかりだつたのです。私の婚約者は空しく歸つて参りました。してかう申すのです

——「お聴き、あの男は出發してゐなかつた、従つて當分の間私の復讐を逃れるわけだ。だが、その

間に私達は結婚するから、その時はその復讐をこのラード・ド・ウィンターに任せて、彼自身の名譽

と彼の妻の名譽とを保持させるがよい。」

「ラード・ド・ウインター！フェルトンは思はず叫んだ。

「え、ラード・ド・ウインターですわ。してバッキンガム公は殆ど一年英國を留守にしてみました。して公の歸國する一週間前にラード・ド・ウインターは、私に卿の唯一人の世嗣を残して、亡くなりました。この突然の死はどこから来たか——神様はきつと知つて居られます。ですが私は何人をも咎めません。

「ラード・ド・ウインターは御兄弟に何事をも明さないで死んでしまひました。あの怖ろしい秘密は、それが罪ある者の頭上に落雷のやうに爆發するまで何人にも隠されることになつたのです。あなたの保護者ド・ウインター卿は自分の兄が持參金もない娘と結婚したことを兼々苦々しく思つてゐました。で私はさういふ人から援助を期待するわけには行きませんので、佛蘭西へ、そこで餘生を送る決心をして行きました。けれど私の全財産は英國にあるのです。で、今度の戦争で交通が途絶えましたので、私は萬事に事缺くやうになりました。それで私は何うしても又こつちへ歸つて來なければならなくなつたのです。そして六日前に、私はポーツマウスへ上陸しました。」

「それから？」フェルトンは促した。

「バッキンガム公はきつと何かの方法で私の歸國のことを聞きこんだのでせう、それをド・ウインター卿に告げました、而も同時に、既に私をよく思つてゐなかつた卿の耳へ、私が娼妓で、烙印のある女だといふことを吹込んだのです。私の良人のすつきりした氣高い聲はもう私を護つて下さいませう。

せん。ド・ウインター卿は疑ひもなく直ぐにその話を全部信じたのです、ましてそれを信ずることは卿の利益でしたのです。そして私を逮捕させ、こゝへ押籠めて、あなたに監視させました。その後のことはあなたも御存知の通りです。明後日は私は穢はしい者達の中へ追放されます。計畫は巧みに仕組まれたのです。フェルトンさま、私が死ぬほかはないことはお分りでございませう！フェルトンさま、私にそのナイフを借して下さい！」

かう言ひ終ると、全身の力が竭き果てたかのやうに、青年士官の腕へぐつたりと縋り倒れた。

「いや、いや。」彼は力づけるやうに——「あなたは生きて、あなたの敵に勝たねばなりません！」

「おお、死！死！」ミラデイーは眼と聲とを落として、「恥辱を受ける位なら死がましですわ！」

フェルトンさま私を捨て、下さい——私を死なして下さい！」

「そんなら私達は一緒に死にませう！」彼はかう叫んで、囚人の脛に自分の脛を押當てた。

その時突然扉をノックする音がした。ミラデイーは彼を押しつけて——

「あつ！誰か立聞してゐたのですわ！誰か來ます！これで萬事はお終ひだ！」

「いや、あれは番兵です、交替の時間が來たことを私に知らせるためでせう。」

さう言ひながら、フェルトンは急いで戸口の方へ行つた、そして扉を開けて見ると、一人の軍曹が番兵と一緒に立つてゐた。フェルトンは當惑して、言葉も出なかつた。

ミラデイーはフェルトンをこの窮境から救つてやらねばならぬと咄嗟に見て取つた。彼女は卓子へ

「驛寄り、彼がそこへ置いたあのナイフを掴んで、「どんな権利があつてあなたは私が死ぬのを邪魔するのですか？」と叫んだ。」

「大變だ！」フェルトンはナイフがミラデイーの手にきらきら閃いてゐるのを見ると、かう喚いた。その途端、皮肉な哄笑の爆發が廊下に響き渡つた。部屋着を纏ひ、劍を小脇に抱へた男爵が戸口に立つてゐた。

「ふん、これがお芝居の最後の場面だ。」彼は言つた。「フェルトン。心配をするには及ばんよ——血なんぞ流れやしないから。」

ミラデイーは笈でフェルトンに自分の勇氣の證據を見せてやらなかつたなら身の破滅だと思つた。「それはあなたの思違ひですわ、男爵！ 血を流して見せませう、してその血がそれを流させた者達に浴せかゝりますやうに！」

フェルトンはあつと叫んで、彼女の方へ驅寄つた、併しもう遅かつた——彼女は胸を突刺してしまつた。けれどもナイフは幸ひに——いや、巧みにもと言ふべきかも知れない——その當時の婦人が胸に當てゝゐた鋼鐵の胸衣にぶつかつて、横へ逸れ、上衣を破つて、肉と肋骨との間へ斜に突きさゝつた。それでも、ミラデイーの着物は忽ち血で染まり、彼女は氣を失つてばつたり倒れた。フルエトンはナイフをもぎとつた。

「伊覽遊しませ、閣下。」フェルトンは沈痛な聲をして、「この方はたうとう自殺してしまいました！」
「安心し給へ、フェルトン。」ド・ウインター卿は答へた。「死にやしないよ——悪魔はさう容易く死ぬものでないのだ。安心して、私の部屋へ行つて待つてゐるが、い。」

「ですが、閣下——」
「行きなさい、私は命ずるのだ！」

上官からのこの命令で、フェルトンは詮方なくこの場を去つた。

ド・ウインター卿はミラデイーに仕へるあの女を呼んで來させ、囚人の介抱を任せて、フェルトンの後を追つた。

第五十五章 逃 亡

ド・ウインター卿の想像した通り、ミラデイーの傷は大して重くはなかつた。

けれども、苦痛と衰弱を装つてゐることは必要だつた——してそれはミラデイーのやうな巧みな女優にとつては六ヶ敷い仕事でもなかつた。その證據に、附添ひのあの女などはすつかり彼女に騙されて、いくら彼女がたのむやうにことわつても、夜どほし起きて看護しつゞけずには置かないのであつた。

しかしミラデイーは朝になると、夜中によく眠れなかつたので一人でぐつすり安眠したいといふ口實で、その女を部屋から逐出してしまつた。彼女は朝食事にはフェルトンがやつて來るだらうといふ

希望を懐いたのだ。しかしフェルトンは來なかつた。ひよつとしたらフェルトンは男爵に疑はれて、愈々といふ大事な今になつて自分を棄てたのではあるまいか？ あともう一日しか残つてゐないのだ。ド・ウインター卿は出帆の日を二十三日にきめた、して今は二十二日の朝なのだ。——けれど、ミラデイーは尙も晝飯の時までちつと辛抱して待つた。

しかし晝飯の時も遂にフェルトンは姿を見せなかつた。ミラデイーは思切つて、膳部を運んで來た兵士にフェルトンは何うしたのかと訊ねて見た。すると、フェルトンは一時間前に馬に乗つて何處かへ出懸けたといふ返事であつた。

——では、フェルトンは何處かへやられたのだ、フェルトンが疑はれたのは明かだ。

ミラデイーは獨りになると直ぐ、起上つた。そして怒號する狂人が鐵の檻に入れられた雌虎かのやうに暴々しきで部屋の中を歩き廻つた。

六時にド・ウインター卿が入つて來た。彼は足の尖まで武装してゐた。彼は今や何事をも豫期し、何事をも推察し、何事をも見通してゐるやうに見えた。

「あなたはあの可哀さうなフェルトンを墮落させようとしたね。」彼は言つた。「だが、もう萬事は終りです。あなたも着物類を荷造りなさるがよろしい——明日出發ですから。もし船に乗る前に、誰に何でも一言でも言はうものなら、私の部下の軍曹があなたの頭を打碎いてしまひませう——彼はさうする命令を受けてゐるのです。もし乗船してから、船長の許しを得ないで誰かに物を言はう

ものなら、船長はあなたを海の中へ投込ませてしまふ筈です。では、明日またお會ひしませう——それを最後に別れです。」かう言ひすて、男爵は部屋を去つた。

空には大きな雲が去來し、雲間の稲光りは嵐の先觸れをしてゐた。やがて、十時頃になつて嵐は遂に來た。そしてミラデイーは自然が彼女自身の胸の亂れに同じてくれたのを見て心中やゝ慰められるのを感じた。

時折彼女は指に穿めてゐる指輪を眺めた。その指輪の玉の嵌まる所には微妙な強烈な毒が入れてあつた——これこそ彼女の最後の頼みだつたのだ！

突然彼女は窓に何か打當かつた音を聞いた、そして、折からぴかつと閃いた稲妻の光で一人の男の顔がその格子の影に現れたのを見た。彼女は窓へ走寄つて、それを開けた。

「フェルトンさま！」彼女は叫んだ。「私は救はれました！」

「だがお静かに！ お静かに！」フェルトンは言つた。「この鐵格子を鏝で切るには中々時間が掛ります——廊下の小窓から見付けられぬやうに注意してゐて下さい。」

「おゝ！ 神様が私達の味方だといふ證ですわ。彼等は小窓を板でふさいでしまつたのですよ！」

「それはいい！ ぢやこの窓を閉めて、寢臺で着物を着たまゝ寢ていらつしやい。仕事が終わつたら、窓硝子を叩きます。ですが、私と一緒に出られますか、傷は何うしました？」

「痛みますけれど、歩くには差支へありませんわ。」

「ぢや、叩いたら直ぐ支度をして下さい。」

ミラデューは窓を閉め、洋燈を消して、寢臺に身を横へた。嵐の荒れ狂ふ中に、鐵格子を切る鏗の軋り音が聞えた。そして稲光りの閃めくことにフェルトンの姿が窓硝子に映つて見えた。

彼女は息を凝らして一時間を過した、氷のやうな玉の汗が額に浮いた。そして廊下から聞える一音ごとに、彼女の心臓は恐ろしい不安に壓付けられた。が、やつとフェルトンが窓を叩く音がした。ミラデューは寢臺から跳起きて、窓を開いた——二本の鐵棒が取除けられて一人一人の優に出入りできる大きな穴がこしらへられてあつた。

「用意はいゝですか？」フェルトンは訊ねた。

それからミラデューの體を抱へて、繩梯子を靜かに、一足一足下り始めた。二人の重さが掛つてゐるのにも拘らず烈風は繩梯子を空中にぶらんこのやうに振り動かした。突然フェルトンは足を留めた。

「靜かに！」彼は言つた「足音が聞える！」

「見付かつたのです！」

暫くの間二人は息を凝らした。

「何でもありません。巡察兵共が見廻りに來たところですよ。」

「ぢや私達は見付かりますわ。」

「いや大丈夫です——稲光りさへ光らなければ。」

「おゝ、あそこへ來ましたわ！」

「靜かに！」

兵士達か笑つたり話をしたりしながら、二人の下を通つて行く間、彼等は身動きもせず、息を吐かずに、空中二十呎の高さの處に懸つてゐた。それは逃亡者には怖ろしい瞬間であつた！併し兵士達は通り過ぎた。二人は彼等の遠去かつて行く蹺音を聞いた。彼等の聲が段々遠くへ消えて行くのに耳を澄せた。

「さあ。」フェルトンは囁いた。「私達は助かつた！」

ミラデューは深い溜息を吐いて、がつくり氣を失つた。

フェルトンは下り續けた。そしてやつと地面に着くと、ミラデューを兩腕に抱へて、巡察兵等の行つたと反對の方向へ急いだ。そして波打際に着くと、口笛を吹いた。と、それに答へて同じく口笛が聞え、それから五分程して、四人の男をのせた一艘のボートが現れた。幸ひ嵐は大分靜まつてゐたけれど、未だ海は荒れに荒れてゐて、ボートを岸につけることが出来なかつたので、フェルトンは人手に任せられぬ大事の荷物を抱へたまふ胸のあたりまで潮に漬つて、やつとそのボートに乗ることができた。四人の水夫は高い波浪と戦つて少しづつ古城を遠ざかり始めた。やがて眞の暗の海の面に帆船が揺れてゐるのが見えた。フェルトンはボートが四人の漕手の全力を擧げてその方へ進んで行く間に、ミラデューを舟底に寝かせて顔へ潮水を吹きかけた。彼女は深い吐息をついて、眼をぱつと開いた——

「私は何處にゐますの？」

「助かつたのです。」青年士官は答へた。

「おゝ！ 助かつた！ 助かつた！ なるほど、天と海とが見えます！ 私の吸つてゐる空氣は自由の空氣ですわ！ おゝ！ 有がたうよ、フェルトン、有がたう！」

青年は彼女を我胸にひしと抱緊めた。

彼等は帆船に近付いた。見張りの水夫共がボートへ大聲で呼掛けた。

フェルトンは訝るミラデイーに、あの船は自分が彼女のために備つたもので、自分をボーツマウスへ上陸させた後、彼女の好きな處へ何處へでも行くのだと説明した。

「まあ！ してあなたはこれからボーツマウスへ行らつしやるのですね？」

「えゝ、一刻も猶豫できないのです。明日は二十三日で、バッキンガム公が艦隊と一緒に出發する日なのです。」

「明日出發しますつて！ 何處へ行くのですの？」

「ラ・ロシエルへ。」

「あの人をやつてはなりません！」ミラデイーは平生の落着きも忘れて、大聲に叫んだ。

「御安心なさい。」フェルトンは答へた。「あの方を行かせはしません！」

ミラデイーは悦びで震へた——「フェルトン様、あなたが死んだなら、私も一緒に死にますわ！」

私の言へることはそれだけです。」

そして、朝の七時頃、此少帆前船は先づボーツマウスの傍のとある港へと錨を下したのであつた。

第五十六章 千六百二十八年八月二十三日ボーツマウスに

起れる事件

フェルトンはミラデイーの手に接吻して、ちよつと散歩に出懸ける兄が妹に別れると同じやうに別れた。彼の顔も様子も平生の平靜さを少しも失つてゐなかつた——たゞ、常ならぬ焔が、熱病のやうに、彼の眼に燃えてゐた外は。

彼はボートへ乗移つて岸へ行くまでの間といふもの、甲板に立つて眼で彼の後を追つてゐたミラデイーの方へ顔を向け續けてゐた。それから岸に足を下ろすと、斷崖の頂上へ通じてゐる登り道を昇つて、ミラデイーに最後の別れをし、街の方へと下つて行つた。

彼は朝霧を通して遙か彼方に見えるボーツマウスの方へと出来るだけ足を早めて急いだ。そして八時頃ボーツマウスに入つた。見ると全市は湧きかへるやうな騒ぎであつた——太鼓は街々や港に鳴り響き、乗船する軍隊は續々として海の方へ進軍して行つた。フェルトンは埃にまみれ汗にべつとり濡れて、海軍省へと急いだ。彼のいつもの蒼白い顔は熱さと怒りとで眞赤になつた。彼は歩哨の士官を呼んで、ポケットから持つて來た手紙を取出した——「ド・ウインター卿からの急使です。」

士官はド・ウインター卿の名を聞いて、それにフェルトンが海軍士官の軍服を着てゐたので、直ぐに彼を通した。フェルトンは家の中へ驀然に飛込んだ。が、彼が廣間へ着いた時、もう一人の男も亦、埃にまみれ、息を切らして入つて来た。

兩人はバックinghamの秘書パトリックに殆ど同時に聲を掛けた。フェルトンはド・ウインター男爵の名を言つた。見知らぬ男はバックingham公に直ぐでなくては告げられぬと斷言した。で、ド・ウインター卿と公との間柄を知つてゐるパトリックは、卿の名で来たフェルトンを先にして、もう一人の者は後廻しにしたのであつた。その者がどんなに心からその延引を呪つたかは外目にも直ぐにわかつた。

フェルトンは直ぐにバックingham公の面前へ通された。

「何故男爵は自身で来られないのだね？」彼は訊ねた。「わしは今朝おいでかと思つて待つてゐた。」

「主人はその名譽を持たないことを非常に残念に思つてゐると閣下にお傳へしてくれと呉々も申して居りました。城中にちつとも目の離せぬ囚人が居るためでございます。」

「そのことは存じて居る。」

「實は、その囚人に就きまして、閣下に申し上げたいことがございますのですが。」

そして彼は人拂ひを乞うた。バックinghamはパトリックを次の部屋へ下らせた。

「さあ、我々きりだ。お話しなさい。」

「私の主人、ド・ウインター卿は先達閣下にお手紙を差上げて、シャルロット・バックソンと申す若い婦人の護送命令書に署名していただくやうに願ひ申上げました。」

「左様、私はその命令書を持参するか送つてよすかすれば、署名して上げると返事をして置いた。」

「それはこゝにございます。」

バックingham公はフェルトンの手からその書類を受取ると、素早く目を通して、それから卓子の上に置き、ペンを取つて、それに署名する用意をした。

「一寸お待ち下さい。」フェルトンはそれを遮つた。「閣下はそのシャルロット・バックソンといふ名はその女の本當の名でないことにお氣付きでいらつしやいますか？」

「あゝ、存じてゐる。」公はペンをインク壺に漬けながら答へた。

「では閣下はあの女の本名を御存じなのですね。」フェルトンは峻しい口調で言つた。「閣下がこれはド・ウインター夫人の問題だといふことを知つていらつしやらうとは信じられない。」

「私は寧ろあなたが知つてゐることを驚く位だ。」

「して閣下はこの命令書に署名して後悔なさらないのですか？」

バックingham公は傲然として相手の顔を見詰めた。「あなたは奇妙なことを訊ねるね。そんな問ひに答へるのは非常に馬鹿だ！」

「お答へ下さい！ あなたのお位置は多分あなたの御想像なざるよりも重大ですよ。」

併しバッキンガムは頭を振つてまたペンを取上げた。

「閣下、その命令書に署名おさせ申しませぬぞ。」フェルトンは公の方へ一歩進み寄つた。

「私に署名させぬ？ それは何故だ？」

「そのわけはあなた御自身の良心に御相談なさい、してミラディーを公平に取扱つて下さい。」

「あの女をタイパーンに送れば一番公平だらう。ミラディーは破廉恥な奴だ。」

「閣下、ミラディーは、天使です！ あなたはそれをよく御存知の筈だ、私はあの方の釋放をお願いします。」

「おゝ！ あんたは氣が狂つたのか、そんなことを私に言ふとは！ さ、この部屋を出て行つてもらはう。」

「いや閣下、終ひまで私の話をお聞き下さい。あなたはあの若い娘を誘惑した、手込めにして汚した！ ——その罪をお贖ひなさい、あの方を自由の身にして上げて下さい、すれば私はもうやかましいことを申しません。」

バッキンガム公は驚いてフェルトンの顔を見詰めた。

「閣下。」フェルトンは益々亢奮して——「御注意なさい、英國の全國民はあなたの悪政で疲れてゐます。閣下、あなたは篡奪した王權を亂用なされた。閣下、あなたは神と人間とに忌み恐れられてゐます。神様はあなたを永劫に罰しなさいませう、私はあなたを今罰します。」

「おゝ！ 餘りといへば餘りだ！」バッキンガムは扉の方へ一歩進み寄つた。

フェルトンは彼の行手をふさいで、叫んだ——「閣下、ミラディーの釋放に署名して下さい！」そして彼に一枚の紙を彼に差付けた。

「馬鹿な眞似をするな！ おゝい、パトリック！」公はかう呼ぶと同時に、自分の劍の方へ飛んで行つた。併しフェルトンは彼にその劍を抜く暇を與へなかつた。ミラディーが我と我身を傷けたあのナイフを胴衣の下から取出して、一飛に公に飛掛つた。

それと同時にパトリックは部屋へ入つて来て、かう叫んだ——

「閣下、佛蘭西からの御書面でございます。」

そしてバッキンガムが思はずその言葉に氣を取られた隙に、フェルトンはあのナイフを公の脇腹へ柄も通れと突刺した。そして開放された扉から次の部屋へと駆込み、尙ほも走りながらそこを通り抜けて、階段の方へと急いだ。併し段に足を掛けたばかりのところ、彼はド・ウインター卿に出合つた——卿は彼が血走しつた眼付で、手や顔が血に塗れてゐるのを見るや、彼に突進して叫んだ——

「遅かつた！」

フェルトンは抵抗しようとしなかつた。ド・ウインター卿は衛兵共に彼を渡して、自身は大急ぎでバッキンガム公の私室へ駆込んだ。公の叫び聲やパトリックの喚く聲を聞付けて、フェルトンが先刻控への間で會つたあの男もその部屋へ駆込んだ。彼は公がわなわな震へる手で傷口を押さへながら、

リファの上に倚り倒れてゐるのを見た。

「ラ・ポルト。」公は死に行く聲で言つた——「ラ・ポルト、あなたはあのお方の所から来たのか？」
「はい、閣下。」オーストリアのアンヌの忠實な侍従は答へた、「ですが私は間に合はなかつたことを恐れます。」

「しつ！ ラ・ポルト——人に聞かれてはいけない。パトリック、誰も入れるな。お、私はあのお方の言つてこられた事が分らぬかも知れん——私は死ぬる！」
さう言つて、バッキンガム公は氣を失つた。

そこへ、ド・ウインタール卿を初め、數多の客達や士官達がかどかどかと押込んで来た。絶望の叫び聲が四方に反響した。そしてこの悲報は直ぐに擴がつて、街中に知れ渡つた。

ド・ウインタール卿は髪をむしつて喚いた——「たゞの一分遅かつた！ お、神様！ 何たる不幸だ！」實は彼は朝の七時に、繩梯子が城の窓から下がつてゐるといふ知らせを受けたのであつた、そして直ぐにミラデイの部屋へ駆付けて行つて、そこが空つぽで、窓は開放され、鐵格子は切り取られてゐるのを見つけたのであつた。その時彼はダルタニアンが使ひのものに言つて寄越させた傳言を思出して、バッキンガム公の身の危険なことを感知して、一刻の猶豫もなく馬に飛乗り、ポーツマウスへと全速力で駆付けていたのであつた。

併し公は未だ死ななかつた。彼は正氣づいて再び目を開いた——「皆さん、パトリックとラ・ポルト

とだけにしてみんな向うへ行つて下さい。お、そこにゐるのはド・ウインタールさんだね！ あなたは飛んでもない氣違ひを寄越したね！ 私にどんなことをしたか御覽！」

ド・ウインタール卿は涙をこぼして許しを乞うた、そして公に促されて泣きながら部屋を出て行つた。私室には瀕死の公と、ラ・ポルトと、パトリックとだけしか残つてゐなかつた。

「あのお方は何と書いてよこされたね？」バッキンガムは愛する女のことを言ふために劇しい痛みを堪へながら、弱々しく——「そのお手紙を讀んで下さい！」

ラ・ポルトは直ぐに封印を切つて、公の眼の前へ羊皮紙を差延べた、併しバッキンガムはもうその文面を讀み解けなかつた。

「讀んでおくれ、早く讀んでおくれ、もう目が見えぬ！ 讀んでおくれ——もう直きに耳も聞えなくなつてしまふから、してあのお方が書いてよこされたことを知らずに死んでしまふから。」

ラ・ポルトはもう躊躇しなかつた。手紙にはかういふ意味のことが認めてあつた——「どうか私を安心させるために戦争を止めて下さい、戦争は佛蘭西と英國とにばかりか、あなた自身の身にも大きな災を降らすかも知れない、してどうかお命に御用心して下さい——。」

バッキンガム公は刻一刻に弱まつて行く全身の力を奮ひ起こしてぢつと聽入つた。そして讀み終はられた時、堪へ難い失望を感じたやうに見えた——「してその外に何か言傳はなかつたのかね、ラ・ポルト？」

「はい、閣下、王妃様は私にあなたの護衛をお吩咐けになりました。あのお方はあなた様が暗殺されることをある筋から警告されたのでございます。」

「してそれで全部か？ それで全部か？」バッキンガム公は焦々しながら訊ねた。

「はい、それから、いつもあなたを愛してゐると申上げてくれとお命じになりました。」

バッキンガムの顔は急に晴々となつた、そしてパトリックに命じてダイヤの飾りの入つてゐる小箱と、王妃の頭文字を眞珠で書込んである白絹子の袋とを持つて來させた。

「ラ・ポルトさん、こゝに私がお方から受取つた唯一の記念物がある——此銀の箱と此二通の手紙と、之を王妃様にお戻しして下さい、して最後の形見として、それに添へて——」彼は何か貴重な物と思つて邊りを見廻したが、死の爲に朦朧となつた眼は、フルトンの手から落ちた眞赤な血が未だ滴つてゐるあのナイフの外何物にも出會はなかつた——「此ナイフをそれに添へて上げて下さい。」さう言ひ終ると、彼はがっくりと椅子から床へ迂り落ちた。パトリックは思はず高い叫び聲をあげた。丁度そこへ、既に旗艦へ乗込んでゐた公の侍醫が駆付けて來た。彼は公の傍へ寄り、手をとつて暫く脈を診てゐたが、やがて力なく言つた——「もう萬事休した——公爵は亡くなられました！」

第五十七章 ストネイの尼寺

英國王チャールス一世はバッキンガム逝去の報を聞くと、ラ・ロシエル軍の士氣沮喪することを憂

へて、出来るだけ長く彼等にこの事を隠して置くことにし、そのため艦隊の出發後まで港ぢりの船の出帆を禁じたのであつた。併しこの命令は事件後五時間までまだ發せられなかつたので、二艘の船に既にこの港を出てしまつてゐた——一艘は我々も知るミラデーを乗せた船で、彼女は旗艦のマストに垂れてゐる弔旗を見てこの事件を直ぐにそれと察したのであつた。今一般の方のことに就いては、誰を乗せ、何うして出帆したかやがて分明することであらう。

この間、ラ・ロシエルの前の陣營では變つたこととは唯だ、佛蘭西王が退屈の餘り、サン・ジェルマンに於けるサン・ルイ祭へ二十名の銃士を護衛兵として微行することになつた。その二十名の中には我が四人の銃士も入つてゐた。それは彼等が巴里行きを非常に望んでゐることを知つてゐた隊長トレヴィールの好意であつた。

四人が巴里へ歸ることを渴望してゐたのは、マダム・ボナシューが不倶天の敵ミラデーにストネイの尼寺で會ふ恐れがあつたためであることは言ふまでもない。實はアラミスは早速マリー・ミシヨンに手紙をやつて、マダム・ボナシューにその尼寺を出て、ローランか白耳義かに隠れることを允す許可書を王妃から貰つてくれるようにと頼んだのであつた。その返事は間もなく八九日して届いて、その中に次のやうな文句の許可書が同封してあつた——

「ストネイの僧院長はこの書の所持者の手に、わが推薦と保護との下に右尼寺へ入りし見習

僧尼を渡すべし。

——アンヌ

一六二八年八月十日、ルーヴルにて。

この恩典を先づ受けたものは我が四人の友であつた。而もアトリスはトレヴィールを説伏してその四日を六日に延ばして貰つた、その上その六日へもう二晩を詰込むことに成功したのであつた。

二十五日の夕刻、アルラスに入つて、ちやうどダルタニアンが金肥酒場の入口で馬から下りた時、一人の騎馬の男が垂懸場から新らしい馬に乗つて出て来て、巴里への道を一散に駆け出して行つた。この男にちつと目を付けたダルタニアンは、眞蒼に顔色を變へて、手に持った盃をばつたりと落した。

「何う遊ばしましたか？」ブランシエは叫んだ。「お、皆さん、急いで来て下さい、御主人様が御病氣です！」

三人の友人達が急いで来て見ると、ダルタニアンは病氣どころか、自分の馬の傍へ走つて行くところであつた。

「おい！一體全體そんな風にして何處へ出懸けるのだ？」アトリスが呼ばはつた。

「彼奴だ！」ダルタニアンは激情に蒼ざめ、額に玉の汗を浮べて叫んだ。「彼奴だ！彼奴を捕へさせてくれ！」

「何者なのだ？」

「私がああ怖ろしい女に始めて會つた時、一緒にゐた奴だ——私がアトリスを怒らせた時探してゐた奴だ——マダム・ボナシエが誘拐されたその日の朝見た奴だ——あれこそムアンの男だ！私は彼奴を見た——彼奴だつた！諸君、馬に乗つてくれ！彼奴を追掛けよう——彼奴を収捕まへなければならぬ！」

「だが考へて見給へ。」アラミスは言つた。「向うは我々と正反對の道を行つてゐるのだ。それに我々の馬は疲れてゐるのに、向うは新しい馬だ、とても追付けやしないよ。」

「もし、もし！」一人の馬丁が駆出して来て、きよろきよろしながら呼ばつた。「もしもし、あなたのお帽子から落ちた書付がこゝにあります！もし、もし！」

「おい君。」ダルタニアンは呼止めた。「その書付を半ピストルで賣つてくれないか？」

「結構ですとも、さあこゝにあります。」
馬丁は思はぬ儲けにほくほくしながら、厩のはうへ歸つて行つた。ダルタニアンは書付を開けた——「たつた一言だ！」

「アルマンティエール。」ポルトリスは讀んだ。「アルマンティエール？ 何處だらう？」

「してこの町の名はあの女の手で書いたものだ」とアトリスは言つた。

「とに角この紙片は大事にして置かう。」ダルタニアンは言つた。「多分私は半ピストルを投げ捨て

やせぬ筈だ。さあ馬に乗らう、馬に——

四人の友は拍車を蹴つて、ストネイへの道を駆出した。

一方ミラデイーはポーツマウスに上陸した時は、佛蘭西の迫害のためラ・ロシエルを追はれた英國婦人であつたが、二日の航海の後ブローヌの海岸に來た時は、英國人が佛蘭西に對して懐いてゐる憎悪のために、ポーツマウスで彼等から苦しめられた佛國人として通つたのであつた。ミラデイーはその上、最上の旅行免狀を——美と、金銀を撒きちらす大やうさを持つてゐた。彼女は港の頃はしい檢閲も易々と越えて、今はこのブローヌには次のやうな文句で書かれた手紙をポストへ投込むだけの用事しかなかつた——

ラ・ロシエルの陣營内、カルデナル・リシユリュウ狻下——

狻下はバッキンガム公が佛蘭西へ出發なさらぬことを御信じ遊ばしても宜しうございます。

ミラデイー・ド——

八月二十五日——夕刻、ブローヌにて。

二伸——狻下の御希望により、私はストネイの尼寺へ參るところでございます、そこで御命令をお待ち申しませう。

そしてその夕刻ミラデイーは旅路に就いた。とつぷりと日が暮れ果てると、途中の旅籠屋で泊り、その翌朝五時、また旅を續けて、三時間してストネイに到着した。そしてかの尼寺を探し當てると、直ぐにづかづかと入つていつて庵主に會ひ、カルデナルの命令書を示した。庵主は彼女に入室をあたへがひ、朝食の支度をしてくれた。

朝食後、老庵主はまた訪ねて來た。僧院には樂しみとは何もないので、彼女は新入者と少しも早く近附にならうと急いでゐるのだつた。で、ミラデイーは彼女を喜ばせてやらうと思つて、佛蘭西、宮廷の秘事を王の竝々ならぬ信仰心など、つき混て話したり、庵主が名をよく知つてゐる大官や貴夫人の醜聞、さては王妃とバッキンガム公との情事に軽く觸れたりした。庵主はにこにこしながら、ちつと耳を傾けてゐた。ミラデイーはかういふ類の話が非常に庵主の氣に入つたらしいのを見て取つて、更にカルデナルのことへと話を進めた。そして彼とマダム・デイギヨンやマリオン・ド・ロルムや、その外幾多の美夫人との情事の話、彼女が益々熱心に、にこにこして聞入るのを見て、ミラデイーはほくそ笑みながら心秘かにかう思ふのであつた——この老女はたとへカルデナル黨であつても、少くも大して狂熱的な方ではない。

それから彼女はカルデナルが敵に加へた迫害の話に移つて行つた。庵主は唯だ十字を切つたきりで、彼の行爲を善いとも善くないとも言はなかつた。これでミラデイーは庵主がカルデナル黨より

も寧ろ王黨だといふ信念を固くした、で彼女は益々話に色をつけて言ひ進めて行つた。

「私などはさういふ事柄にはほとんど不案内でございますが、」庵主は遂に口を開いた。「この都からも俗塵からも遠く離れた尼寺にも、あなたが今お話なすつたやうな事柄の非常に悲しい例はございませぬ。この尼寺に住む一人がカルデナルの復讐と迫害とに大變苦しめられました。」

「この尼寺に住む方が？　まあ、氣の毒な方でございませぬねえ！」

「ええ、本統に氣の毒な方でいらつしやいます。人牢、脅迫、虐待——そんな事をみんな受けました。ですが結局、カルデナルは多分そんな事をするのも尤もな理由があつたのでせう。あの女は大使の容貌を持つてゐられるけれど、私達はいつても容貌で人を判断してはいけないものです。」

ミラデイーは心中祕かに北叟笑んだ。此處で何か發見できるかも知れない。

彼女はそれから如何にも公平さうな顔付をして、庵主の言葉に賛同してから、併しカルデナルは罪よりも徳を厳しく罰することがあると言つた。

「まあ、あなたはカルデナルのお友達でいらつしやいますのに——」

「あの方のことを悪く言ふと仰有るのでせう。けれど私はあの方のお友達でなくて、あの方の犠牲者なのです。」とミラデイーは言つて消息を吐いた。

「でもあのお手紙では、あの方はあなたを私に推薦して——」

「あれは一種の牢獄へ私を閉籠る命令書なのです。」

「では何故お逃げなさらなかつたのです？」

「どこへ逃げられませう？　あなたはカルデナルの手の届くことの出来ない地點が地上のどこかにあるとでも考へていらつしやるのですか？　殊に、もし私が男でしたら、ひよつとしてそんなことも有りうるかも知れませぬ。けれど女なのですもの？　——女にどんなことができませう？　そのあなたの仰有つた若い方——その方は逃げようとしたのですの？」

「いゝえ、ですけれどあの方の場合は違ひます。あの方はある戀愛事件があつて佛蘭西に踏留まつていらつしやいます。」

「ぢや、ミラデイーは消息を吐いて、「戀してゐるのなら、その方は大して不幸ぢやありませんわ。その方の名は何と仰有ひますの？」

「その女はあるやんごとないお方から、キッテイといふ名の下に、私に推薦されました。」

「キッテイですつて？」ミラデイーは叫んだ。「まあ、それは本統ですの。」

ミラデイーはその女こそ恐らくは自分のわかしの侍女であらうと察して微笑んだ。そしてその若い娘の思出と共に、憤怒の情と復讐の念とが胸に湧いた。彼女はさあらぬ顔で、何時その女に會へるかと庵主に訊ねた。

「今晩、」老尼は答へた。「いえ、今でもようございませぬよ。けれどあなたは四日も旅をしていらして、今朝は五時にお起きたすつたと言ふのですもの、今の内に少し御休息なさらなくてはいいませぬ。」

ん。横になつてお寝なさい、午頃にはお起ししますから。」

ミラディーはこの十三四日の間、實に種々雑多な思ひを経験したので、彼女の鐵のやうな體質はまだ疲労に堪へることはできただけでも、心は幾分休息を求めてゐた。で彼女はヤッテイに對する復讐、マルタニアンやその友であり自分の夫であるド・ラ・フェール伯に對する復讐など、様々の希望に宥められて、直ぐに深い眠りに落ちた。間もなく彼女は柔しい聲に起された。眼を開いて見ると、庵主が、金髪白哲の、やさしい好奇心に満ちた目をちつと自分に向けてゐる一人の若い女を連れて立つてゐた。その若い女の顔はミラディーの全然見知らぬ顔だつた。

庵主は二人を紹介して、禮拜堂にお勤めに出なければならなかつたので、二人を残して出て行つた。

ミラディーは續いて立去らうとする若い女を引留めて、手を取つて寢臺の傍の椅子へ引寄せた。

「私は何といふ不仕合せなのでせう！」彼女は腰を下ろしながら言つた。「樂しみの影さへもなく、この寺に六ヶ月もゐまして、今あなたといふ折角嬉しいお仲間ができたと思ふと、今度は私がもう直ぐここを出るかも知れないのですもの。」

「何ですつて、こゝをお出になる？」

「少くも私はさうしたいと思つて居りますの。」と喜びの色をあらはに見せて答へた。

「私、あなたがカルチナルの迫害に苦しみなすつたやうに聞きましたけれど、そんなら、それは私達の間の同情の今一つのきづなですわねえ。」

「ちや、庵主様が私に仰つたことは本統なのでございますのね。あなたもカルチナルの犠牲の一人なのでございますのね。」

「え、してあなたは何ういふ犠牲でしたの？」

「私が愛した、そのお方のためなら死んでもいゝと思つた、して今でも死んでもいゝと思つてゐる或る御婦人への獻身からですわ。」

「してどなたですの、そのあなたの不幸を見捨てた方は？」

「私も最初はさう信じました、けれどこの二三日の間にその反對だといふ證據を握りましたの。それはさうと、あなたは——あなたは自由なお身のやうに見えますわねえ、もしさうしようといふお氣さへあれば、いつでも逃れることのできるお身のやうに見えますわねえ。」

「けれど私、何處へ行くことができませう、友達もなく、金もなく、この見知らぬ土地で——」

「お、友達なら、何處でもあなたのお好きな處で見付かりますわ、あなたはそんなにおやさしくて、そんなにお美しいのですもの。」

「そんなこと、ミラディーは天使のやうにやさしい微笑を浮かべて、「私が捨てられ迫害されない理由になりませんわ。私も位高い知人はないことではないのですけれど、その方々は皆カルチナルの前に震へてゐるのですもの、王妃様さへこの恐ろしい執政様から護つて下さいませぬ。」

「お、ではあなたはあのお方を知つていらつしやいますのね——あの美しい氣高い王妃様を！」

「え、王妃様を直接にお知り申上げてゐませんけれど、あのお方の最も親しいお友達を大抵存じてゐますの。私ド・ピタンジュ氏とお近附きですわ、英國ではデュジャール氏にお目に掛りました、ド・トレヴィール氏も存じ上げてゐます。」

「ド・トレヴィール氏！ あなたはあの方を知つていらつしやいますの？ 王様の銃士の隊長の？」

「え、よつく存じてゐますわ。」

「お！ ちや私達は間もなくお近付に——きつと親友になるに違ひありませんわ。ド・トレヴィール氏を御存じなら、あなたはあの方のお家に行らしたことがございませうね？」

「え、ちよいちよいお伺ひしましたわ。」ミラデーは自分の出駄羅目が成功したのを見ると、それを終ひまで辿つて行く決心をした。

「ちや、あの方の宅で銃士達にお會ひなすつたに違ひありません。アトリスといふ名の方を御存知なさらなくつて？」

ミラデーは自分が横になつてゐた敷布のやうに蒼白になつた、そして流星の彼女も思はずあつと叫び聲を立て、相手の手を掴み、彼女の顔をぢつと見詰めた。

「まあ！ どうなさいましたの？ 私、あなたのお氣に障るやうなことを何か申しましたかしら？」

「い、え、その名前にびつくりしましたのよ、だつて私、その方とは前からお近付きなのですもの、してあの方をよく知つていらつしやるらしい人と會つたのが奇妙に見えたのですもの。」

「え、私あの方を非常によく知つてゐますわ、それから、それからあの方のお友達のポルトリスさんやアラミスさんも。」

「本統ですの？ 私も皆さんを存じてゐますのよ。」ミラデーは心の臓まで透る冷い戦慄を感じて叫んだ。

「ちや、あの方々とお知合なのなら、みんな善良で勇敢な方達だといふ事を御存知の筈ですわ。何故、保護してくれる人がほしいのなら、あの方々にお頼みなさいませんか？」

「と申しますのはね。」ミラデーは口訥つた。「私、あの方々はどなたとも餘り親しくしてゐませんの。私、あの方々を矢張りお友達のダルタニアン様からお聞きして知つたのですわ。」

「あなたがダルタニアン様を知つていらつしやる！」今度は彼女がミラデーの手を掴み、喰ひ入るやうに彼女の顔を見詰めて、叫んだ。それからミラデーの顔に浮んだ奇妙な表情に氣が付くと——

「御免遊ばせ、嬢さん、あなたは何ういふ格であの方を知つていらつしやいますの？」

「何ういふつて、ミラデーはやゝ困惑して、「友人の格ですわ。」

「あなたは私を購していらつしやる。あなたはあの方の愛人だつたのですわ！」

「いえ、それだつたのはあなたですわ！」

「私——私が！」

「え、あなたですわ——私はあなたは今やつと分つた——あなたはマダム・ボナシユーだ。」

若い婦人は驚きと怖れとに壓倒されて、たじたじと身を退いた。

「おゝ！ さうでないとは仰有るな、どうぞ返事をして下さい。」ミラデューは言った。

「え、マダム・ボナシユですわ。して戀敵ですの？」

ミラデューの顔は、外の場合ならマダム・ボナシユもきつと怖れて逃出したに違ひない程荒々しい光で輝いた。併し今はマダム・ボナシユは嫉妬にすつかり心を奪はれてゐた。

「いゝえ、さうぢやありません！」ミラデューは叫んだ。「決して！ 決して！」

「私、あなたを信じますわ。けれど、ぢや何故私の名を御存知でしたの？」

「ダルタニアン様は私のお友達なので、私にすつかり打明けなすつたのだといふ事がお分りなさらなくつて？ 私ほどの事起つたかみんな存じてゐますわ。サン・ジェルマン街のお家からあなたが誘拐されたこと、あの方の失望、あの方の御友人のそれ、それから皆さんがそれ以上一生懸命に捜していらつしやる事。ですから、コンスタンスさん、私がああなたを見付けてどんなに驚いても不思議ぢやございませんでせう！」

ミラデューはかう言つて両手をマダム・ボナシユの方へ差出した。マダム・ボナシユは今聞いた事をすつかり信じきつて、今はミラデューを眞實な味方だとばかり思込んでしまつた。

「ぢや、あなたは私がどんなに苦しんだか御存知ですのね。」マダム・ボナシユは暫くして言つた。「でも私の懲罰も終りに近付いて來ましたわ。明日——いえ、多分今晚、私はあの方に目に掛れる

筈ですわ。」

「今晚ですつて？」ミラデューは思はず叫んだ。「それは何ういふ意味ですの？ あの方からお音信でも來る筈ですの。」

「いえ、あの方自身がいらつしやる筈なのです。」

「そんな筈はない！ あの方はカルデナルと一緒にラ・ロシエルにいらつしやる。あの市の占領後でなくちやお歸りなさらぬ筈ですわ。」

「ぢや、これをお読み遊せ！」不幸なコンスタンスは誇りと喜びとの餘り、一通の手紙をミラデューに差出した。

「おゝ、マダム・ド・シュヴルーズの筆蹟だ！」とミラデューは心中に呟いて、次の行を熱心に讀み始めた。

私達の友は間もなくあなたにお會ひする筈です、してあの方はたゞあなたを牢獄から連出するために行らつしやるのです。ですから直ぐに出發の用意をなさいまし。私達を失望させては下さるな。あの勇ましいガスコン人はいつもの通り勇敢で忠實なところをお見せになりました。お會ひになりましたら、あの方が與へて下さつた御警告に對してある人々が非常に感謝をしてゐますとお傳へ下さいまし。

「なるほど、ミラデイーは言った。「してこの警告といふのは何か御存知ですか？」
「いゝえ。たゞカルデナルの何か新しい陰謀の事を王姫様に御警告なすつたのではあるまいかと推
量するだけですわ。」

丁度その時であつた。馬の疾馳する音が聞えた。

「おゝ！」マダム・ボナシユーは窓際へと驅寄つて叫んだ。「あれがあの方かしら？」

ミラデイーは餘りの驚きに石のやうになつて、寢臺の中におつとしてゐた。眼は空間をおつと見詰
めてゐた。

「あゝ、違つた。マダム・ボナシユーは言った。「私の知らない人ですわ。けれど、この寺へ來るら
しいわ。さうだ、段々を上つて來る、門の處で留まつた。呼鈴を鳴らしてゐる。」

ミラデイーはそれを聞いて寢臺から跳ね起きた、そして着物を着ながら。「あの方でないのです
ね？ してこつちへ來ますつて？」

「えゝ、入つてしまひましたわ。」

間もなく扉が開いて、庵主が入つ來た。

彼女はミラデイーにカルデナルの使ひと稱する者が會ひに來たと云つた。ミラデイーは直ぐに通
させた。庵主とマダム・ボナシユーとが部屋を出て行くと、入れ代りに一人の男の姿が現れた。ミラ
デイーは歡喜の聲を擧げた。この男はカルデナルの親友ド・ロシユフオール伯その人であつたので

ある。

第五十八章 一滴の水

ド・ロシユフオールはカルデナルの命で、ラ・ロシエルからミラデイーの様子を見に來たのであ
つた。ミラデイーは先づ、この寺にマダム・ボナシユーが變名で隠れてゐる事、それからタルタニ
アンやその友人達が一兩日中に連出しに來る事を告げ、してその四人の者は赤鳩舎で自分等の會
話を窺聞いて、自分等の計畫を齟齬させた者達だが、その内怖るべきはタルタニアンとアトースと
で、アラミスはマダム・ド・シユヴルーズの愛人で、生かして置いて利用すべく、ポルトースは馬鹿
者で取るに足らぬ者だとカルデナルに傳へるやう頼んだ。

「私はあなたの報告を持つて、直ぐ驛馬で歸ることになつてゐる。」ド・ロシユフオールは言った。

「カルデナルは委細を聞いた上、更に何かの指圖をあなたに與へる筈です。」

「では、私はこゝに待つてゐなければなりませんの？ あなたと一緒に連れて行つてはいただけませ
んの？」

「陣營の近所に居ては人に見付かります。そして猊下の御迷惑になるやうな事が起らんとも限りませ
ん、殊に英國であゝいふことがあつた後では尙更です。」

「でも、私はこゝに留まつては居られませんか、私の敵が間もなく來るのですもの。ね、あなたはた

つた今出發して下さいました。そしてその時、庵主にカルチナルの命で、私を今日か明日外へ移すことになつたと言つて下さい。してあなたは私をリー河畔の寒村アルメンテイルで待つてみて下さい。河を越えれば、直ぐ他國ですから。」

それから尙ほも細かい處をよく打合せあつた後、二人は微笑を換して、別れた。一時間後ド・ロシユフオールは全速力で出發し、五時間後早くもアルラを通つた——その時の姿をダルトニアンは見付けたのである。

ド・ロシユフオールが出て行くか行かぬ内に、マダム・ボナシユールが入つて來た。ミラデイーは邊りに人なきを見すまして、今の男は實は自分の兄だと打明けた——「お聞き遊ばせ。兄は暴力でも私を連れ歸らうとやつて來まして、途中カルチナルの密使に出會ひました。兄はその者の後をつけました。そして淋しい道に來かると劍を抜いて、その使ひの者を殺して密書を奪ひました。そしてカルチナルの使者と化けてこゝへ現れ、一二時間後には一臺の馬車が狹下の命で私を連れに來る筈なのです。けれど、お話はこれだけではありません。あなたがマダム・ド・シユガルズから受取つたと信じてゐられるあの手紙——あれは偽造ですわ。ダルトニアンさま達は今ラ・ロシエルの戦ひに引留められてゐます。」

「どうしてそれを御存知なのですか？」

「兄は銃士の装をしてゐるカルチナルの密使達に會つたのです。その者達は門まであなたを呼出して、巴里へ運び去るつもりなのです。あ、ちよつと——」彼女は耳を澄せて、「馬の蹺音が聞えますわ、兄が出懸けるところでせう。」

ミラデイーは窓を開けて、疾驅して通り過るド・ロシユフオールへ、「さようなら、お兄さま！」と叫んだ。騎者は頭をあげて、二人の若い婦人を見、親しげにミラデイーへ手を振つて、行き過ぎた。ミラデイーは元の座に戻ると、ぢつと考へこんだ、

「あなたのお邪魔をして済みませんけれど、マダム・ボナシユールは聲を掛けた。「私は一體どうしたらいゝのでせう？ あなたは私よりも経験家ですわ、お教へ下さいました。」

「では斯うなさいまし、私はこゝを出ますと、兄が私と一緒にゐるまで、どこか此の近所で隠れて待つてゐることになつてゐます。その時私がなんとかうまく計つて、御一緒に御一緒に隠れて待つてゐることに、待つてゐませう。」

そして彼女は、尙ほ念の爲めに兄の従者を寺の前に張込ませて果してカルチナルの密使共が來るかダルトニアン等が現れるか見きはめさせようと言つた。マダム・ボナシユールは心からミラデイーを信じ込んでしまつた、そして一時間後を約して立去つた。

ミラデイーは沈思に耽つた——マダム・ボナシユールと一緒にアルマンテイルに一先づ隠れてゐるよ、その内に多くても十五日掛れば、ド・ロシユフオールは戻つて來よう。それにその十五日の間に

かの四人の銃士に復讐する最上の手段も考へつくだらう。

やがて一時間経つてマダム・ボナシユールは歸つて來た。そして、二人が夕食をたべに中庭を通り過ぎようとする時、門口に留まる馬車の音が聞えた。それはミラデイールを迎へに來た馬車に違ひなかつた。ミラデイールは近づいた冒險に歩くことも出來ぬ程胸をとどろかせてゐるマダム・ボナシユールを勵まして置いて、急いで自分の部屋へ戻つた、そしてド・ロシユフオーールの從者の姿を見ると、色た指圖を與へた。

それからマダム・ボナシユールの處へ戻つて、二人して食堂へ入つた。そして丁度、彼女を勇氣づけるために、一杯の西班牙酒を彼女の肩へ運ばせた時であつた、彼女は突然その酒盃を下に置いて叫んだ。「おや！あの音は何でせう？」

二人は耳を澄ませた、遙か遠くから數頭の馬の蹀音が段々近づいて來た。ミラデイールは立上つて、窓から外を眺めた。蹀音は愈々近くなり、遂に道のまがりかどに、二騎——五騎——八騎の姿が現れた。ミラデイールは息のつまるやうな呻り聲を出した。先頭に立つ騎者は見紛ふ方もなくダルタニアンなのだ。

「カルチナルの衛兵達ですわ。」ミラデイールはマダム・ボナシユールの方を振り返つて言つた。「一刻も猶豫ができません！逃げなさい！逃げなさい！」

「ええ、ええ、逃げませう！」併しマダム・ボナシユールは恐怖のためその場に釘付けにされて、一歩

も動くことができなかった。

二人はその驕馬の一隊が窓の下を通り過ぎる音を聞いた。ミラデイールはマダム・ボナシユールの腕を引立て、庭の方へ連れて行かうとした。併しマダム・ボナシユールは二足歩くと、膝をついて倒れてしまつた。丁度その時、銃士等の近づくのを知つて驅出さうとする馬車の輪たちの音が聞えた。續いて三四發の丸の聲がした。

ミラデイールはきつとして立留まつた、稲妻のやうな閃きが彼女の眼から射た。彼女は食卓の傍へ走寄つて、マダム・ボナシユールの盃の中へ指輪の中に秘められた毒藥をすばやくあけた。

それから、その盃をしつかりした手で取上げて、言つた——「お飲みなさい。この酒はあなたに力をつけます。お飲みなさい！」

そしてその盃をマダム・ボナシユールの肩に押付けて、一氣に飲ませさせた。そして部屋から驅出して行つた。マダム・ボナシユールは追掛けられても歩くことのできない夢を見てゐる者のやうに、心は焦りながら歩くことができないで、ミラデイールの出て行くのを見てゐた。

やがて大きな音が門のところへ聞え、間もなく靴や拍車の音が階段に響いて來た。突然、マダム・ボナシユールは高い歡喜の聲をあげて、扉の方へ突進した——「ダルタニアンの聲に氣が付いたのだ。」

「ダルタニアンさま！ダルタニアンさま！」彼女は叫んだ——「こつちです！こつちです！」
「コンスタンツ、コンスタンツ？」青年は答へた。「何處だ？何處だ？」

それと同時に、食堂の扉は打破られ、数人の男は部屋の中になだれ込んだ。マダム・ボナシユールは動く力もなく、肘掛椅子の中に倒れて了つてゐた。

ダルタニアンはまだ煙を出してゐるピストルを投捨て、愛人の前に跪づいた。

「ダルタニアンさま！ よくいらしつて下さいました！ 本統にあなたですのね！」

「さうだよ、さうだよ、コンスタンス、私達はまた會へたのだ！」 不圖ダルタニアンは彼女の手が氷のやうに冷たくなつて行くのに気が付いた。彼は驚いて水を呼んだ。

アラミスは食卓の傍へ飄寄つて、水瓶を取らうとした、がその前に突立つて、髪を逆立て目を据ゑて酒盃の一つを睨んでゐるアトリスの顔を見ると、思はず手を引込めた。

「奥さん。」アトリスは暖れた聲で言つた。「これは誰が飲んだ盃ですか？」

「私が飲んだのです。」彼女は死に行く聲で答へた。

「誰があなたにこの盃へ酒を注いだのです？」

「あの婦人ですわ。」

「それは誰です？」

「あつ、思ひ出した！ ド・ウインター伯爵夫人ですわ。」

四人は一度にあつと聲を立てた。マダム・ボナシユールの顔には死の苦悶が現れた。「ダルタニアンさま！ どこにいらつしやるの？ 私の傍を離れないで下さい！ 私は死にます！」

「コンスタンス、コンスタンス！」 ダルタニアンは氷のやうな愛人の手をしつかりと握りながら呼んだ。

併しマダム・ボナシユールの肩から細い吐息が洩れて、彼女の清く愛らしい魂は天上に昇つてしまつた。ダルタニアンは骸を腕に抱へたまゝ、自分も死人のやうに蒼ざめ冷たくなつて、泣き伏した。四人の者が悲歎に我を忘れてゐる時、一人の蒼ざめた男が戸口に現れた。彼はド・ウインター卿その人であつた。彼はミラデーの後を追掛けて來たのであつた。

第五十九章 赤マントの男

五人はストネイの街のとある旅館に泊つた。最後に自分の部屋に戻つたアトリスは、亭主から地圖を借りて、ストネイからアルマンティエールまで四本の違つた道があることを調べ、従者共を呼んだ。そして翌朝夜明けに四人の者にそれぞれ違つた道をアルマンティエールまで行かせてミラデーの行方を探させる事にした。尼寺からは明日正午埋葬の式が行はれる事を知らせて來た。

その指定の時間に、ド・ウインター卿と四人の友とは尼寺へ急いだ。併し禮拜堂の入口へ一同が導かれた時、もうアトリスの姿は見えなかつた。彼は一人の尼に頼んで庭へ案内して貰つてゐたのだつた。彼はその尼の軽い足取りについて行つて、森へ通ずる門の方へ進み、そこを開けさせて、森の中へ出て行つた。

その時一切の彼の疑ひは確められた、あの馬車が消へて行つた道はその森を廻つてゐた。アトリスは地上に目を付けたながら、その道を暫らくの間辿つて行つた。あの馬車に付添つてゐた男に加へられた傷から流れたのか、それとも馬からか、微かな血のしみが路上に點々としてゐた。更らに進んで行くと、もつと大きい血のしみが現はれ、地は馬に踏にじられてゐた。森とその呪はしい地點との間に、庭にあつたと同じ小さい足の足跡があつた、——馬車はそこで止まつたのだ。こゝで、ミラディは森から出て、馬車に入つたのだ。

この發見に満足して、アトリスは旅館へ歸つて見ると、ブランシエが焦々しながら彼を待つてゐた。萬事はアトリスの豫想した通りであつた。ブランシエはアトリスが今注意した道を進んで行つたのであつた。彼はフェステユベールの村で、居酒屋で一休みしてゐる間に、八時半過ぎ一人の夫人を連れた負傷した男がもう歩けなくなつて休んで行つたといふ事を聞込んだのであつた。その男はこの村に残り、女は換へ馬をして、尙ほも旅を續けたとのことであつた。ブランシエはその馬車を御した御者を探し當て、その夫人がフロンメルからアルマンチエールへと出發したことを知り、朝の七時にアルマンチエールに入つた。そしてその宿場で、一人の女が十一時頃唯だ獨りで来て、旅館の主人を呼んで、この近邊に暫らく滞在したいと言つたといふことを知つた。ブランシエは急いで集合所へ戻つて、他の從者達にその旅館の出口出口を番する事を頼み、自分はアトリスのところへ驅付けたのであつた。

その夜の八時頃アトリスは馬々に鞍を置かせ、ド・ウインター卿と彼の友とに出發の用意を傳へた。それからアトリスは一同を待たせて、馬に軽々と飛乗つて、何處かへ出懸けて行つた。そして十五分程すると、一人の脊の高い、假面をつけた、大きな赤マントで身を包んでゐる男を連れて戻つて來た。九時にブランシエに先導されて、この騎馬の一隊は例の馬車が取つた道を取つて、出發した。

第六十章 審判

それは暗い嵐の夜であつた。大きな雲々は天を蔽うて星を隠し、月は夜半まで昇らうとしなかつた。時々、稲光りの閃きで、道は彼等の前に白々と淋しく延びて見えた。

彼等は負傷せる從者の居るフェステユベールの寒村を黙々として過ぎ、リドシユプトルの森に沿うて進んだ。エルリエで、先導のブランシエは左に曲つた。幾度もド・ウインター卿やポルトリスやアラミスはあの赤マントの男に話掛けたが、その都度その男は黙つて頭を下げるばかりであつた。嵐は増し、雷の聲が唸り始め、烈風は騎者の毛茸や髪に嘯いた。フロメールに來る一寸前にたうとう暴風雨になつた。彼等は外套の襟を立て、雨の瀧つ瀧の中を進んだ。

この一隊がゴスカルを過ぎてあの宿屋に近付いて來た時、とある樹の影から一人の男が道の真中へ飛出して來た。それはグリモーであつた。彼はかの夫人がアルマンチエールを立つて、リス河の方へ行つたことを知らせた。で、今度はグリモーを先導として、この騎馬の一行はその河の方へ馬首を向

けた。五百歩ばかりも進むと、一筋の小川に來たので、それを涉つた。稲光りの閃きで、彼等はア
ンガンエームの村を認めた。

「あそこに居るのか？」アトースは訊ねた。グリモーは頭を振つた。そして一隊は尙ほも道をすゝ
めた。

またも稲光りが邊りをぼつと明るくした。グリモーは腕を延ばして、リス河の岸邊に立つてゐる小
さな一軒家を指さした。一つの窓に灯が點つてゐた。

「あそこだ！」アトースは言つた。その途端、溝の中にうづくまつてゐた一人の男が飛出して彼等の
方へ來た。それはムースクトンであつた。彼はその明るい窓を指さした——

「女はあそこに居ます。」

アトースは人々に戸口の方へ行くやう合圖をすると、自分は馬から飛び下りて、窓の方へ進んで行つ
た、そして低い生垣を跳越えて窓の下まで近寄つた。そして腰石の上のぼつて、中を覗きこんだ。
ランプの光で、黒いマントに包まれた一人の女が消えた火の傍の椅子の上に腰掛けてゐるのが見え
た。それこそ彼が求めてゐる女だつた！

その途端一匹の馬が嘶いた。ミラデイーは頭を上げて、——窓硝子に近くアトースの蒼ざめた顔を
見た、そして思はず金切聲を擧げた。アトースはそれと知るや、窓を押破つて、部屋の中へ躍込んだ。

居の上に立つてゐた。ミラデイーは呀つと叫んで、しりごみした。ダルタニアンの後から、ポルトー
ス、アラミス、ド・ウインター、卿及びあの赤マントの男が入つた。椅子に寄り倒れたミラデイーは義
兄の姿を見ると、怖ろしい叫び聲を立てた。

「あなた方は何御用なのです？」ミラデイーは金切聲で言つた。

「我々は、」アトースは答へた。「初めはド・ラ・フェール伯爵夫人と呼ばれ、後ミラデイー・ド・ウ
インターと呼ばれた、シャルロット・バックソンに用事があるのだ。」

「それは私です！」ミラデイーはこよない恐怖に襲はれて呟いた。「何御用ですの！」

「我々はあんたの罪にしたがつてあんたを審判するのだ。あんたは自由に辯解するがいゝ。ダルタニ
アン君、先づ第一にこの女の罪を問ふのは君だ。」

ダルタニアンは進み出て言つた——

「神と人間との前で、私はこの女がコンスタンス・ボナシユを毒殺した罪を宣告する。更に、ヴィ
ユロワから酒を送つて、私を毒殺しようとした罪を宣告する。神様は私を護つて下さつたが、ブリズ
モンと名乗る男は私の代りに死んだ。」さう言つてダルタニアンはポルトースやアラミスと一緒に部
屋の向う側へ退いた。

次に男爵が進み出た——

「神と人間との前で、私はこの女がバックソング公を暗殺させた罪を宣告する。」

「バッキンガム公が暗殺された！」居合せた者は一齊に叫んだ。

「さうです、暗殺されました。諸君が送つて下さつた警告の手紙を受取ると、私はこの女を逮捕して、一人の士官に番をさせて置きました。所が、この女はその男を瞞し込んで、彼に公を殺させたのです。こればかりでない。彼は更に言葉を繼いで——「私の兄弟は體たうに鉛色の跡を残した不思議な病氣で僅か三時間で死んだ。ミラデイー、あなたの夫は何うして死んだのだね？」

ミラデイーは両手で頭を抱へたまゝ黙つてゐた。

「今度は私の番だ。」アトリスは獅子が蛇を見て震へてゐるやうに身震ひをしながら、「私の番だ。私はこの女がまだ若い娘の頃結婚した、私は一家を擧げての反對にも拘らずこの女と結婚した。私はこの女に私の富を興へた、私の名を興へた、ところが或日私はこの女が烙印を押されてゐることを發見したのだ——この女は左肩に『百合花』を押されてゐるのだ。」

「おゝ！」ミラデイーは身を起して、「ではあの汚らしい宣告を興へた裁判所を見付けて来るかい。この刑を執行したものを見付けて来るかい。」

「黙れ！」洞聲が言つた。「それに答へるのはわしだ！」そして赤マントの男が代つて進みでた。

「あなたは何者です！」ミラデイーは恐怖に息詰り、髪を青い顔の上に振亂して叫んだ。

みんなの眼はこの男の方へ向いた——アトリスを除いて誰もこの男を知らなかつたのだ。ミラデイーの傍へゆつくりした嚴かな足取りで歩み寄ると、この見知らぬ男は顔の假面を取除けた。

ミラデイーは暫くの間に、黒い髪と髭鬚とに蔽はれた、氷のやうに無感覺な表情のその顔を、恐怖の眼で見詰めてゐた。それから、突然叫んだ。壁ぎはまで退きながら、「幽霊だ！ あの人でない！ 助けて下さい、助けて！」

「あなたは誰です？」この場の目撃者は聲を揃へて叫んだ。

「その女にお訊ねなさい。」赤マントの男は答へた。「その女は私を知つてゐます！」

「リールの刑吏だ、リールの刑吏だ！」ミラデイーは壁に両手で縋りながら叫んだ。そしてそれからばつたり兩膝をついて倒れながら——「おゝ！ 許して下さい、許して下さい！」

見知らぬ男は靜まるのを待つて、口を開いた。「左様、私はリールの刑吏です。これから私の話を申上ませう。」

總ての眼はこの男におつと見据ゑられ、この男の言葉は燃えるやうな好奇心を以て耳傾けられた。「その女は昔も今日同様美しい娘でした。そしてタンブルマールのベネデクト派の尼寺の尼僧でした。單純で信じ易い心を持つた一人の若い僧侶が、その尼寺の教會のお勤めをしてゐました。この女はそのお坊さんを唆かして、遂に成功したのです。併し宗規は嚴格を極めてゐるので、身の破滅を恐れ、その男を口説いてこの國を去らうとしました。けれどこの國を去つて一緒に飄落をし、知らない國で安氣に暮らすには、金が必要でした。所が二人共何も持つてゐません。遂にその坊さんは聖盒を盗んで賣りました。併し一緒に逃げようと支度してゐるところを、二人共逮捕されました。」

「八日後この女は牢番の息子を咬かして逃亡しました。若い坊さんは十年の懲役と烙印との宣告を受けました。私はこの女が言つた通り、リールの市の刑吏だつたのです。私は止むを得ずその罪人に烙印を押ししました。而もその罪人は、皆さん、私の兄弟なのです！ 私はその時、彼の身を滅ぼしたこの女に少くとも同じ刑罰を受けさせてやるぞと心に誓ひました。私はこの女の隠れてゐるところを突きとめて、この女を捕へ、私が自分の兄弟に押ししたと同じ恥づべき印をこの女に押ししてやりました。私がリールに歸つた翌日、私の兄弟が今度は逃亡に成功しました。そして私は共謀のけん疑を受けて、彼が見付かる迄彼の代りに入獄させられることになつたのです。私の兄弟はこの宣告の事を知りません、彼はこの女とまた一緒にになり、二人してペリーに逃げ、そこでつまらぬ牧師補の職を得ました。この女は彼の妹と世間に稱してゐたのです。この牧師補の教會がたつてゐた土地の領主はこの偽りの妹を見て、この女を懇慕するやうになりました。そしてたうとうこの女に結婚を申込んだのです。そしてこの女は自分が破滅させた男を捨てて、ド・ラ・フェール伯爵夫人となつたのです——」

みんなの眼はアトリスの方へ向けられた。アトリスは黙つて頷いた。

「その時、彼は又話を始めた。「この女に名譽も幸福も、あらゆるものを奪はれて、狂し絶望した私の兄弟はリールに歸つて、初めて私が彼の代りに受けた宣告を知り、自首して出て、その夜牢屋の窓の鐵格子で首をくづつて死にました。以上が私がこの女に宣告する罪です、以上がこの女が烙印を押しされたわけです。」

「ドルタニアン君」アトリスは言つた。「君はこの女に對してどんな刑罰を求めん？」

「死刑だ！」彼は答へた。

「死刑だ！」といふ聲が他の三人の口からも異口同音に叫ばれた。

アトリスはミラデイーの方へ手をのべて言つた——

「シオルロット・バックソン、ド・ラ・フェール伯爵夫人、ミラデイー・ド・ウインター——もし祈禱を知つてゐるなら、唱へるがい。あなたは死刑の宣告を受けたのだ。」

第六十一章 死刑執行

それは殆ど眞夜中で、月は傾いて、アルマンチエールの民家の屋根に青白い光を斜めにさしてゐた。彼等の前にはリス河が熔けた錫の河のやうにうねつてゐた。

二人の従者はミラデイーの腕を兩方から取つて引張つて來た。刑吏は彼等の後から歩み、ド・ウインター卿、ドルタニアン、ポルトリス、及びアラミスは刑吏の後に續いた。フランシェとバザンとは一番最後から來た。二人の従者はミラデイーを河岸に連れて行つた。日は固く結んでゐたが、眼は無言の雄辯を以て、彼女が見るすべての人に歎願してゐた。

河岸に着くと、刑吏はミラデイーの傍へ寄り、彼女の手と足とを縛つた。その時彼女は静寂を破つて叫び出した。「あなた方は卑怯者だ、あさましい暗殺者だ、十人も掛つて一人の女を殺すなんて。」

お聞き！もし私の命を助けなけりや、復讐が怖いぞ。」

「お前は女でない。」アトースは冷かに厳しく言つた。「人種に屬する者でない、地獄から逃げて来た悪魔だ、そこへ我々はまた送り戻すのだ。」

刑吏はミラディーを兩腕で抱へ上げて、ボートの方へ運んで行つた。

「おゝ！」彼女は叫んだ。「あなた達は私を溺死させようとするのですか？」

これらの叫び聲はどこか斷腸の響きを持つてゐたので、最初ミラディーの求刑に最も熱心であつたダルタニアンも、木の株に腰を下ろして頭を垂れ、兩耳を手の掌で蔽つてゐた。而も、それにも拘らず、彼女の叫びや威嚇を聞いてゐることが出来なかつた、彼の心は挫けた。

「おゝ、私はこんな恐ろしい光景を見てゐることができない！この女にこんな死様をさせることは同意できない！」

ミラディーはこの言葉を聞くと、望みの影がさした——「ダルタニアンさま！私があなたを愛してゐたことを思出して下さい！」

青年は立上つて、彼女の方へ一足進んだ。併しアトースも立上り、劍をすらりと抜いて、彼の行手をふさいだ。

「ダルタニアン、君がこの上一步でも出るなら、我々は劍を交へるばかりだ。」

「さあ、死刑執行人。」アトースは續けた。「そなたの職務をつくしさない。」

刑吏はボートに彼女を乗せ、自分もそれへとびのつた。

舟は二人を乗せて、リス河の左岸へと靜かに動いて行つた、その他の者は全部右岸に残つて、跪いてゐた。ミラディーは舟の中に居る間一生懸命に足を縛つてある綱を解いた。そして岸の傍に来ると、ひらりと岸に跳び移つて逃出した。併し土が濡れてゐたので、土堤の上に登ると、つるりとこつて膝をついた。

彼女は此時疑ひもなく迷信的な考へに打たれたのであらう、天帝も助けを拒んだと思つたのであらう、倒れたまゝの態度で、頭を垂れ、手を合せておつとしてゐた。

向岸の人々はその時死刑執行人が兩腕を靜かにあげるのを見た、月光は大きな劍の刀身に落ちた。彼は突如力を籠めてその兩腕を下ろした、人々は犠牲のあつと叫ぶ聲を聞いた。

第六十二章 大團圓

三日後、四人の銃士は巴里にゐた、そしてその夜、トレヴィイールのところへ何時もの通り訊ねて行つた。

「やあ、諸君。」勇敢な隊長は言つた。「さぞかしこの休暇中はお楽しみなことだつたらうね。」
「思ふ存分楽しみました。」アトースは皆なに代つて答へた。

四人の銃士がミラデーを死刑に處したことはやがてカルデナールの耳に入つた。併しダルタニアンは例の「この書の所持者は我が命令により、國家のために、現在の行動をなすものなり——リシュリュール」といふ書付を示して却つて逆ねちを喰はせたのであつた。

ラ・ロシエルはバッキンガム公の死により、英國艦隊の援助を絶たれたので、千六百二十八年十月二十八日投降條約に調印した、そして王は同年十二月二十三日に巴里へ凱旋した。

ダルタニアンは昇級した。ポルトスは軍籍を去つて、マダム・コクナールの亭主が死んだので、その後へ入夫した。アラミスはローランへの旅の後、突然姿を消して友人達への交通も絶へた。彼等はその後、マダム・ド・シユブルーズがその近親者に語つた話から、彼がナンシイの僧院に隠遁したのだといふことを知つた。

アトリスは千六百三十三年迄ダルタニアンの配下に銃士として残つてゐたが、トウレイヌへ旅をして來ると、ルーシイで僅かな財産を相続することになつたといふ口實の下に、これも又軍籍を去つたのである。

三銃士終

昭和四年三月一日印刷 昭和四年三月三日發行		版 權		三銃士	
所 有		發 行 者		譯 者	
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地		山 本 美		三 上 於 菟 吉	
發 兌		印 刷 者		改 造 社	
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地		森 江 有 三		振替口座東京八四〇二番	
		東京市外北品川宿小關五六四		電話 芝 (43) 自一一二一番 至一一二四番	

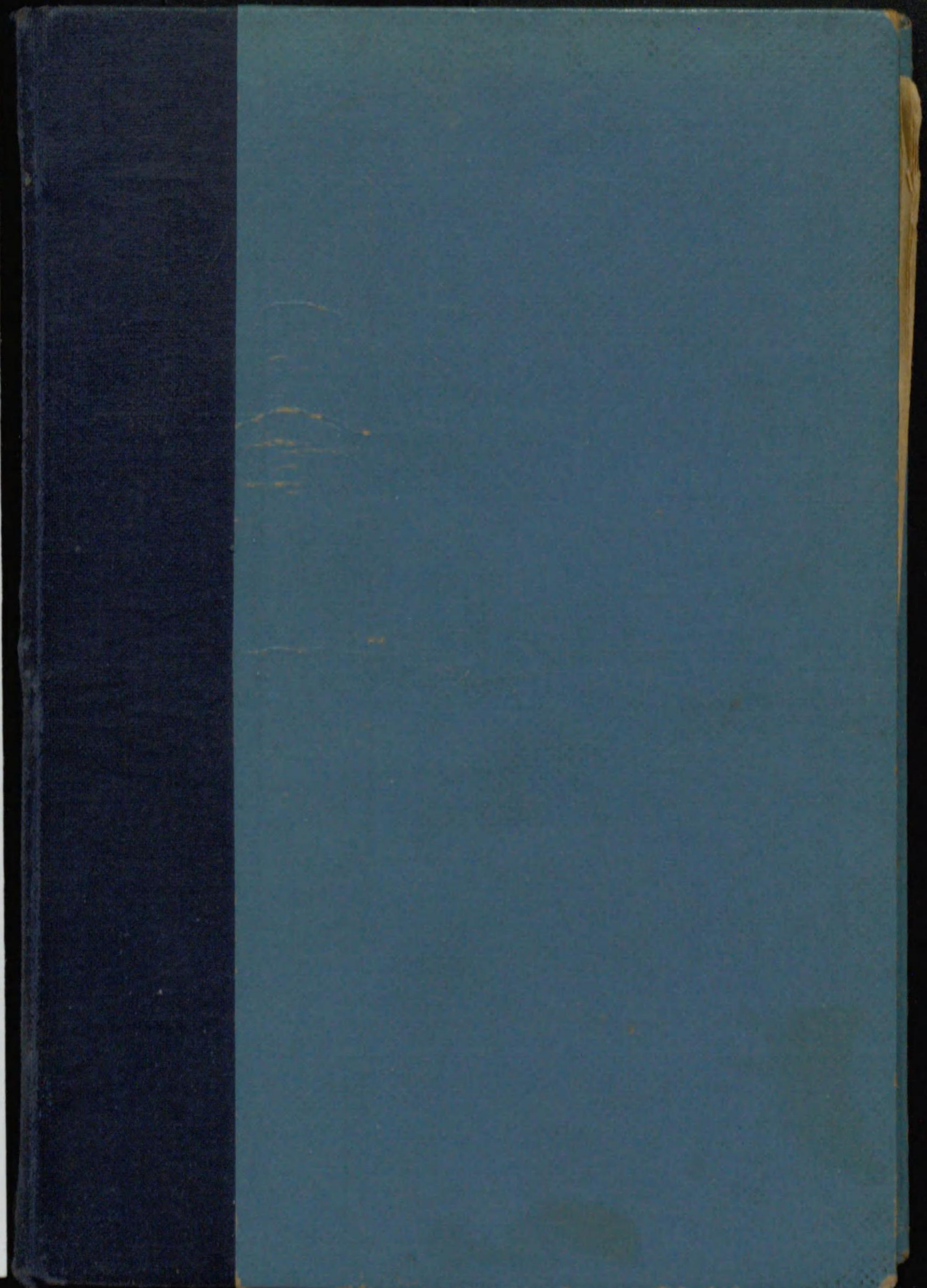
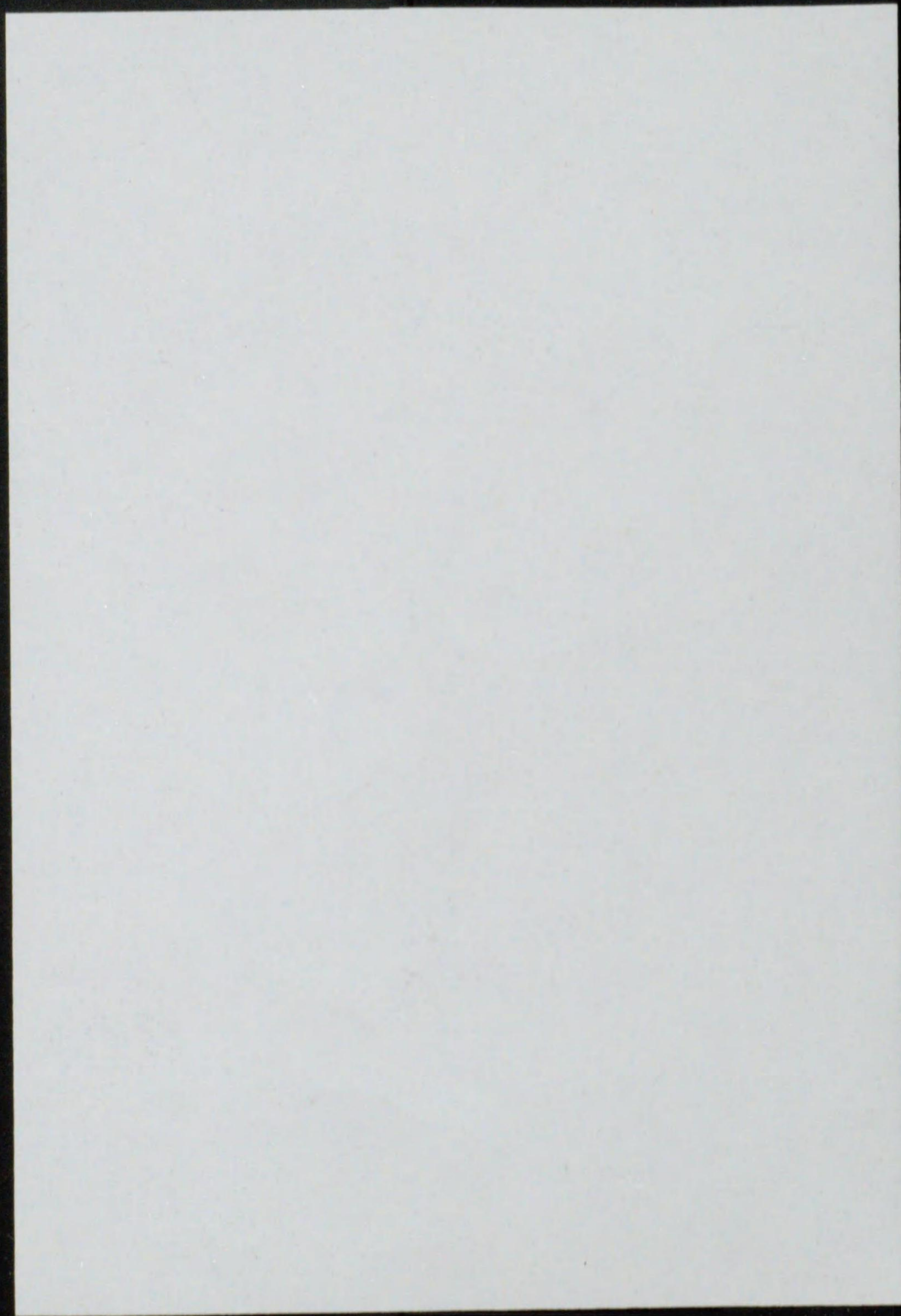
株式會社豐文社印刷

5

37
47
D
15

569

61

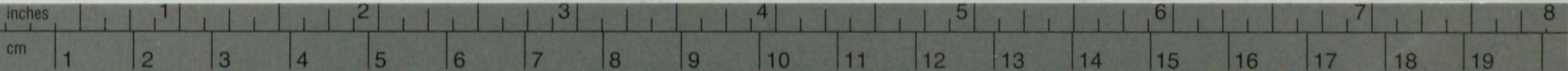


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

